
【企画】とある創作の学園都市

こなつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【企画】とある創作の学園都市

【Nコード】

N4417X

【作者名】

こなつ

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録の世界観で二次創作、つまりオリキャラだけで一から学園都市造っちゃおうぜ！という企画です。

オリジナル能力者同士を戦闘させて厨二病の血を騒がせたり、キヤラ座談会するだけの簡単かつ適当な企画ですので、オリ主二次創作小説が好きな方、禁書の世界観ちゅっちな方、禁書かじってて戦闘狂の方、文は書けないけど絵ならイケル！みたいな方、ぜひどうぞー！ レベル5は募集終了しました

また、ある程度の縛りは存在するので、それを遵守できる方でお

願います。

募集期間は2011年10月9日から、管理人が飽きない限り延々と。

詳細説明【必読】

参加なさる方は必読！

ええと、まずこんな珍妙な企画なんぞに手を出していただいてありがとうございます。大ざっぱな説明はあらずじでしたとおりなのですが、こちらでは細かい説明をば。

とある創作の学園都市とは？

こなつが立ち上げた行き当たりばつたりの企画です。オリキャラオンリー企画。主に戦闘シーンを書いたり書いたり、座談会も面白いんじゃないかなーなんて思います。あつ、『一から学園都市』というのはつまり、既存の能力者は一切居ないよ！ということになります。文は書けないけどキャラ提供だけなら、という人や、絵なら描けるよ！という人でも大歓迎。ぜひ。

参加資格

一切不問です。年齢も関係ございません。

ただ、マナーを守ればそれでいっこうに構いません。

参加方法

こなつ 「ID：113338」 こちらのIDにメッセージを送ってください。

件名に『企画参加』とか書いていただけるとありがたいです。

下記のテンプレをコピーして貼り付け、必要事項を記入してください。

氏名：

ID：

確認した後、こちらの方から小説の投稿方法などを送らせていただきます。

もしわからないことがあればご一報を。

えー、それではいよいよオリキャラ登録方法を。

募集人数

一人5人まで登録可能です。もちろんそれ以下でも構いませんが、どれだけ多くても5人です。

能力の強さ

募集する能力者は、レベル5は6人（あと1人は管理人が登録するので）、それ以下は何人でも可です。

もちろんレベル0でも構いませんが、戦闘企画だということを覚えておいてください。↑今更ですけど座談会（ry
レベル5の枠は埋まりました！

禁止事項

最強設定は原則無しとします。天下のレベル5でも、必ず弱点等を用意してください。

能力の内容については完全オリジナルでも、禁書本作から拝借しても構いません。ただし後者の場合、レベル5の能力を引用するのは禁止とします。

登録用テンプレ

参加表明のメッセージにコピーし、やはり必要事項を記入してくだ

さい。

【オリキャラ登録】

名前：

性別：

年齢：

レベル：

能力名：

能力内容：

容姿：

性格：

複数の場合はその人数分お願いします。また、能力内容に弱点なんかを書いていただけると嬉しいです。

座談会・雑談について↑NEW！

だいふく様より、チャットルームをお借りしております。ぜひぜひご活用くださいませ。ただし、参加している方優先的にお願いします。

URL：<http://9413.teacup.com/kamachi/chat>

座談会に関しては、日時等は管理人の方で指定する形が多いかと思っています。指定は活動報告等ですのでチェックお願いします。

タイマンで語りたい！なんて人が居りましたら、それは各自こそこそ：：というか、各自で連絡しあってくださいな！

長々と並べましたが、大丈夫でしたでしょうか？

如何せん企画を立ち上げるのは初めてのことなので、戸惑っていましたが、お付き合いくださると嬉しいですよ。

10月14日、ちょっと改定です。 / 11月22日、事項を増やしました。

登録キャラクター名簿【科学サイド】

登録された能力者の名簿です。

あゝわの順で並んでいます。また、魔術サイドとの被りもあります。

【asuta様より・ID157665】

名前：阿頼耶家康
あちやいえやす

性別：男

年齢：18歳

レベル：5

能力名：圧殺空間
ブレッシャースペース

能力内容：半径100m以内の圧力を操作する力。空気圧を操り物体を潰す、殴った時にかかる力を操り強化する、地面を蹴り上げる圧力を強め高速移動、圧電気によるレベル3クラスの電撃、圧力を使った電気抵抗を作り出す防御、圧力操作による真空の作成、内臓破裂がおきる程の空気弾攻撃などが可能。

また、能力がなくとも、彼には、信号機を叩き折って投げ飛ばす腕力、新幹線に追いつくスピード、トラックに跳ねられても無傷で生還する耐久力がある。

また、圧力操作で対処出来ない精神操作系の能力者、空間移動系能力者の体内への物質転移（内臓にナイフを突き刺されても平気だったりするが）等が能力自体の穴となる。といっても、後述の特異体質でカバー出来ている。

容姿：切れ長の目に、目の下に施したコウモリのタトゥー、後ろ髪の長い毛先をショッキングピンクに染めた茶髪が特徴な、the Gazetteの流鬼似の目立つ外見の美形。さらに、スカイブル

ーのタンクトップに、鯉が描かれたジーンズ、鎖で繋がれた銀色のヒトデ型の首飾りと、ファッションもとにかく目立つ。さらに、身長が199cmとデカい。体系は細身な方。

性格：能力者を（自分も含め）ある理由で嫌悪し、反対に無能力者には困難が降りかかれば体を張り、命をかける。傲慢で、馬鹿で、直情的で、キレやすいが、底抜けに優しく仲間思いで、後輩や後述のスキルアウトの新人にとっては面倒見のいい兄貴。また、アニメ好きで、ボカロ好きという、なかなかオタクな人。眼鏡っ娘好き。一人称は俺。二人称は

能力者と無能力者を狙うようなスキルアウトしか食い物にしない、最低最悪最強と評されるスキルアウト『チーム』のリーダー。掲げる目標は、『学園都市を無能力者にとって安全で、能力者にとって危険な街にすること』。スキルアウトなのでアンチスキルに何度もお世話になつては、牢屋を壊し脱獄している。

また、彼は嗅覚が異常に鋭く、AIMの匂いも嗅ぎ分けることが出来る。これで能力者の種類や、レベルが分かり、この特異体質で能力者がそうでないかを分けている。また、これはかなり正確で、能力者が演算をし、能力を発動するタイミングまで分かる。これを使い、自分の弱点となる種類の能力を持つ能力者が能力を発動する演算のタイミングに、攻撃をいれ妨害する戦法をとる。

【黒羊様より・ID181842】

名前：亞羅々戲^{あろろぎ}

性別：男

年齢：不明

レベル：ぎりっぎりレベル4

能力名：座標逆転 ボジションチェンジ

能力内容：モノの位置を入れ替える能力。勿論自分も対象に出来る。結標の能力と似ていて、対象に触る必要はないがいくつか条件がある。

？入れ替える対象をどちらも視界に入れていなければならない（但し自分が対象の場合は自分は除く）。

？対象は生物無生物問わないが、大きさは一番小さくて人間の子供（約1m弱）〜大きくてワゴン車ぐらい。重さは問わない。

距離も重さも問わない割に、入れ替えるのは自分が見える場所限定、それもサイズに制限有りとなかなか面倒な条件がある。

能力の特性通り、自分の力では十一次元上の理論値を計算出来ない事から当初はレベル3に認定されかけていたが、重さと距離（見えているという条件付き）に制限がない事、また入れ替えるのは自分でもいいう事を考慮して、ぎりぎりレベル4の認定を受けた。

容姿：真っ黒で長い髪。こけた頬。常に真っ黒なコートを羽織っている。

性格：暗部の人間。能力を使った自殺に見せかける殺人を得意とする。

自身に迫る『死』のスリルに快感を感じる狂人。

使い方は、まず自分がビルから落下。地面に落ちる前に標的と位置を入れ替え、標的はわけもわからず落下、死亡。というのが基本。

わざわざ自分が落下する意味はないが、そこが壊れてる。

正面から敵と戦う場合は、相手が自分に攻撃——相手と位置を入れ替える、自爆。が基本。多人数相手でも有効。

仮に接近戦であつても、相手と位置を入れ替えれば背中合わせの状態で入れ替わる為、能力を知らない相手は突然自分が消えたように錯覚させ、自分は悠々と振り返って無防備な背中にナイフをグサリ。

【ユーシン様より・ID172033】

名前：茨野^{いはの} アゲハ

性別：女

年齢：18歳

レベル：4

能力名：超^{テンベスト}進化論^{バイオ}

能力内容：遺伝子操作系能力者で、遺伝子を歪め、新種の植物『茨野新個体』を造る。動物にも通用するがかなり危険な作業なので自分にしか行っていない。『茨野新個体』の何種かは神経があり茨野の背中に造ったアクセス部分に接続し手足のように振るうことができる。

容姿：木の幹のような色で、腰まで伸びるロングの糸のように細い髪と、手足に鎖付けて引きずっているような歩き方が特徴的。眠ってしまいそうにみえる目つきで、唇は色も厚みも薄い。背中を中心部分は円盤を埋め込んだように変形しておりここで脊髄に『茨野新個体』をつなげている。服装は黒が多い。

性格：基本的には自分が住んでいる植物園で植物の世話をしており、人には興味なさげに見えるが、常連や知人には声を掛けるなど他者を遠ざけている訳ではなく、騒音や雑音を発するモノを嫌っている。口調は上司のような命令口調で一人称は私。

【アポリオン様より・ID121225】

名前：岩見祥吾いわみしょうご

性別：男

年齢：27歳

容姿：いつもシンプルな形の般若の仮面（口の部分が開いているので、つけたまま飲食も可能）を着用しているが、外すと火傷の跡（家が放火された際に左眼辺りを火傷）があるものの意外に整った顔立ちである。その醜い傷を隠すため、仮面をとろうとしない。取ろうとすると例え誰であろうと、極めて冷酷で殺意に満ちた目で威圧する。身長は174cmぐらい。後の特徴といえば、黒のビジネススーツ、白い汎用手袋と黒色の革靴ぐらいか。

職業：必殺仕事人

性格：人と接するとき、愛するか殺すか無関心かという極端な感情しか持てない。基本的に好戦的で、感情の赴くままに多くの人間を理由なく殺害し、数多くの人物から「人間じゃない」とまで称されている。その生い立ちから銃を持つ警官複数を生身で倒すなど、戦闘能力も極めて高い。その暴虐さゆえ「射殺止むなし」とまで言われている。

家族が殺害されて以降は、「泥を食ったことがある」と語るなど浮浪者のような生活をしてきたらしく、その名残からかトカゲを焼いたり、生卵数個をコップに割って一気飲みしたり、ムール貝を殻ごと食べた（噛み砕いたが飲み込み切れなかった貝殻の破片は流石に吐き出す）と、人間の域を超えた悪食ぶりを見せる。しかし、最近近は学園都市に住居を持つているせいか、自宅周辺のコンビニを強盗し、食料や生活用品などを大胆に盗ってきている。時々、スキルアウト達から殺して奪った札や硬貨を強盗した店に代金として置いてきている。

また途中で辞めているとは言え、高校や仕事をしていた事もある他、

自動車を運転する際はちゃんとシートベルトをし、焼きそばを食べる際はお湯を捨てるなど意外と律儀なところもある。そして意外にも女性や子供には優しい。でも、あまりに身勝手・理不尽・ふざけた人だとイライラして殺そうとする。

案外好きな人には尽くす性格で、タイプの女性と一緒にいるときはイライラもなくなってくる。その人が危険に陥るなら自分の命を顧みずに助けにいったりもする。基本美人であれば仲良くなるうとするが、性格がわがまま・高飛車・イラツとするような言動などであれば脅して態度を改めさせようとし、相手に対するイライラが一線を越えれば殺そうする。インデックスあたりが危ないかもしれない。特に無理難題でもない限り女性の頼み事は基本的に聞く。理由は「好かれないから」であり、これは幼い頃に家族が殺されてしまい、愛されることがなくなってしまったからだと考えられる。

上記の通り男性に関しては基本「殺す」対象ではあるが、心を開いた者は例外であり、食事に誘うほどにまで仲良くなることが可能である。ちなみにサディスト。酒には強く、酔った奴を肴にするレベルではあるのだが、自分からは飲む事はなく誘われた時のみである。お酒はあまり自分からガバガバ飲むタイプではなく、誘われたら飲む、というより誘われたら大抵の事は快く乗ってくれる。特に美少女のお願いなら尚更。ノリはいいほうである。でも、性格が酷い場合はキツパリと断る。超能力への関心は殺すが面倒になる程度。魔術に関しての知識は全くの皆無である。

20年前に無差別放火魔によって住んでいた家と家族を失い、復讐の為に自分もまた無差別殺人鬼になるという過去を持つ。現在はもちろん全国指名手配犯である。ちなみにすでに仇である放火魔は自身の手で殺害済みの様子。何度か政府要人暗殺請負人「死神」として殺人をよくやっており、その他には密偵のお仕事も数回行い、その際の成果は上々のもの。そのどちらも気まぐれでやっていたように、報酬は現金、しかも持ち運べる量と依頼人に釘を打っていた。現在は第10学区のボロいアパートの住民を皆殺しにし、その一室

に住んでいる模様。コンビ二強盗やスキルアウトの虐殺をしている。目的のために他人を幾度となく騙して利用するなど、頭も非常に回り戦闘時にもその傾向がみられる。

身体能力：膂力に関しては、並みの能力者を圧倒するレベルである。戦闘力を能力者レベルで表すと、軽く見積もってもレベル4上の上クラスに相当し、最悪レベル5上の中クラスであると噂されている。刀を主に使うが我流で、「斬る」や「突く」というよりは、「叩きつける」といった豪快な力押しでの戦闘を好む。そしてこれが通用しない場合は、抜刀術や突き技にすぐさまシフトする。瞬発力や短距離の移動速度については武術を極めた人間でも見切るのは難しい。長期戦も苦手ではないが、面倒なので避ける傾向がある。常に戦いの中に身を置いていたため、眼光が鋭く、大抵の者はこれを見るときはしばらく動けなくなる。ちなみにこの眼力、リラックスしている時は緩む。身体能力に関しては、一般的な常人のそれとは比較にならないほどに高い。西洋刀なしでの戦闘を行うことも可能で、どこで学んだのかは不明だが、主に拳法を使う。（殺しを目的とする戦闘を行う場合、決まって「イライラするんだア・・・！」という言いながら、首を回すという癖を持つ。）

一人称及び二人称は俺、お前又は相手の名前
何だかんだ言って、可愛い女の子には甘い。

好みのタイプは性格は従順で髪型はボブカットに近いもの。それ以外は特にこだわっていない。（胸に関しては特に選別基準ではないが、どちらかというと大きい方がいいらしい。）五和のような子が好きの様子。次にオルソラや佐天らしい（佐天はボブではないが、性格が気に入る模様）。年齢で考えると中高生が好きで、熟女や人妻は嫌い。

通称死神。名前の由来は上記のような外見に加え、容赦のない連続無差別殺人が原因だと思われる。活動範囲は学園都市全域。そして神出鬼没。が、戦いが起こっている場所には血の匂いを嗅ぎつけて

高確率で現れるようである。

【だいふく様より・ID191002】

名前：御伽有栖^{おとぎ ありす}

性別：男

年齢：17の高2

レベル：5

能力名：幻想空間^{ワンダーランド}

能力内容：自身の知りうるあらゆる物理法則や物理現象を無効にするだけではなく、ある程度の変更すら可能とする。

最大は御伽を中心に半径10メートルまで。

一方通行のような無意識下での能力使用をしており、その時は体表から30センチのところまで使用している。

弱点は知っている物理法則ではない攻撃。ちなみに御伽は既存の物理法則は全て把握している。

提督人には基本勝てない。

物理法則を掌握すれば勝てるけど。

容姿：なんか雰囲気は一方通行に似てます。金髪碧眼の切れ長で、

髪形は一方通行っぽいけど少し長い。

172cmの痩せてるイケメンさん。

性格：色々あっさりしてる、諦めが早い、やや謙虚、などなど。

戦闘になると積極的な性格に変わる。

口癖は「夢がない」一人称は俺。

本名を知っている人物はアレイスターのみ。他は謎の死を遂げたつか彼が殺した。

学園都市では能力名の『ワンダーランド幻想空間』と呼ばれている。

【だいふく様より・ID191002】

名前：朧江相馬 おほろえそうま

性別：男

年齢：17歳で高二

レベル：0

能力名：能力記憶 スキルメモリー

能力内容：無能力は勿論、超能力まであらゆる能力の影響を受けると、その能力の「自分だけの現実」を記憶して、時間制限付きで一度だけ使用する事が出来る。

能力が強いほど時間は短くなる。

この能力の解説をすると、朧江は自身の「自分だけの現実」を自分の意思で使用する事が出来ず、他の能力の影響を受けた時にその「自分だけの現実」を上書きすることでその能力を使用する事が出来る。

そのため身体検査では無能力者判定とされている。

ストックは多数あり、知り合いに発火能力者がいるため頻繁に使うものは強能力の発火能力。

能力の影響を受けると言うことは能力による攻撃を受けなければならないということなので、能力を記憶するときは必ず一撃喰らわなければならない。

容姿：身長は171cmほど。

中肉中背で髪は前髪は眼が軽く隠れる程度、サイドも耳に少しかかる程度で後ろ髪は少し長めの黒髪でところどころ寝癖がある。美形と言う程ではないが顔は整っている。

性格：クールと言う程ではないが落ち着いている。

正義感が強く、人を助けることもしばしば。

一人称は俺で、口調は上条が落ち着いた時みたいな喋り方。（僕の書いた小説を見ていただければ分かりやすいと思います）

恋愛に関しては全く興味がない。

【オウニンポヤ様より・ID174538】

名前：風祭涼 かざまつりりょう

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：『エアリアル大気支配』

能力内容：元々はレベル1の『空力使い（エアロハンド）』であったが、事故で視力を失ったことでそれを補うために大気感知能力が急激に拡大し、レベル5の『エアリアル大気支配へと進化した。

戦闘にあつては突風やカマイタチといった『空力使い（エアロハンド）』一般の能力のほか、

1・気圧を操作することで相手を押し潰したり、低酸素症（高山病）に陥れる。

2・大気中に含まれる水蒸気を摩擦させ発電、落雷を起こす。

3・身に纏った水蒸気で光を屈折させ透明化する（本人が可視光を捉える必要がないため完全透明にもなれる）。

4・気温を操作し燃焼・冷却（凍結）させる。

5・窒素を操作しての『窒素装甲（オフエンスアーマー）』を身に纏う。盾として板状に展開することも可。

6・大気の動きから周囲の状況を把握できる。本人は視力が無いも

の、この力で目視以上に周囲が視えている（大気の動きを演算し、画像として処理している）。側面・後方も感知しているため、基本的に死角はない。

7・風を操作し飛行が可能。

など、大気そのものを武器とする。

本人は6の能力を使い周囲を完全に把握しているものの、どうしても視覚より反応が一步遅れてしまったため、接近格闘戦を苦手とする（そのための『窒素装甲（オフエンスアーマー）』である）。

そのため、相手との距離を取り、（繊細な戦い方が出来ないわけではないがこちらの方が簡単なので）ごり押しの戦い方を専らとする。

容姿：150cm、40g。

明るい茶色の髪で脛まで届く長いポニーテール。目も同じ色だが、盲目のため光がなく無機質な印象を与える（御坂妹に類似）。

常盤台中学に在学のため服装は常に制服を着用。

能力で周囲を把握できるため無くとも全く支障はないが、『視覚補助機器^{メカネ}』（『冥土返し（ヘヴンキャンセラー）』謹製）をかけている。『視覚補助機器^{メカネ}』は弦の部分にマイクロカメラが仕込まれており、コードでペンダント型画像処理機器（USBメモリ程度のサイズ）と、耳の後ろに埋め込まれた端子（視神経に接続）に接続されている。

性格：普段は滝壺のような脱力系キャラ。一人称は「ウチ」で、「よー？」「なー？」語尾が延びる疑問形な口調。しかし、本気で能力を使う際はごく普通の女の子口調となる。

人当たりの良い性格だが、幼少期のトラウマにより他人を信用しきれない。

元々はレベル1の『空力使い（エアロハンド）』であったが、第十二学区での実験に参加した際、事故に遭遇し視力を失い、それを補

うために大気感知能力が急激に拡大した。

しかしながら、障害者でありながら高位能力者であることで周囲の嫉妬を買ってしまい、苛めを受ける。そしてレベル4となった際、『とある事件』が発生し転校を余儀なくされた。

転校先の小学校で御坂と知り合い、親友または好敵手（したゆう）と書く関係となる。その後、御坂と共に験算を重ね、卒業までにレベル5の『大エアリアルアリアル気支配』へと能力進化を遂げた。

小学校卒業後は常盤台中学へ進学する。進学の際、『障害者でありながら高位能力者であることへの反感』を再度受けることを恐れたため、学校側へ『書庫（バンク）』の偽装を申し出る。学校側は『条件』と提示し、その『条件』を受け入れ、レベル3の『大気使い（エアロマスター）』として登録される。

2年への進級時、レベル4の『大気使い（エアロマスター）』へと再登録される。

風祭がレベル5の第6位『大気支配（エアリアル）』であることを知るのは御坂と白井、ほか数人の学校関係者などごく僅かであり、これは『一方通行（ラレタ）』でも知らないことである。白井つながりで友人となった佐天、初春も知らない。

『超電磁砲』世界における『秘密の第6位』がイメージです。

『禁書目録』&『超電磁砲』世界では知る人ぞ知る能力者として描いてください。

『神生徒会』世界ではよく知られている人物としていただいて構いません。

【ITEM様より・ID184601】

名前：神鬼大和（かみきやまと）

性別：男

年齢：13

レベル：5

能力名：事象選択
オールセレクト

能力内容：発生した事象に対して選択肢を持つ事が出来る。簡単に言えばあった事をなかった事にしたり別の結果に変更出来る。

選択出来る事象は発生した事象のみで未来の事象に対して選択肢は持てない。また自分を除く人体への能力の直接の使用も出来ない。

容姿：髪型は鏡音レンと同じで鮮やかな茶髪。いつもホストの様な服装をしている。身長は美琴より少し高いぐらい。非常に端正な顔の持ち主でかなりのイケメン。

性格：口調と共に超攻撃的。基本的に慣れないは好まないが積極的に避ける訳ではない。残忍かつ冷酷。だが決して外道な訳ではなく無駄な争いはしない、する気がない。一人称は「オレ」

能力者でありなが聖人の頂点に君臨する「完全聖人」でもある。完全聖人は聖人と違い神と全く同じ特徴を持ち、それゆえテレズマを完全に操り身体能力も通常の聖人の倍に匹敵する。戦闘時には能力よりも圧倒的な身体能力を駆使する。最強にも見える戦闘力だが身体自体は普通の子供なので人体への負担が大きい完全聖人の力やテレズマで長時間の戦闘は出来ない。

【助けてください様より・ID125573】

名前：神夜恭介
かみやきょうすけ

性別：男

年齢：15歳

レベル：Level 10

能力名：暗黒火焰ダークフレイム

能力内容：黒い炎を使う能力者。設定上では、上条さんの幻想殺しでも消せなく、一方さんの反射も通じないという設定です。欠点は、他者より譲り受けた能力のため、たびたび暴走し、上手く使いこなせない時がある。

容姿：身長168cm、体重52kg。上条と同じ制服を着ているごく一般の高校生。細身で、ぱっちりとした目の特徴。

性格：良く笑う明るい性格。争うことを余り好まない性格で、能力に身を委ねるのは本当に危ない時だけ。口喧嘩に非常に弱く、いつも謝ってばかり、

【黒羊様より・ID181842】

名前：神矢かみや 真夜しんや

性別：男

年齢：16（高一）

レベル：0

能力名：絶対観測ホライゾン

能力内容：ずばり言えば人間離れた洞察力を発揮する。相手の動きを予測したり、違和感を見つけたりする事などが得意。この能力は結局『見えるモノを見ているだけ』という判断を受けていて、超能力ではなくただの特技とされレベルは0の扱い。

確かに普段は『常人よりかなり目が良い』程度だが、本気をだせば匂いや音といったものも視覚化する事も可能で、他にも魔力の流れ、AIM拡散力場すら視る事も出来る。それらを見極め、力の弱い箇所（力のほつれ）を見極め攻撃することで、あらゆるものを破壊す

る。

もう一つ、その優れた洞察力で疑似的な未来を視る事も出来る（ただしこれもあくまで予測の範疇であり、予知ではない）。

はたしてこれほどの力がただの特技なのかは、一部の科学者の間で議論されている。

弱点は、力の強いものを視ようとするとその分脳に負担がかかる。頭痛が発生。

容姿：猫っ毛質の茶髪（地毛）。一見して体格は細いが、剣道をやってるので筋肉は割とついている。困ったような笑顔が特徴。

性格：平凡な家庭で育った平凡な高校一年生。基本真面目な性格で正義感にあつい。その性格が災いして、争い事は嫌いだがよく厄介事に巻き込まれる。ただしどんな相手でも自分からは決して手を出さず、最初は対話から始める。

手を出す時は、あくまで相手が攻撃してきてからの正当防衛。

運動神経は良い。剣道の腕もなかなか。ただ疑似的な未来を視る眼があるので、公式でも練習でも負けなし。

所属しているわけではないが、スキルアウトとも交流あり。

【黒炉様より・ID140369】

名前：霧崎美鈴 きりさき みれい

年齢：16

レベル：4

能力名：獄炎魔獣 フレイムケルベロス

能力内容：炎の中から魔獣、ケルベロスを生成する能力。生成した

ケルベロスには石があるらしいが、真偽については美鈴のみぞ知る。炎さえあればどこでも生み出すことができるため、常にライターを持ち歩く。普通の発火能力者と違い、自身の力で発火させることができず、炎の操作もできない。能力の影響からか、炎による火傷や、熱さを感じることがない。

容姿：身長154cm、ピンクブロンドの髪を三つ編みにしている。目の色は澄んだ藍。赤い服が好み。

性格：おっとりしていてドジ。高レベルの割に成績も低い。静かな性格で、ほんわかしている。好きなものは犬、赤いもの、辛いもの、恋バナ

【OX様より・ID164163】

名前：鬼無里 桜 きむらた もみじ

性別：男

年齢：17

レベル：3（0）

能力名：虚言魔書 ブックオブライズ

能力内容：「周囲10kmを「既存の物理法則」にあてはめた現象しか発生させない」

しかし、無数のトリックとギミックを駆使してイカサマでレベル3の能力をでっちあげた。

「周囲の人間を酩酊状態にする能力」と偽っている。

容姿：メロンハットにブレザー、トランプ柄のネクタイ。
長身の案山子のような青年。

堀の深い鉤鼻。

性格：金というより利益にがめついニヒル気取り。

内面は非常な夢想家。

境遇：学園都市でまっとうに研究していたが故に「超能力の優位を脅かす」として排除された学者の息子。

父親の「研究成果」により「AIM至上主義の打倒」を目指す。

【瀬河ナツ様より・ID136851】

名前：坂崎和華

さかさきかずは

性別：女

年齢：15歳

レベル：4

能力：痛み分け（ダメージセパレート）

能力内容：自身が受けたダメージを相手にも与える能力。相手の名前さえ知っていれば発動するが、与えた本人にしかダメージは返せない上に、名前を知らないダメージは返せない為少し不便な能力。ただし、和華本人が自分を傷つけた場合のみ、ダメージを与えたい相手全員にダメージがいく。

容姿：黒髪で目が隠れてしまう程前髪は長く、後ろ髪も腰くらいまであり、目の色は赤、身長は普通です。私服は暗い感じの服オンリーで。

性格：基本的に暗くて引っ込み思案。例外として秋風（以下参照）にだけは明るい（が引っ込み思案なのは変わらず）自分の友達が傷

つけられると、とても残忍な性格になる。

どーでもいい補足、何気に身体能力が高い。普段から藁人形をデフォルメにした人形『ウラミー』を持ち歩いている。

【フニヨ様より・ID145847】

名前：草壁修くさかべしゅう

性別：男

年齢：17

レベル：4

能力名：情報戦略オペレーション

能力内容：情報を操って物に情報を付与したり演算を邪魔したり出来る

脳にかかる負荷が一般的な能力より高く1日に1時間しか使えない使用方法 例：そこらへんに転がっている石に視覚情報を付与しその石から大量に煙が出ているように見せることが出来る

（五感すべてに影響する情報を付与することは出来るが高難度演算が必要になるのであまりやらない）

普段はサポート（情報収集&交渉）に徹している

レベルが大きくなるごとに操作できる情報の量が変わる

主人公はレベル4なので他人に情報を”付与”は出来ない（他人の体から煙が出ているように見せるなどは出来ない）

戦いでは近くにある石に自分の姿の情報を付与し（簡易的に説明するとホログラム）それを匣に銃で攻撃したり日本刀の長さを短いナイフに見せて間合いを勘違いさせたりして攻撃するのが主流

容姿：綺麗な黒髪ロングで目は黒色 顔は良く体は中世的でよく女に間違われることから

初対面の人にはしっかりと男と認識するように自分の体に情報を付与したりする

性格：思考がずれている、天然に近い

一人称は基本『俺』基本チャラ男口調だが真面目なときはチャラ男口調をやめ普通にしゃべる（イメージとしては土御門に近い）

好奇心に基づいた実験の協力を頼んだりすることはあるが相手が嫌がることはしない主義

例：電気系能力者と二人で協力すれば無料で地デジ見えるんじゃない？

といきなり考え始めそれを理由に協力を求めようとする

↓断られた場合は「あつ、嫌？ああ、なら良いんだよ別にー」とあっさり引き下がる

あまりされることはないがOKされたら実権後飯をおごるなど礼は忘れない

基本LVは気にせず広く浅く付き合うタイプ

【だいふく様より・ID191002】

名前：琴座織姫
このざおりひめ
スターダスト

『星の欠片』

性別：女

年齢：13（置き去り）

レベル：3

能力：法則消去
リセットルール

能力内容：幻想空間の演算パターンを一部植え付けられたのだが成功はせず、自分の身に起きている些細な物理法則（慣性の法則など）

のみを無効にすることが出来る。

性格：戦闘大嫌いな女の子。拗ねるとかなり長いがなつくのも早い。おてんばというか、性格もかなり幼いため思った事をすぐに口に出す。

一人称：私、二人称：名前で呼ぶか、あなた。

口癖など：口癖という程ではないが「でも」をよく使う。

語尾は「〜だもん」となることが多い。

容姿：茶色がかった肩ぐらいまでの毛先の揃っていない髪。頭には小さなアホ毛が立っている。

13歳なのだが年の割には成長が遅く、身長は139とかなり小さい。痩せている訳でもなく、太っている訳でもない微妙な体型。顔はもちろん童顔でくりつとした焦げ茶っぽい瞳をしている。

ちなみに胸は無い…いや、かなり小さい。

過去：置き去りとして、『超能力者複製（レベル5コピー）計画』の実験台として利用されたが失敗し、現在の能力を手に入れた。

研究者からは『失敗作品』^{ノットサクセス}と言われることが殆どだが、一部の研究者からは『星の欠片』^{スターダスト}とも呼ばれており、レベル5に成長する見込みが無いこともない。

彼女は自分の名前を覚えておらず、彼女の名前を知っているのはとある研究者ただ一人。

備考：幻想空間からは『星の欠片』^{スターダスト}と呼ばれているが、いつかは自分の名前を思い出して、名前で呼んで貰いたいと思っている。

【管理人より】

名前：細波 さざなみ むつき 六月

性別：女

年齢：16

レベル：1

能力名：ダメージカウンター
衝撃貯蓄

能力内容：受けたダメージを好きなときにエネルギーとして放出できる。ただしレベル1のため、ダメージを受ければ痛いし長時間エネルギーを溜め込むことができない。使い勝手の悪い能力ともいう。

容姿：ぼつさばさの赤い髪に、よれよれのセーラー服を着ている。目の下の隈は濃く、正直妖怪にしか見えない。ストレスをそのまま具現したような人。身長164センチ。

性格：かなり自虐的な人。被害妄想が強い。ただ足が常人より速いことだけが自慢らしい。戦闘は大抵「いいようせあたしをいじめて楽しむんでしょいいよやればいいよ」みたいなノリで受けてくれる。喋るときは一気に喋る。どんなに長くても息継ぎ無し。一人称は『あたし』。

【柊 千終様より・ID】

名前：四之森誠凜 しのもりせいりん

性別：男

年齢：16歳

レベル：4

能力名：ハザードリセット
衝撃封鎖

能力内容：あらゆる攻撃のダメージを物理的な衝撃と認識して反射する能力。要約すればダメージを跳ね返す。特徴として受けたダメージの大小及び対象物との距離に関係なく威力を操作してぶつける事が可能。

例）自らのパンチの威力を自分に反射して、威力を操作し砲弾並みの破壊力を0距離でぶつける。

足で地面を叩きつけた威力を操作して、相手の足元を爆砕させる等。

容姿：茶色がかった耳元まである黒髪にブラウンの目。体格は細身だが、貧弱ではない。身長は171センチで平均並み。常に灰色のロングTシャツの上にパーカー、ダメージジーンズを身につけている。

性格：元々は学園都市の『闇』の研究機関で実験体となっていた。よって現在は暗部ではないが闇を知っている。過去が過去だけに性格は粗暴で好戦的。敵には容赦しないし、攻撃してくるのならば例え知り合いでも全力で叩き潰すが、完全に悪という訳ではなく所々に甘さが見える。一方通行と垣根帝督の性格を足して2で割ったような感じ。

【灰空様より・ID185419】

名前：守道途鷹すじつ みちたか

性別：男

年齢：18

レベル：5

能力名：元レベル3「頭上注意」改造後「パーフェクトレポート完全移動」

能力内容：触れたモノは当然の事、彼の能力は視界の中に移っている者すべてを自在に動かす事が出来る。

ただし本来の使い方では自分の体の周りに薄く触覚を作っており、それに触れると同時に接触箇所を含めた直径30cmの円状に挟まれて、挟られて消失したモノごと11次元を経由して上空にテレポトする。

自身をテレポトしながら周囲にある武器になりそうな物を使って攻撃してくる。

容姿：

いつもくろーい制服に雨カッパを被りを着ている
目には生氣はなくマスターからの依頼がなければただの人形にすぎない。

性格：テレポーターの弱点である感情や痛覚は脳を改造する事で完全に除去されている。そのため暗算のミスなどはない。変わりに感情はほとんどない。ただもくもくつとターゲットを追い詰めて殺すただし、彼も人なので皆から波状攻撃＋フルボッコされたら死にます。

【OX様より・ID164163】

名前：炭津^{すみつ} アヤメ

性別：女

年齢：12

レベル：0

フラッディーハートランド

能力名：残留死念

能力内容：「幽霊のようなものを発生させる能力」

正確にはその場に残った残留思念から生前の人格と姿を喋る幻影のような形で作り出す力。

強烈な恐怖感が不快感を感じさせ、見たものの精神をネガティブにする。

容姿：黒いワイシャツに赤のチェックのスカート。ややパンク気味。

性格：いくつもの「人格」からの影響でジジイのような思考と喋りをする。

その「人格」の元となった「残留思念」は鬼無里 葉赤。鬼無里 椋の祖父である。

彼と彼女の性格は、厭世的で諦め気味、躁病的。

つまりは、ひどく枯れた男である。

【管理人より】

名前：竜守綾季 たつもり あやき

性別：女

年齢：14歳

レベル：5

能力名：万有引力 アトラクタ

能力内容：あらゆる引力を操作する能力。正確に言うと、物体と物体の間に存在している引力を強めたり弱めたりできる能力。質量さえあればそれは可能だが、綾季の視界に入っていなかったりすると操れない。（自分を軸にして周りに干渉することは可能）つまり効果範囲は綾季の目が届く範囲。光や音、熱などは質量を持たないため操れないが、大気中の水蒸気やら何やらでどうにかしてしまう。

質量の限界は水素レベルの小さな分子から、クジラさんだつて大丈夫。電子同士の引力を操り、電磁波を発生させることも可能。攻撃に使えるもするが、逆に電気を打ち消すことも可能。超電磁砲は打ち消すことができる。万能な能力である。

容姿：身長148センチ。肩までの青みがかつた黒髪を無理やりポニーテールにしている。万年半袖短パン少女。

性格：基本荒事は好まない、というか大嫌い。戦闘になつても第一に逃げることを優先するような子。普段では負けず嫌いだったりするけれど元気娘。というか聖母。一人称は『綾季』。「喧嘩っ！？だ、だめだよだつてそんなことしたら……痛いよっ！！」みたいなことを言つて相手の神経を逆撫でさせるのが得意。ただし無自覚だけれども。

【asuta様より・ID157665】

名前：テレサ（大王命名）

性別：女

年齢：（大王の見立てでは）17歳

レベル：測定不能

能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）

能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。10階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、4メートルの巨大なチェインソーと、ガトリングレールガンを武器に戦う。なお、魔術について知らないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも

言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル5クラス
の肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。

容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真つ赤な瞳
が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。
（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。

性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をして
いる。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテ
レサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディ
ーガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの
人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理や
り抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、
彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の
後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の
回りの世話もしている。

【ニシン様より・ID132268】

名前：東城時人とじつよときと

性別：男

年齢：16

ジャッジメント

職業：風紀委員第一七七支部所属

レベル：レベル0（能力というよりは特異体質）

能力名：名前をつけるとしたら身体調律

能力内容：筋力から視力、聴力などの五感挙句は自然治癒力の活性
化などの身体に備わってるあらゆるものを任意で上昇させる事が出

来る。使用の際には左目が碧く染まる。蹴りでコンクリートを砕いたり、至近距離からの弾丸を回避したりなどが可能となる。がその分身体への負担も大きく長時間の使用や連続での使用は危険。目安として左目から出血↓身体が動かなくなり行動不能となる。また左目から症状が現れるため左目が使用不可になり死角にもなる。その為長期戦になればなるほど不利になる。

基本的には上記の体質？能力？と常に持ち歩いている刀（能力を斬る事ができる特殊な刀）を用いた近接戦闘が得意である。

容姿：黒い瞳に程よい長さの黒髪で中肉中背の見た目ごく普通の高校生。

性格：世話好き、お人好し、家事が好きという主夫特性を持った典型的なお人好しキャラ。滅多にキレる事は無い文キレとかなり怖いらしい。常に周りに気を配っているため状況把握能力も高く特に慌てることは少ない。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：常闇直人 とこやみなおと

性別：男

レベル：5

能力名：黒之微笑 ダークフエンサー

能力内容：影や闇を操る能力、本来影や闇を操るだけでは『大能力者』だが、本人の影や闇の印象を変えることで内容を変えることが出来る。応用がかなり利く能力。通常の状態だと切れ味のいい影イメージはハガレンのプライド　だが、マイナスの印象をつけることで圧縮したり電子を操ったり、拒絶したりすることも出来る。し

かし、その分光に弱く、日が出ている間は能力を使うことが出来ない。また、日の光を浴びると極端に衰弱する。

- ・能力の存在：常闇は脳に直接魔術の『陰陽術』が刻まれており、能力者でありながら魔術の知識がある

そのため、魔術の知識を使うことで能力を格段に強化出来る。

- ・現在の能力の力：基本的に自分の影、闇に陰陽術の陰の属性が付与できる。ただし、一つ付与している状態で、さらに付与することは出来ない。

付与できる属性

電子・圧縮

反発・拒絶

幻・消滅

重力・湾曲

水・電気

硬化・空間 e t c . . .

また陰の属性を自分に付与することで、それ自体になることが可能である

例 人体↓影、水、電気

これを使うことにより、自分自身の性別を変えることも出来る。本人はあまり使わないが。

容姿：男とも女ともとれる

性格：昼間はただの根倉野郎だが、夜になると気が強くなり笑顔が増える。また共通で困っている人を見過ごせず、よく事件に首を突っ込む。外道を許さず、子供に手を出そうものなら病院行き確定である。また裏の人間であり、信条は『殺られる前に殺る』、その通りに奇襲や速攻が得意であり、一瞬で命を奪う。また、ネコ好きである。さらにハーレム持ちである

【雨季様より・ID79970】

名前：中田雄二
なかつたゆうじ

性別：男

年齢：18

レベル：3

能力名：見えざる手
マジックハンド

能力内容：自分の見えている範囲に透明な手を二つまで出現させる能力。手自体は透明な事以外は能力者の手と全く変わらず、更に透明な手が傷付くと能力者の手まで傷が付く。しかしこの能力の最も特異な点は『見えている範囲』に能力を発動できる事である。望遠鏡などで遠くから見た場所に出現させるのはもちろん、リアルタイムで動いているならば映像の先にも透明な手を出現させる事が出来る。防犯カメラだらけの場所は能力者のテリトリーと言っても過言ではない。

容姿：没個性の塊。黒髪黒目に黒ぶちメガネ。高校を卒業して警備会社に入社してからはほぼ常に警備服である。休みの日にもモノクロの服を着ていて、彼だけ色がないように見える。

性格：目立つことを好まず、なるべく人目につかないように行動をする。だから警備会社で監視カメラを眺めつつ、不審者がいればその能力で捕まえるような事をしている。しかし本人としてはそんな性格を直してもっと社交的になりたいようだが、それが直るのは遠い未来になりそうだ。一人称は自分。二人称はあなた。

【asuta様より・ID157665】

名前：永松大王 ながまつおおきみ

性別：男

年齢：15歳（高校生）

レベル：4（書類上）

能力名：断頭奔流 ウォーターソウ

能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マッハ16で、操作できる重量の限界は5.2t、操作範囲は自身を中心とした半径25M、1Lの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、1週間は歩行不能。さらに、体重が3キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生成する）得意技は自身の通り名である、ウォーターカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粹を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいっている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。身長170cm、体重51kg。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では、自分の退屈を埋めるためにおもしろいことを探し、その実行と成就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みこむイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モ

ードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル5にランクインすると目立ったことが出来なくなってしまう』として、自分のレベルを4にしている。つまり本来の実力はレベル5。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは2』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

魔法名：scio050（全てを知る欲望）

使用する魔術：天使文字とギリシャ文字をこちゃ混ぜにし、それを十字教の法則に当てはめた大王が独自に開発した魔術を使用する。詠唱の代わりに、空中に指で（ペンなどでも可能）文字を書き魔術を発動させる。彼自身の魔術的な属性が炎であるため、炎の魔術を頻繁に使う。また、『断頭奔流』との組み合わせが可能で、水の魔術も使用頻度が高い。能力者であるので、普通に魔術を使えば、体に負担をかけ、腹から血を噴いたりするが、水の操作である程度は止血もできる為、14、5回は魔術をうてる。後述の融合後は、ブエルが永松の魔術の代理演算を行う為、魔術による負荷が消える。

ブエルとの融合：彼が契約する悪魔、ブエルと融合する。この状態

になると、背中から彼の魔術と科学の属性を象徴する『炎の右翼』
『水の左翼』が生え、左肩から山羊の脚が五本連なり、手のような
形になった腕『悪魔の腕』が生える。この状態になった大王は、
1・ブエルが大王の魔術の代理演算をする為、ノーリスクで魔術を
撃てる。

2・元来無尽蔵と言われてもおかしくない魔力にブエルの悪魔の魔
力が上乘せされ、ミカエルクラスの魔力量になる。

3・魔術の威力が上がる。

4・断頭奔流のスペックが向上する。

5・ブエルの魔術『薬学奇跡』をオートで発動して超回復する。

6・『現象に対する法則の入手』（後述）を得る。

『悪魔の腕』：フルパワーで振るえば、『竜王の吐息』に匹敵する
威力を発揮。防御に回れば『歩く教会』を超える防御性能を発揮す
る。しかし、これはこの腕の氷山の一角に過ぎず、実際の役割は『
現象に対する法則の入手』を行うこと。簡単に言えば、目の前の敵
や現象に対処し、確実に殲滅する為に最適な能力、魔術を掠めとる
力。『この次元』だけでなく、『天使』や『悪魔』のいる次元の魔
術や能力も掠めとれる。一度使った力は記憶して、自らの意志で使
用することが可能。しかし、あくまでそれは『融合』状態の時のみ
ちなみに、永松が好んで使用するのは、地獄の王の一人パイモンの
『西獄の炎』、ベリアルの『火戦車』、智天使長ケルビエルの『光
輝シエキナー』。

弱点：融合前にかたをつければオールok。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：橋本^{はしもと}

性別：男

年齢：？

レベル：4

能力名：死屍累々（ポイズンダウナー）

能力内容：全身の穴という穴から神経性の猛毒を噴き出す。ただし、猛毒は即死という訳でなく。じわじわと足の神経から汚染していき、最終的には脳に至り死亡する。能力者の周りには毒に汚染されて地面に這いつくばって死んでいる屍が周りに敷き詰められる。まさに死屍累々。しかし、発火能力者に弱く、毒を燃やされてしまったは何もできなくなる。さらに能力者自体に戦闘力はなく、ケン力をするようなものなら中学生にも負ける

因みに毒は毎回変わり、抗体は作れない。さらに有色ガスと無色ガスに自由に変えることが出来る

容姿：まさに極悪人、ヤクザとかそんな者ではなく、とにかく極悪人

性格：自己中心的、自分が邪魔だと思えば遠慮なく殺すし、自分が欲しい物、又は人はどんなことをしようとも手に入れようとする。

拒めば同じく遠慮なく殺す。口癖は『屍決定』実は可愛いもの好き、あと赤ちゃん好き

【瀬河ナツ様より・ID136851】

名前：藤斑秋風
ふじむらあきかぜ

年齢：15

性別：男

レベル：3

能力：欠落回路
ショートサーキット

能力内容：相手の能力を一時的に封じる能力。本人のレベル以下の能力者にはかなり有効だが、レベル4、5には最大一分が限界、そ

の気になれば封じられていても能力が出せる（ただしその場合はかなりの激痛が頭を襲う）、一度使うとしばらくは同じ相手に使えないと微妙な能力。

容姿：金髪（染めてます）に赤い瞳で背は高め。服装はヤンキーみたいなちよつとガラの悪いファッション。

性格：ぶっきらぼうだが根っこは優しく友達思い。和華を大切に思っているらしく、和華が傷つけられるとブチキれる。
どーでもいい補足、喧嘩は滅法強い。普段から怨霊？をデフォルメにした人形『ノロイ』を持ち歩いている。

【管理人より】

名前：二葉 ふたば 真雪 まゆき

性別：男

年齢：17

レベル：3

能力名：瞬間移動 テレポート

能力内容：知つてのとおりなので書きやすいかと。ただレベル3なので、自身の転移は出来ない。戦闘スタイルとしては手持ちのものを何でも使っちゃう人。シャーペンでも定規でも彼にとつては武器になる。相手の身体に転移させることができるが人体の中心はどうしても座標がずれるらしい。四肢を最初から狙う人。

容姿：身長176センチ。黒髪短髪。毛先は少しはねている。ヘアピン装備。いつもはブレザーの制服を着崩している。文房具一式INブレザー。

性格：いわゆるクソビッチ。虐められたら虐められたその倍だけボコボコにしたくなるなんていうDMでDSなわけのわからない人。
一人称は『俺』。

【コーシン様より・ID172033】

名前：不破 飛鳥（フワ アスカ）

性別：女

年齢：13歳

レベル：2

アドバンスワーク

能力名：身体強化

能力内容：自身の身体能力を外側から補強する能力。反動を相殺、反射速度や傷の回復速度の高速化、握力、脚力増加など。

演算を無意識下で行っているため開発による成長は見込めないが、実戦での上限は未知数。基本は黒いバットケースに入れている木刀を振り回し戦う。

容姿：紫を少し混ぜた黒に絹のような髪質、長身で健康的なスタイルの良さを持っている。服装は動きやすいTシャツ短パン、制服など。

性格：モデルのような外見だが、内面は子どもっぽく素直で活発な柵川中学の二年生の関西弁少女。一人称はウチ。

活発ではあるが、指示する側ではなく、必ずされる側であり、自分から行動しない受動的な性格でもある。能力の影響で運動神経が優れているが、演算を無意識に行っているらしく、勉強面に応用できないので成績は平均程度。経験値獲得のため、闘いは申し込めば断

らない。肉体派と闘いたい人はどうぞ。

【渡様より・ID64533】

名前：紅渡音也

べにわたりおとや

性別：男

年齢：16歳

ブラッディローズ

霊装：血薔薇園

美しいフォルムと音色を奏でるバイオリン。

かつてその音色で怒れる人々の負の感情を清め、戦争が無くなった事がある。

しかし、持つものの感情により音色は変わり、負の感情を抱きながら弾くとバイオリンから茨が現れ周りを見境なく血に染めた事によりその名がつけられた。

容姿：茶髪で髪は耳が被るか被らないかぐらいで常にマフラーに見える長いスカーフを巻いており、バイオリンケースを持ち歩いている。

性格：バカで自由気ままで自意識過剰でナンパ癖が酷いが、本気で惚れた女は意地でも守り抜き、どんな事をしてでも助けたいと思う気持ちはバカ正直突っ走る熱血漢な部分がある。

暇さえあれば、花畑でバイオリンを弾いており、バイオリンの腕前は聞くもの全てを虜にするほどうまい。ナンパも、堕ちた女性は少なくは無く、逆に捨てた女性も少なくは無い。

能力は無く、魔術サイドの人間でも無いが学園都市にはただの気まぐれで来た。

高校の面接で突然バイオリンを弾いて、それが面接官の印象に残り

合格した破天荒な過去があり、学校では伝説として残っている。
バイオリンは家宝であり肌身離さず持つており、花畑で弾くのは気まぐれ。

夢は教科書に載るほど有名になること。

バイオリンを作る事も出来、質屋に高値で売っている。

好物は無いが、愛する人が作る物なら残さず完食してしまう。

愛する人が近くにいて喧嘩を売られれば調子にのって良いところを見せようとして諦めずに這い上がり、最後は・・・。

【管理人より】

名前：光谷 みつたに 桜 さくら

性別：男

年齢：13

レベル：2

能力名：立体映像 ホログラム

能力内容：相手に物体を見せるように錯覚させる能力。それだけ。
直接的な攻撃力はない。戦闘時はがむしゃらに使って合間を縫ってハンマーを振り回す。そのハンマーも普通の日曜大工用のため大きくもない。

容姿：普通に少年。栗色の髪を短くしている。身長153センチであまり高くない。普段はどういうわけだか作業服を着ている。

性格：究極のビビリ。不意打ちされたとりあえずハンマーを振り回す。怖いことがあるととりあえずハンマーを振り回す。ビビリのお陰か異様に感覚が鋭い。まあまあ書きやすいんじゃないかなあ。

一人称は『僕』。

【管理人より】

名前：ライエ

性別：男

年齢：16歳

レベル：4

能力名：絶対排斥^{レジスタント}

能力内容：物体と物体の間に存在する斥力（物体同士を退け合う力）を強めたり弱めたりする能力。極めて正確に言くと、元々物体と物体同士には斥力が無いのだが、それを生み出す能力^{アトラクタ}。綾季の万有引力と対になる能力といってもいいかも。ただこちらの方が若干精度が落ちる（分子レベルでの操作は不可）上、効果範囲が綾季より狭くなる。70メートルが限界。戦闘時は釘を使用する。斥力という概念がおぼろげなため、能力自体はわりと稀。

容姿：真っ直ぐの金髪に碧眼。例えでいうならガラス細工。中性的な感じ。ハーフらしいけどファミリーネームを明かしていないため定かではない。身長168センチに釣り合わない体重。

性格：無関心。とにかく無関心。自分に関係しなければ基本大人しいが、面倒ごとになるととりあえずぶっ潰そうかな、という気持ちになる。一人称は『俺』。大抵の場合大声はあげない。静か。

異常なまでに綾季に執着している。本人も自覚があり、自分自身なぜそうなのかわからない。ただ、綾季が居ないと自分はどうかになってしまっている。これもなぜかわからない。

【黒羊様より・ID181842】

名前：忘 わすめる 善人 ぜんじん（本名不明）

性別：男（？）

年齢：12歳（中学一）

レベル：4（忘という少年のレベルは1）

能力名：盗作世界 ミラーリアリテイ

能力内容：他人の顔、声、体格、指紋まで似せる事のできる肉體変 メタモルフォ化の能力かと思われていたが、実際はもつと恐ろしいものだった。姿形だけでなく、相手の『自分だけの世界』 パーソナルリアリテイ までも真似てしまう。簡単にいえば能力のコピー。

だが、勿論そのまま再現できるわけはなく、真似た能力は1ランクほど落ちる。つまり仮にレベル5の超能力を真似てもレベル4までしか再現出来ない。レベル3ならレベル2、とどんどん下がっていく。

ちなみに、相手がレベル0だと姿形はコピーできるが能力は使えない。

容姿：おかつぱ頭の少年。

性格：忘という少年は元々コピーした相手の一人に過ぎない。しかしあまりにも多くの人間の外見や能力をコピーしすぎて、本来の名前も姿も忘れてしまった。なので本当は高校生かもしれないし、もしかしたら女かもしれない。

自分というものを見失った超能力者。

とにかく他人のモノが好き。相手が持っていればそれを欲しがり、食事の時も『美味しそうだね。僕のと交換しよう？』と毎回言うてくる。

他人のモノが欲しくなる。これが彼の能力に影響しているのだと思われる。

登録キャラクター名簿【魔術サイド】

登録された魔術師の名簿です。

あゝわ順に並んでいます。また、科学サイドとの被りもあります。

【翔泳様より・ID89505】

名前：アスヤリノア

性別：女

年齢：16

魔法名：Magnum023「その音を偉大なる祖に捧ぐ」

能力：『神の声』

あらゆる音を奏でる声。会話の中にも不特定多数の音を混ぜることによって人体に影響を与える事が出来たり、楽器の音を再現する事も可能。音を奏でる際には激しい行動は出来ない為、1対1には不向きである。

容姿：身長149.5センチ。金色のショートヘアで緑眼。ノーマルな黒い修道服を着ていたが、近代的な物にしようと色々いじった結果、インナーは下着のように上下に分かれ、下はその上にハーフのスカート。腰から下にかけて半分に切ってちょうどよい大きさになったマントが細いベルトで固定されており、上半身はへそくらいまでの法被のようになっていて中央はボタンで止めてある。

性格：活発気ままな性格。活動している9割は明るい性格だが、たまにブルーになると無意識に声を発動させてしまい、周りに色々な影響を与えてしまうこともある。

一人称が名前。

「アスヤは」

【翔泳様より・ID89505】

名前：アルハノア

性別：男

年齢：16

魔法名：Magnum489「私は偉大なる祖を称える」

能力：『神の手』

創造主たる手で、神々が作り出したあらゆる物を一時的に作り出すことの出来る力。主に零装を作り出す事が多い。一度に一つずつしか作り出せず、新たなものを作り出すためにはそれを破棄して次の物を生み出さなければならぬ。ただ、人間が作った物を作ることは出来ない。

容姿：身長：170センチ。金色の短髪で碧眼。服装は動きやすさを重視する為に、下はズボン、上は革ジャンの様な神父服を着ている。中央のボタンを止めずにその下には何も着ていない為、上半身は体の中心部分が見えている様な状態になっている。

性格：魔法名とは裏腹にそんな事は微塵も思っていない軽い奴。戦うのが大好きで、強い魔術師を見つけると何かしら理由を付けて戦いたがる。ちなみに魔法名の489は4「し」8「ば」9「く」である。その魔法名を名乗っているのは、「そうしないとうるさい奴がいるから」と言う理由。

口癖は「〜じゃん」

「戦っちゃえばいいじゃん」

【フニヨ様より・ID145847】

偽名：浦葦 うらあし 善口本名：浦葦 うらあし 善行 ぜんこう

性別：男

年齢：不明（本人は永遠の18歳と言っている）

使用魔術：『嘘笑い』（liegen）と『本物の肉体』（Wahrheit）

魔術名：「Heuchelei999」（意味は、すべてが偽善）

魔術内容（嘘笑い）：発動中に嘘を言っていると嘘が本当になったように、『感じる』

そして嘘をばらした瞬間に元に戻る、

効果範囲は独自のルーンから半径3メートル、基本はルーンを刻んだ石をばら撒いたり壁に刻んだり紙に書いて張り巡らしたりして効果範囲を広げる、自分の背中と手のひらに小さくルーンを刻んでいる、

魔術内容（本物の肉体）：身体能力強化の魔術、使用中は聖人並みの身体能力を得られる、1日7時間しか使えない、天体関係の魔術のため、

使用例1（嘘笑い）：嘘で君の腕は今切り落とした、と効果範囲内で言っていると腕が切り落とされたかのように見え、痛みを感じ、神経も全部遮断され腕がなくなったように感じる、つまり腕を”使わなく”なる、「腕が切り落とされたのは嘘」”というように嘘だとバラすと腕を失ったと言う”意識”がなくなり腕も元に戻る、効果範囲外に出ると元に戻る

使用例2（本物の肉体）：嘘笑いで自分を見えなくし、本物の肉体を使い殴ったり蹴ったりする、

容姿：金髪に青い目好印象を受ける青少年、嘘笑いを使うと目と髪

の色が黒くなる、（黒髪黒目が本来の色）

性格：基本はいい事をしたり悩みを聞くが、それは恩を売るためとつながりを強くするため、偽善者、仲が良かった友人が“偶然”待ち合わせ場所の前で拉致され“偶然”行方不明になり、“偶然”研究所から死体で見つかりその（主人公の嫌いな）研究所がつづれる、など一人称は「僕」で基本ですます調、普段は偽名の浦葦うらよし善ぜん行こうを名乗っている、いろんなところにふらふらしている事から流浪者とも呼ばれている

暗部にも深いかかわりがありフリーの傭兵のようなことをしている素で善行をしているやつを嫌っており避けるように行動する

【ITEM様より・ID184601】

名前：神鬼大和かみきやまと

性別：男

年齢：13

レベル：5

能力名：事象選択オールセレクト

能力内容：発生した事象に対して選択肢を持つ事が出来る。簡単に言えばあった事をなかった事にしたり別の結果に変更出来る。

選択出来る事象は発生した事象のみで未来の事象に対して選択肢は持てない。また自分を除く人体への能力の直接の使用も出来ない。

容姿：髪型は鏡音レンと同じで鮮やかな茶髪。いつもホストの様な服装をしている。身長は美琴より少し高いくらい。非常に端正な顔の持ち主でかなりのイケメン。

性格：口調と共に超攻撃的。基本的に慣れないは好まないが積極的
に避ける訳ではない。残忍かつ冷酷。だが決して外道な訳ではなく
無駄な争いはしない、する気がない。一人称は『オレ』

能力者でありなが聖人の頂点に君臨する『完全聖人』でもある。
完全聖人は聖人と違い神と全く同じ特徴を持ち、それゆえテレズマ
を完全に操り身体能力も通常の聖人の倍に匹敵する。戦闘時には能
力よりも圧倒的な身体能力を駆使する。最強にも見える戦闘力だが
身体自体は普通の子供なので人体への負担が大きい完全聖人の力や
テレズマで長時間の戦闘は出来ない。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：桜木麻耶さくらぎ まや

性別：女

年齢：36歳

魔術名：prodereプロデレ裏切ること「異端なることを誇るなかれ」

職業、傭兵 テロリスト 殺し屋 魔術師 科学者 魔術師と能力
者の両方を殺せる殺し屋 専業主婦 現復讐者。

性格は、ほとんど二重人格に近く【心優しい女性】と『冷酷な殺人
兵器』とつかいわけている。

経歴：幼少のころから戦闘力が高く現代では名は忘れられているが
現役ではそれはそれは恐れられた魔術師。

22の時に結婚し3年後に旦那を事故で亡くし5年前に一人娘が学
校での虐めにより自殺した時に酷い悲しみに毛髪が全て色素が抜け

感情が無くなってしまった・・・それからずっと孤独の中に身を置いていた。

極限まで肉体を高めており、飛び上がって戦闘機を掴んで投げる事が出来る完全に化け物。

その身は、聖人の一人で一時的だが天使と互角以上に戦える。

魔術：『ブリュナク投石魔術』

「強い力で物を投げる」魔術を独自に開発、たとえば石が麻耶の手からはなれた瞬間、目もくらむような白い光と熱を発し、うなりと稲妻を伴いながら敵へと向かって飛んでいくそして自動的に次から次へと敵を貫き、飽きることなく殺戮を繰り返すという魔術。

最大射程35km、静物必中射程25kmを超える礮弾を投げると近づく事すら不可能。

ちなみに礮弾の最高速度は音速の五倍。

やろうと思えば学園都市の軍隊一つを一人で相手できる。

『千里眼』

空間把握魔術で——ほぼ全方向を見渡す視野、半径40キロ先を見通す視力の他、物体の透視などに長けている。

武装：ハンドガン二丁にナイフ一本。またはスナイパーライフルなどかなり銃器に関しては自信がある。

【asuta様より・ID157665】

名前：テレサ（大王命名）

性別：女

年齢：（大王の見立てでは）17歳

レベル：測定不能

能力名：聖人（大王の見立てが正しければ）

能力内容：言わずと知れた魔術サイドの人間兵器。10階建てビルを片手で粉砕する怪力と戦闘機に生身で追いつく機動力、タンカーを頭上から落とされても死なない意味不明な耐久力を有し、4メートルの巨大なチェーンソーと、ガトリンググレールガンを武器に戦う。なお、魔術について知らないため、魔術は現時点では使えない。弱点は、物理攻撃の通じない相手（一方通行など）。また、弱点とも言えないが、彼女よりも高い身体能力を有する相手（レベル5クラス）の肉体強化系や、自分より強い聖人）には勝てない。

容姿：ウェーブのかかった白く長い髪と、生気の抜けた真つ赤な瞳が特徴的な大人っぽい美少女。ヨーロッパ系な顔立ちをしている。（大王の見立てはスペイン人）メイド服を着用。

性格：大王の命令に忠実。機械のようなしゃべり方と、思考をしている。大王に言わせれば『幽霊みたいで気持ちが悪い』。だからテレサ（マリオに出てくる幽霊）と名づけられた。

大王がとある研究者からある情報の提供料代わりに貰った、ボディガード兼メイドロボ。だが、学園都市の技術でも、このレベルの人型ロボットは作れないため、大王は『聖人の少女の記憶を無理やり抜いて人形にした結果』と考えている。大王の仕事の手伝いや、彼の趣味に必要な物品（重火器や、違法薬物）の運搬、彼の趣味の後の事後処理の一部（死体の隠蔽など）、さらには食事などの身の回りの世話もしている。

【あしゆき様より・ID169400】

名前：常闇直人
とこやみなおと

性別：男

レベル：5

ダイクフエンサー

能力名：黒之微笑

能力内容：影や闇を操る能力、本来影や闇を操るだけでは『大能力者』だが、本人の影や闇の印象を変えることで内容を変えることが出来る。応用がかなり利く能力。通常の状態だと切れ味のいい影イメージはハガレンのプライド　だが、マイナスの印象をつけることで圧縮したり電子を操ったり、拒絶したりすることも出来る。しかし、その分光に弱く、日が出ている間は能力を使うことが出来ない。また、日の光を浴びると極端に衰弱する。

・能力の存在：常闇は脳に直接魔術の『陰陽術』が刻まれており、能力者でありながら魔術の知識がある
そのため、魔術の知識を使うことで能力を格段に強化出来る。

・現在の能力の力：基本的に自分の影、闇に陰陽術の陰の属性が付与できる。ただし、一つ付与している状態で、さらに付与することは出来ない。

付与できる属性

電子・圧縮

反発・拒絶

幻・消滅

重力・湾曲

水・電気

硬化・空間 e t c . . .

また陰の属性を自分に付与することで、それ自体になることが可能である

例　人体↓影、水、電気

これを使うことにより、自分自身の性別を変えることも出来る。本人はあまり使わないが。

容姿：男とも女ともとれる

性格：昼間はただの根倉野郎だが、夜になると気が強くなり笑顔が増える。また共通で困っている人を見過ごせず、よく事件に首を突っ込む。外道を許さず、子供に手を出そうものなら病院行き確定である。また裏の人間であり、信条は『殺られる前に殺る』、その通りに奇襲や速攻が得意であり、一瞬で命を奪う。また、ネコ好きである。さらにハーレム持ちである

【asuta様より・ID157665】

名前：永松大王 ながまつおおきみ

性別：男

年齢：15歳（高校生）

レベル：4（書類上）

能力名：断頭奔流 ウォーターソウ

能力内容：水流操作系最強の能力。最大速度マッハ16で、操作できる重量の限界は5.2t、操作範囲は自身を中心とした半径25M、1Lの水で軽自動車を持ち上げるかなり強力な能力。さらに、水の状態の変更（固体・液体・気体・プラズマに変更可能だが、プラズマだけはかなりの演算能力が必要で、使うとかなり疲れ、1週間は歩行不能。さらに、体重が3キロ減る）はもちろんゲル状や、ゼリー状にすることも出来、水の純度の操作はもちろん、なんと水の硬度まで操ることが出来る。一方通行や絹旗のような、無意識下での防御が可能（鋼鉄並の硬度の氷を相手の攻撃に合わせ、自動生成する）得意技は自身の通り名である、ウォーターカッターの原理で敵を斬りつける断頭奔流。また、純粹を生成できるので、電撃使いに対して滅法強い。

容姿：短い前髪と、長いもみ上げが特徴的な黒髪、琥珀色の瞳の、人懐っこい印象を受けるやや童顔気味な見た目。『面白いこと』をしている時や、情報屋としてはたらいっている時は、瞳が切れ長になり、実年齢より年上に見られる。筋肉はほとんどない虚弱な体系。身長170cm、体重51kg。

性格：普段は見た目通りの、人懐っこい明るい少年。だが、裏では自分の退屈を埋めるためにおもしろいことを探し、その実行と成就のためなら人の命も、情も、夢も、目的も、何もかも踏みこむイカれた思想を持っている。一人称は学校生活は『僕』で情報屋モードは『ボク』になる。

『面白いこと』を探し、色々な情報を仕入れている。学園都市において、彼が知らないことはなく、学園都市が出来た理由、つまりは統括理事長の目的も把握しているらしい。情報操作の技量も相当で、『レベル5にランクインすると目立ったことが出来なくなってしまう』として、自分のレベルを4にしている。つまり本来の実力はレベル5。ハッキングが得意。また、情報獲得のためにスキルアウト、暗部組織、風紀委員、学園統括理事会などにコネがある。必要悪の教会ともつながりがあり、魔術世界についてもそれなりに詳しい。以上の能力を生かし情報屋を営み、『面白いこと』をするための資金や、それに必要なものを得ている。

彼の弱点は極度の運動音痴。『のび太より足が遅い』、『重量上げのバーも持てない』、『ボーリングのアベレージは2』など様々な伝説がある。その弱点を、『皮膚の上に薄い水の膜を張りそれを操作する』ことで、超人的な身体能力に見せることでそれをカバーしている。

所属は長点上機学園で、結構まじめに通っている。

魔法名：scio050（全てを知る欲望）

使用する魔術：天使文字とギリシャ文字をごちゃ混ぜにし、それを

十字教の法則に当てはめた大王が独自に開発した魔術を使用する。

詠唱の代わりに、空中に指で（ペンなどでも可能）文字を書き魔術を発動させる。彼自身の魔術的な属性が炎であるため、炎の魔術を頻繁に使う。また、『断頭奔流』との組み合わせが可能で、水の魔術も使用頻度が高い。能力者であるので、普通に魔術を使えば、体に負担をかけ、腹から血を噴いたりするが、水の操作である程度は止血もできる為、14、5回は魔術をうてる。後述の融合後は、ブエルが永松の魔術の代理演算を行う為、魔術による負荷が消える。

ブエルとの融合：彼が契約する悪魔、ブエルと融合する。この状態になると、背中から彼の魔術と科学の属性を象徴する『炎の右翼』『水の左翼』が生え、左肩から山羊の脚が五本連なり、手のような形になった腕『悪魔の腕』が生える。この状態になった大王は、

1・ブエルが大王の魔術の代理演算をする為、ノーリスクで魔術を撃てる。

2・元来無尽蔵と言われてもおかしくない魔力にブエルの悪魔の魔力が上乗せされ、ミカエルクラスの魔力量になる。

3・魔術の威力が上がる。

4・断頭奔流のスペックが向上する。

5・ブエルの魔術『薬学奇跡』をオートで発動して超回復する。

6・『現象に対する法則の入手』（後述）を得る。

『悪魔の腕』：フルパワーで振るえば、『竜王の吐息』に匹敵する威力を発揮。防御に回れば『歩く教会』を超える防御性能を発揮する。しかし、これはこの腕の氷山の一角に過ぎず、実際の役割は『現象に対する法則の入手』を行うこと。簡単に言えば、目の前の敵や現象に対処し、確実に殲滅する為に最適な能力、魔術を掠めとる力。『この次元』だけでなく、『天使』や『悪魔』のいる次元の魔術や能力も掠めとれる。一度使った力は記憶して、自らの意志で使用する事が可能。しかし、あくまでそれは『融合』状態の時のみ。ちなみに、永松が好んで使用するのは、地獄の王の一人パイモンの

『西獄の炎』、ベリアルの『火戦車』、智天使長ケルビエルの『光輝シエキナー』。

弱点：融合前にかたをつけければオールおk。

【だいふく様より・ID191002】

名前：フェリックスニブレイズ

性別：男

年齢：24

役割：焚書官

魔道書の原典を燃やすことを生業としている個人の魔術師。

魔法名：flamma646（我が炎は力無き者を護るため）

魔術：『^{エターナルブレイズ}無限火焰』、^{フェニックス}『再生火焰』、^{ブックオブブレイズ}『焚書

火焰』、その他原典を多数所持

魔術解説：『無限火焰』

5000 近い灼熱の炎を作り出す魔術。

発動条件は『有機物の存在』なので、炭素を含む物さえあれば炎を作り出すことが出来る。

発動条件となつた有機物は燃えず、その周りにある物質だけを燃やす。

発動条件となつた有機物が存在する限り、たとえ周りから酸素が消えようが炎は消えない。これが『無限火焰』と呼ばれる所以。

なお、魔術発動の際には詠唱等ではなく、魔術的に特殊な加工（紋様）を施したライターを使用。

着火するとライター自体に火は点らないが、魔術の対象物に炎がある。

『再生火焰』

不死鳥の名を冠する通り、あらゆる損壊した物質を元に戻す魔術。

炎は生命の象徴なので、再生は生物にも有効。

こちらで詠唱は必要なく、フェリックスの右手に刻み込まれた魔方阵に魔力を注ぎ込むことで発動。

稀少な魔術で、使う者は世界に五人もいない。

ブックオブブレイズ
『焚書火焰』

魔道書の原典を処分することの出来る唯一の魔術であり、世界ではフェリックスしか使うことが出来ない。

彼の特殊な魔術の才能により使うことが出来るため、他の魔術師が魔術の発動方法がわかったところで使うことは出来ない。

同じく、詠唱ではないが自らの血を使用し半径十センチ程の精密な魔方阵を描き、その中央に原典を置くことでそれが燃え上がる。

『その他の原典』

彼が有益と判断し、自らの手元に残した魔道書の原典の数々。

その中に身体強化に関する原典があるため、身体能力は聖人に劣る程度。

ちなみに、原典による汚染は『再生火焰』と彼の特殊な魔術の才能により無効化されている。

性格：律儀な性格で、借りは必ず返す人。

あまり人を頼らず、自分自身が周りの人を支える柱となる。

酒はかなりいけるがあまり呑む機会がない。

一人称：私^{わたし}

二人称：貴様

語尾：日常では『〜である』となることが殆どで、戦闘になるとあまり無駄口は叩かない。

サンプル『貴様は私には勝てないであろう』

容姿：実年齢より大人びている。

丁度、はいむらーのサイトで登場している後方のアックアの原案ラフ（右側）みたいな感じ。

ところどころに赤い髪が混じっている黒髪をオールバックにしている。

顔も、アックア原案ラフと殆ど変わらないが、眼は紅く、鼻は少し高め。

服は、赤いワイシャツに黒いコートとネクタイ。ズボンも黒のジーンズで、ベルトも赤色の装飾のないシンプルなもの。

コートのボタンは全開になっていて、外側には二つのポケットが腰の辺りに付いている。

内側には十つのポケットが左右に五つずつあり、その全てに原典が仕込まれている。（なお、ポケットはボタンで留めてあるため中身は落ちることはない）

常に黒のビジネスバッグを持ち歩く。

中には魔道書の原典や予備のライター、炎に関する霊装が多数入っている。

その他：意外に料理が上手く、そこらのファミレスよりは美味しい。
イギリス人

組織には無所属で、世界各地で害をなす魔道書の原典を燃やすために活動している。

ローマ正教の現教皇とはかつて親友であったが、彼が教皇になった三年前にローマ正教とある事件があり、それから一度も話していない。（ちなみに現教皇は同じ年）

【翔泳様より・ID89505】

名前：フィルーネ・ノア

性別：女

年齢：17

魔法名：Magnum111「我が力を偉大なる祖に捧ぐ」

能力：『神の目』

右目に宿る神が持つ目。見ただけで術式や能力を見抜いて全く同じモノをぶつけて相殺してしまう。異能にしか効力はないので、核兵器に弱い？ 霊装等も同じように効力を相殺出来る。素手も防げない。

制御を解除すれば、数秒先を見ることが出来る。その場合、普段見えない未来を見ているため負荷が大きい。その場合、使用時間は三分が限度。

容姿：身長は160センチ。白銀の長髪。緑眼で常に右目には眼帯を装着し、神の目発動時にはその眼帯を外す。黒い修道服を纏い、腰の部分には安全帯の様な分厚いベルトを付けている。普段はフィードをかぶっているので、神の目を使う時以外はあまり顔を出さない。

性格：必要以上の会話はしない主義で、基本無口。自分たちこそ正義と固く思っており、悪（それに刃向かう者）を断じて許さない。

口調は必ず「〜だ」で終わる。

「……そうだ」

【asuta様より・ID157665】

名前：ルビウスⅡハグリット

性別：男

年齢：26歳

魔法名：somnia381（我が腕は夢を紡ぐ為に）

魔術：『呪われた腕』という、自らが書く詩や小説が全て何故か、魔導書の原典になってしまう才能の持ち主。今まで書いた詩集、小

説の数は1541冊であり、しかも増え続けている。戦闘では自らが書いた魔導書を使い敵を圧倒する。また、詩や小説のタイトルのセンスが独特。

『呪われた腕』と自ら読んでいるが、実際は自分の言葉選びのセンスや、文字配列が原因している才能である

例：『毒莓のワインのような君へ．．．』『刹那から切り取られたクロニクル』

容姿：ジョニー・デップとダビデ像を足して二で割った顔立ち。細身で長身のナイスガイ。黒い帽子と闘牛士のようなファッションに身を包み、象でも入っているのではないかという位のサイズのリュックを普段から背負っている。この中に魔導書が入っており、戦闘時は下ろす。身長188センチ、体重74キロ

性格：神の化身と言われてもおかしくない優しく温厚で平和的な人格の持ち主。また、詩や小説の創作に情熱をかけており、夢は自分の創作で世界中の人を幸せにすることという、少年的思想の持ち主とにかく戦闘嫌いで、回避出来ない戦闘以外は真っ先に逃走を図ろうとする。自分を狙って、襲撃してきた魔術師も決して殺そうとしない。（『勿忘草よりも純白』という原典で魔術に関する記憶を消去し、戦闘手段を無くす）

世界中の人達に自分の創作を読んで貰いたいが、原典であるために読んだ人が魂を汚してしまったために、自分の本を世間の明るみに出せない。そのため自分の才能を疎ましく思っている。かまचीもゲ口を吐く程の速筆。

生い立ち：元スペイン星教の修道士。自分の才能を利用しようとする魔術結社や、自分の才能を危険視する必要悪の教会に追われ、世界中を点々としながら、『呪われた腕』を消す方法を探している。16歳から創作活動を始めた。また、ルビウスⅡハグリットは自分

の好きなファンタジー小説の登場人物から採った偽名。本名は、ジ
ュリアンⅡレイⅡソレイユ。

魔術結社：ノアの方舟

大洪水の後、地上に残ったノアとは異なり、再び浄化が行われた
際選ばれた者として樂園に戻ることを目的として結成された魔術
結社。

メンバーは

フィールネⅡノア

アルハⅡノア

アスヤⅡノア

ユハナⅡノア

その体は『樂園にいた頃の人』に限りなく近づけた為、聖人に匹
敵する身体能力を有するが、人間の魔術を使用する事は出来ない

登録キャラ名簿【神生徒会】

想像屋様オンステーズ（ry

【想像屋様より・ID93770】

名前：天音廻黎 あまね かいり

性別：女

身長：147cm（アンデルフォン時：181cm）

年齢：不明

性格：妹の華音以外とはほとんど関わりを 持たず、常に本を読んでいる為他人 が顔を見る事は無いだがレベル6の連中とは会話が弾む。

また、二つの人格を使い分けていて、二つ目の人格のときは性格が真逆 になり、全てを見下している様な感じの口調や態度となる。

能力：『神魔邪眼』

廻黎の二つある能力の内の一つで、 一番の原石。

その名の通り眼を扱う能力で、無数 に存在するありとあらゆる眼を保有 している。

故にその効果も様々で、それぞれを 見極めるのはかなり困難である。

常時使用しているのは『観察の邪眼』という眼で、常にあらゆる

モノの 情報等をその眼で観ている。

アンデルフォン
『攻略不可』

廻黎二つ目の人格と能力にして、最も謎に包まれている原石。

異常な程の耐久性 と体力を持つ。（影虎以上！！）

容姿：翡翠色のツインテールの髪に、紅色 の瞳。

背中の部分に大きなリボンの着いた

これまた翡翠色のゴスロリのワンピースを着ており、そこに淡い紅色の 桜の花の形をした独特の日傘を差している。

ちなみに日傘と本はそれぞれ持たずに浮いている。

アンデルフォン時は、軽く逆立たせた黒髪に、深い蒼色の瞳。

白い袖無しのシャツと黒い学生ズボンを身につけ、その上に黒い学生服 をマントの様に羽織っている。

そして体の周りを白と黒のエネルギー体が交差して廻っている。

（ティルズシリーズのダオスを参照しています）

設定：元は自分がティルズシリーズ好きなので、それに基づいて作ったキャラクター。

ちなみに、人間がアンデルフォンを攻略したいと思ったら、飽きるのを待つし か手段は無い。

（それで一応は攻略したという事になる）

それでも本気で攻略したいと思ったら、最初に周りを廻っているエネルギー体を破壊し、次に異常な耐久性 の耐久性の元である鋼体を破り、最後にアンデルフォン自身にダメージを与えれば勝てる。

イメージCV：廻黎はひぐらしのなく頃にの 竜宮レナの声優さんで、アンデルフォンはティルズオブヴェスペリアのジユデイスの声 優さんの声

【フニヨ様より・ID145847】

名前：草壁修

くさかべしゅう

性別：男

年齢：17

レベル：4

能力名：情報戦略

オペレーション

能力内容：情報を操って物に情報を付与したり演算を邪魔したり出来る

脳にかかる負荷が一般的な能力より高く1日に1時間しか使えない使用方法 例：そこらへんに転がっている石に視覚情報を付与しその石から大量に煙が出ているように見せることが出来る

（五感すべてに影響する情報を付与することは出来るが高難度演算が必要になるのであまりやらない）

普段はサポート（情報収集&交渉）に徹している

レベルが大きくなるごとに操作できる情報の量が変わる

主人公はレベル4なので他人に情報を”付与”は出来ない（他人の体から煙が出ているように見せるなどは出来ない）

戦いでは近くにある石に自分の姿の情報を付与し（簡易的に説明するとホログラム）それを罠に銃で攻撃したり日本刀の長さを短いナイフに見せて間合いを勘違いさせたりして攻撃するのが主流

容姿：綺麗な黒髪ロングで目は黒色 顔は良く体は中世的でよく女に間違われることから

初対面の人にはしっかりと男と認識するように自分の体に情報を付与したりする

性格：思考がずれている、天然に近い

一人称は基本『俺』基本チャラ男口調だが真面目なときはチャラ男口調をやめ普通にしゃべる（イメージとしては土御門に近い）

好奇心に基づいた実験の協力を頼んだりすることはあるが相手が嫌がることはしない主義

例：電気系能力者と二人で協力すれば無料で地デジ見れるんじゃない？

といきなり考え始めそれを理由に協力を求めようとする

↓断られた場合は「あつ、嫌？ああ、なら良いんだよ別にー」とあつさり引き下がる

あまりされることはないがOKされたら実権後飯をおごるなど礼は忘れない

基本LVは気にせず広く浅く付き合うタイプ

名前：クレリア「クロス」^{シアン}死闇

性別：男

年齢：17

性格：負けた相手を不謹慎な言葉で罵倒したりと悪辣な性格 自分と同族（レベル6）など認めた物には、世話焼き 欲しい物またはしたいことのためなら誰でも犠牲に捧げる （欲しい物に『椿』が入っている）

容姿：イケメン

髪の色は金

長い髪をヘアピンをたくさん使いオーズのアンクみたいになっている
体格はふつう

常にスーツ（黒）

所持品：手帳（自分が心を折った能力者や魔術師のことが日記とし

て記されている） たばこ お菓子 ケータイ

『絶対強運』

圧倒的な幸運を持ちさらには他人から幸運を奪い己が物とする事が出来る。

能力：『パラノーマルアクティビティ 超常現象』

この世で起きるはずのない現象を運命的に誘発する能力
能力の効果も発動タイミングも運任せ

彼自身の特性 『絶対強運』があるため

どんなことでも（実際に起きるはずのないこと）ほとんど自由に出て来て

タイミングも強運のため絶妙なタイミングに発動する

黄金鍊成のように自滅することもないため

本来の意味で最強

例、誰かが殴りかかってきたらその腕が何故かドロドロに解けたり
他人の心を自分の物にしたり本人が嫌がっているのに感情と身体が
自分を愛してしまっていたり

ビルがいきなりひっくり返ったり

死んだ人が生き返ったり

隕石が振ってきたり

いきなり身体が破裂したり

攻撃が自分をすり抜けてしまったり

年を取らなくなったり

いきなり別の場所に移動したりなどランダム過ぎて予想が本人にも
つかない様な戦い方をする。

追加事項

椿さんの過去に因縁がある模様。元は恋人だったらしい。

役職『書記』

名前：桜小路 影虎

年齢：15歳

身長：180センチ

体重：65キロ（少しやせている）

容姿：顔は、優しい人が一番しっくりくる顔（けっこうイケ面）

常に目を閉じているような顔で本気になったりイラッと来ると目が開き鋭い目をするのが出き以外と鋭い八重歯が目立つようになる

この時は、ワイルドなイケ面になる

日本人にも見えるが外人にも見える

目の色は、黒

髪の色は黄色に茶色が混ざった感じ（染めている本当は、透き通るような黒）

足が長くモデル体型で結構、筋肉がついている

白いシャツにフード突きの緑のコート（裏地には、白の布に桜吹雪の刺繍が入っている特注品）を常に着ており顔をフードで隠している

職業：レベルの低い高校の一年生

元 長点上機学園（ながてんじょうき 学園）その他色々

元学園都市最強であらゆる研究機関で実験体にされていたが能力の開発に嫌気がさし逃げ出した

能力：記憶消去
メモリーキャンセラー

消去と書いてはいるが実際は、閲覧もでき改竄もできるまたは、他人の記憶を蘇らせたりもできるため
消すだけではない

この能力は、常盤台中学のレベル5の心理掌握メンタルアウトや他の能力で記憶破

壊に酷似しているがそれらの能力とは、遥かに次元の違うレベルに位置していて例えるなら 花火と太陽のような感じである

正確には、記憶だけではなく記録や経験も消去できる

記憶や記録に関してはこれ以上ない能力

効果範囲は、本人から離れて月くらいの範囲まで

彼の能力は、この範囲とそして、人の脳を完全に支配下に置くことが出来るため実質は、最強の能力

魔術：彼は、能力者でありながら魔術を使用できる稀な体質

彼の使う魔術は、錬金術に酷似していながらも少し違う魔術

魔法名：val et e + 0 0 0（さようなら、永遠に）

技名：『矛盾が生じる錬成』

名前は適当に決めているため意味はなし

発動するためには、詠唱が必要

頭でそのワードを読んでも可

ワード：『万物は、我とともにあり。そして、怪奇とは、我にまわりつくもの、その二つがあいなすとき、禁忌の力ここにあり』

効果は、身体の一部が触れている物体（異能も可）を変形させたり抜き取ったり陥没させたり溶かしたり固めたり動かしたり物体であれば好きに操れるしかし、錬成した物体には、何かしらの矛盾を付属しなければならぬ

例、鉄から銃を錬成するとその銃は、相手を切るために使うなど

または、コンクリートで槍を作ったとすると

その槍は、後ろに投げなければ前には飛ばないなど

正直、意味不明な能力

まだまだ進化の可能性があり

この魔術を簡単に言う理想を形にして表す力

黄金錬成とは、強弱の関係

精神の力：『闘争本能』

能力ではなく精神面の力

戦いを望み常に勝つことを前提に動く

そんな本能

相手の弱点を見抜いたり

自分の技を自分でアレンジしたりするため

影虎は、どんな能力を与えられても戦闘向きな能力に改造するらしい

影虎は、本当の能力は、科学でも魔術でも解明することが一切出来ない幻想殺しと同じく奇妙な能力

能力：名称は、『ユグドラシル異世界樹』レベル6

この能力を発動するとまたは、影虎が生命の危機に陥ったり死亡したりすると勝手に発動し対象を破壊しようとする（自己防衛迎撃機能＋自己再生治癒機能）

なぜ、死んでも能力が発動するかというと『ユグドラシル異世界樹』の意志で無理矢理蘇らされるから。これは、魔術に属している作用

影虎の頭から光り輝く桜色の鋭い刃のような枝が現れ頭に王冠（能力を操るための媒体で天使の輪と同じ性質で正式名称は、ケテルの王冠）のようなものが出来る

そして、能力の一つは、全ての生命または生物でないものでも自分と強制的に接続する（支配する）

二つ目は、魔術にも科学にも常識にも非常識にも物理にもオカルトにも影響されない（イマジンプレイカーには、触れられた部分が破壊される？）謎の物質？（生命力）でできた桜色の鋭い刃のような枝を自在に操り闘う

この枝は、相手の攻撃を完全に受け止め攻撃にも使える

生命力で出来ているため相手を滅多刺しにしたり八つ裂きにしても相手は死なず傷も残らない（精神には大ダメージで痛みもちやんと感じる）

3つ目は、『ユグドラシル異世界樹』で傷の治療が出来る

4つ目は、巨大な世界樹を生み出して地球の生命力やエネルギーを

支配し使役する

それを発射することもできる

この時の砲台の形が龍の顔似ていることから

『竜王の波動』
ドラゴンウェーブ

威力は、ご想像にお任せ

後は、AIM拡散力場の完全な制御（支配）など・・

これだけの能力を持つてしても完成はしていないらしい

彼は、自分の能力を完全に掌握し、現在の『異世界樹』ユグドラシルとは違い黒

い枝の殺傷能力だけの、『死世界樹』キルドラシルを生みだし使役していた。

『異世界樹（セフィロトの樹）』は、本来自分の意志を持っており
自分の認めたものにしか恵みを与えない。気に入られなければ神に
すら襲いかかる謎の物体。

彼が死んだ場合、勝手に彼の身体に現れて彼を死から蘇らせる程
影虎のことを気に入っているらしい

使用しすぎると若返り（最低8歳の姿まで）成長しなくなる（使用
中は）使用してから三日たつともにもどる。

追加事項：聖人である

神の力をその身に宿している

属性は、メタロン

この属性は、本来存在しない

性格：穏やかでのほほんとしている

寂しがりや

感動屋

一途

乱暴

実は、人間に興味が無く全く関係無い人なら簡単に見捨てて。

戦闘スタイル：拳か脚かと言えば拳で闘う派

握力は、最弱で190キロ越えと異常

懐から本物の銃を取り出して闘う（アンチスキルからこっそりくすね取った）

結構腕っ節が強く

能力無しでも暴走族一つや二つは、壊滅させられる

口癖：怒ると『噛み殺してやろうか？』または『喰い殺してやろうか？』

かなりドスが利いた声で言う

酒を飲んでも酔うには酔うが冷静でいられるため

酒には強い

実は、影虎は、名前も能力も全てを偽って生きている

年齢と性別は、本当

影虎のヒーローとしてのあり方

己の意志で守りたい者のために人にも怪物にもそして、正義にも悪にもなれる良く言えば英雄、悪く言えば悪党、光と闇、両方を兼ね

備えた者・・・桜小路影虎

能力は『異世界樹』と死世界樹と『異常抑圧』と記憶消去が主な能

力と『敗北の王』などを使う芸達者。

『異世界樹』を捨てれば他にもたくさんの能力が使える化け物

桜小路 椿（女）（クロス＝マリアンヌ（これも偽名））

年齢 自称17歳（大人っぽい言動だがどう見ても中学生）

身長147センチ

体重36キロ

確定Fカップ・・・？

キャラクターボイス

CV 由村 ゆかり（魔法少女リリカルなのは（高町なのは）刀語^{とがめ}）
↑あくまでもイメージです

容姿

若干童顔

目がパチツと開いていてまつげが長く可愛いがしっくりくる顔
他の言い方をするとお嬢様顔

髪の毛は、膝くらいまで長い透き通るような黒髪をしているが常に
帽子やフードなどで隠している

目の色は、赤っぽく

強い光があると人より目が痛いらしいため

黒のカラコンをしている

体型

身長とは、裏腹に発育は良らしくプロポーションは良い（神裂く
らい）

白い素肌にすぐに折れてしまいそうなほど細いが綺麗で長い手足

服装

女であるのが嫌らしく常に男装を心がけている（胸にはサラシを巻
いている）

帽子かフードは必需品

職業

現在は、影虎と同じ高校に通っているがほとんど行かず家でゴロゴ
ロしている（それでも家事はしていて完璧にこなしている）

もとイギリス聖教で修道女として暮らしていた

過去

0歳の時にイギリスの十字教の協会に前に捨てられていたらしい

そのこの協会に引き取られ育てられた

その後（5歳）に魔術に触れ輝かしい才能を発揮し神童や二代目アレクスターとまで呼ばれた

1?の時にイギリス聖教で必要悪の教会に所属していたがあまりに魔術に関して才能がありすぎて飛び抜けていた

人工的に自分を聖人にする方法などを独自に開発し天使ですらも独自に術式で呼び出すことに成功しているため実質的に魔術の世界では、魔神にもっとも近い人間の一人に数えられていたが

イギリス聖教が彼女の才能と彼女の独特すぎる思考に加え新書目録が災いを招くと予想し暗殺を企てるが彼女が全力で抵抗したため失敗した

そして、1年に近い逃亡生活の末

かつて世界最高最強の魔術師にして現世界最高の科学者のアレクスター「クロウリー」の統括する学園都市にたどり着いたものの追っ手の魔術師に手傷を負わされ学園都市に無断で進入したためアンチスキルに追われ

ボロボロになりながらも何とか逃げ延び学園都市の公園にたどり着いた

その時、髪の高い少年と髪の高い少年が奇妙な争いをしているところを目撃しその戦いを見届けた

そして、助けを求めようとしたが自分を追ってきた魔術師に囲まれ少年を逃がそうとしたが少年の能力を自分が無効化していることに気付く

その少年に自分が新たに開発した最強の魔術を渡し

その少年に刺客を撃破させた

そして、その少年が自分と同じで孤独であることや自分と同じような人生を歩んでいるためほうっておけず家族になつてやると言い少年とともに暮らし始めた

名前や戸籍を偽り現在は、影虎の姉として暮らしているが本当は、恋人同士

昔は、利用してやろうと思いつけていたが今では、影虎のことを大事に思っている

男装なのは、昔から女の子は、損だと思っている（つらい思いをしってきたため）ふしがあり性同一性障害の気がある

しかし、髪を切ることには抵抗があり伸ばしている

たまに影虎に「顔も可愛くてスタイルも申し分ないんだからもつと女の子らしい格好しても良いんじゃないか？」

と言われると複雑な心境になる

後、「お前ってさ、女が損だと思えば思うほど女性らしい体型になつていく気がするんだが」つと言われた際は、泣きながら崩れ落ちたなど女性らしい体型になつていくのには、抵抗があるらしい

精神が少し不安定なところもある

実は、影虎以外の男性が苦手で自分を女と見られるのには虫酸が走るらしい

魔法名

a p p r i o r i 193（先天的な理想は、新たなる発展を生む）

通り名

レコードブラッド

新書血録または、しんしよけつろく

フラッディ・グリモワール

血まみれの魔導書

魔術

ステイグマータ（ラテン語：s t i g m a t a）

自分の血を媒体としある特殊な魔法陣を自分の体と周りの地面に描き自分の身体に描いた魔法陣を聖痕に変化させ

人為的に神の子の力を自分宿し

聖人と同じ力を得る

法王級魔術

使役型エンゼルフォール

自分の血を媒体とし巨大な魔法陣を展開しその魔法陣にセラフイム（熾天使）Seraph, Seraphim 天使の九階級のうち最上とされている。三対六枚の翼を持ち、2つで頭を、2つで体を隠し、残り2つの翼ではばたく。神への愛と情熱で体が燃えているため、熾（燃える、などの意）天使といわれる。

ケルビム（智天使）Cherubその顔は”人間の顔のようであり、右に獅子の顔、左に牛の顔、後ろに鷲の顔”を持っていた。・・・生き物のかたわらには車輪があつて、それは車輪の中にもうひとつの車輪があるかのようで、それによつてこの生き物はどの方向にも速やかに移動することができた。・・・ケルビムの”全身、すなわち背中、両手、翼と車輪には、一面に目がつけられていた”（知の象徴）・・・ケルビムの一对の翼は大空にまっすぐ伸びて互いにふれ合い、他の一对の翼が体をおおっていた。またケルビムにはその翼の下に、人間の手の手の形がみえる

オフアニム（座天使）Ofanim

名は「玉座」や「車輪」の意で、唯一神たる主の戦車を運ぶ者とされる。また、「意思の支配者（Lords of Will）」の異名も持つ。

物質の体をもつ天使としては最上級にあたり、主に燃え盛る車輪の姿

天使の1位2位3位の3体を召還し使役する魔術奥義、この力を使えば国一つは簡単にほろぼせる
が寿命が減り

しかも常に血液を流し続けなければいけないため

2分の使用が限界

1体だけの場合は、4分間は持つ

ブラッドペンシル

体中の血液を自由に操作できて自分の術式を血液に記憶させること

で複雑な魔法陣でも血を撒けば一瞬で準備できる裏技

この力があれば手傷を負わされれば負わされるほど強力な魔術が使えるため結構くせ者

応用で血を硬質化させ血液のナイフを作ること可能

彼女は、魔術を血液で行うためいつも貧血対策はしている

【新書血録】

本当の名称は、『発展の書』や『エノクの書』など魔道書に元づいている。

魔導書で原点は、血液

禁書目録とは違い自分で魔術を作り出すことが容易になる上にこの魔導書が完成してからずっと魔術の知識が発展するたびに魔導書にその発展した技術が刻まれる

つまりは、魔術の進歩全てを手に入れる事が出来る魔導書

そのほかには、火や電気を蛇の姿にして飛ばしたり色々出来るインデックスほどではないが相手の魔術を見るだけで大抵の仕組みを理解できる

自分の開発した魔術を相手に分けることもできる

その際には、キスなど接触が必要

大人形態

身長174

体重48キロ

確定Fカップ

椿さんは、クリスとの一体化が成功し白と黒の混ざった長い髪で整った顔立ちをしていて背が高くスタイルが忍並に良い若い美女になる。スペックの高さがレベル6以上で平常状態の影虎を瞬殺出来るほど強い。美貌だけで他人を虜に出来る。

致命傷を負わない限り死なず一度喰らった攻撃はほとんど無効化する。能力者でありながら普通に魔術が使える。

相手にできる事なら自分もできると言う能力【フルチューニング完全調律】が使える。
弱点が無くなる。影虎が自分より強いと認めた存在。
ただし、妊娠しているため無理が出来ないので大人形態は2分が限界。

名前：園崎陽そのさきよう
年齢：18歳
性別：男

容姿：身長が影虎と同じくらいで髪型が青い髪ヘアの長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下ズレ制服で首にロケットペンダントを掛けている爽やか系の色男だ
唯一おかしいのが腰に掛けた日本刀（模造刀）

能力：『タイムオーバー絶対時間』
時間を完全に操作することのできる能力。詳細は不明だが対物時変など物の時間を操ったり時間を止めたり早めたりできる。
特技はおいしい紅茶を入れる事と模造刀で空間から何まで切る居合斬り。

シスコンだが優しく礼儀正しい影虎と気の合う化け物。
役職『副会長』

名前：月明灯つきあかぬかり
年齢：16歳

性別：女

容姿：真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿で身長が160ちよつとの黒がメインカラーの上下制服の女
顔は結構かわいらしい。

性格は：引っ込み思案

特技1分間に300回の土下座と200にも及ぶ謝罪

能力：『幻実？ぎ（ドリーム・オア・リアル）』

幻が現実になったり現実が幻になったりなど自由に使用できる。幻覚なども使用が可能で黄金鍊成に効果は酷にしているが願った事しか現実にならないという点では、こちらのほうが使い勝手は良く。

自身が死んだ事や怪我をしたなどは、幻に変えてしまえるなど素晴らしい能力の持ち主。実はかなり強いお方

役職『会計』

ひぐらしくれにち

名前：日暮暮日

年齢：16歳

性別：男

容姿：髪のはねっぱねの髪形で革ジャンとボロボロを通り越して雑巾なズボンをはいた影虎が完璧と認める容姿の男
キレ症

能力：『閉鎖空間』
フリースペース

すきな空間を自由に作り出し自由に移動し自由に消し去ると言う能力

『平均気温8000度の世界』や『自分だけがモテる世界』など本来に好きな世界を作れる。死なない理由は、空間が彼を殺したからずすぐに『死者が蘇る世界』に引きずり込み復活させるからである。影虎とは犬猿の仲である化け物
役職は『庶務』

登録キャラクター名簿【フリーサイド】

登録されたキャラクターの名簿です。
あゝわ順で並んでいます。

【フニヨ様より・ID145847】

偽名：浦葦うらよし 善口本名：浦葦ぜんこう 善行ぜんこう

性別：男

年齢：不明（本人は永遠の18歳と言っている）

使用魔術：『嘘笑い』（liegen）と『本物の肉体』（Wahrheit）

魔術名：「Heuchelei999」（意味は、すべてが偽善）
魔術内容（嘘笑い）：発動中に嘘を言うと言が本当になったように、『感じる』

そして嘘をばらした瞬間に元に戻る、
効果範囲は独自のルーンから半径3メートル、基本はルーンを刻んだ石をばら撒いたり壁に刻んだり紙に書いて張り巡らしたりして効果範囲を広げる、自分の背中と手のひらに小さくルーンを刻んでいる、

魔術内容（本物の肉体）：身体能力強化の魔術、使用中は聖人並みの身体能力を得られる、1日7時間しか使えない、天体関係の魔術のため、

使用例1（嘘笑い）：嘘で君の腕は今切り落とした、と効果範囲内と言うと本当に腕が切り落とされたかのように見え、痛みを感じ、神経も全部遮断され腕がなくなったように感じる、つまり腕を”使わなく”なる、「腕が切り落とされたのは嘘」というように嘘だとバラすと腕を失ったと言う”意識”がなくなり腕も元に戻る、効

果範圍外に出ると元に戻る

使用例2（本物の肉体）：嘘笑いで自分を見えなくし、本物の肉体を使い殴ったり蹴ったりする、

容姿：金髪に青い目好印象を受ける青少年、嘘笑いを使うと目と髪の色が黒くなる、（黒髪黒目が本来の色）

性格：基本はいい事をしたり悩みを聞くが、それは恩を売るためとつながりを強くするために、偽善者、仲が良かった友人が“偶然”待ち合わせ場所の前で拉致され“偶然”行方不明になり、“偶然”研究所から死体で見つかりその（主人公の嫌いな）研究所がつぶれる、など一人称は「僕」で基本ですます調、普段は偽名の浦葦うらよし善ぜん行こうを名乗っている、いろんなところにふらふらしている事から流浪者とも呼ばれている

暗部にも深いかかわりがありフリーの傭兵のようなことをしている素で善行をしているやつを嫌っており避けるように行動する

【ティンク様より・ID176467】

名前：A01（エースゼロいち） 機械化前 相澤一あいざわはじめ

性別：男（機械化前）

年齢：9 + 4（機械化後）

レベル：0

設定：通り魔に刺されて、死にかけたところをとある浮浪者に助けてもらい、サイボーグになる。普段は人工皮膚でメタリックボディを隠している。機械の体であるため、海に入る事ができない。（プールとかは平気）

体内のチップさえ無事であれば首を斬られても平気。また、すぐにくつつく。やむを得ずビルを破壊してしまった事があるが、警察には特になにも言われなかった。サイボーグになっても五感を感じるようだ。

エネルギー源は人間が食べるご飯でオーケー。1日一回油を飲む必要がある。

浮浪者に助けられてから誰かを守る人になろうと決めた。が、一人を守るために多くの悪人を病院送りにしてきた。好物はカレー。きらいなものはゴーヤ。

バックドロップで学校の校長を泣かせてしまったことがある。機械のクセに機械オンチ。ウィンナーとソーセージの違いがよくわからない。機械なので電車や飛行機に乗ることができない。

電気店に行くと必ずといっていいほど防犯装置を誤作動させてしまう。彼がつくるラーメンは絶品であり、友達である植木に「お前は主婦か!」とよく言われる。キリンのモノマネがめっちゃウマイらしいが、誰も見たことがない。6歳の時まで10の次を100だと思っていた。

一年ごとに部品改造してもらっているため、背はふつうに伸びている(ように見える)

一人称俺 二人称お前 テメエ 植木のみ植木っち

戦いの途中で名前聞かれると、「知りたきゃ俺に勝ってみな!」とかならず言う。人ならざる者同土植木とは気が合う。

戦闘スタイル：基本殴る、蹴る。機械化前に空手を習っていたようで、なかなか強い。機械なのでパンチやキックがかなり痛い。あまり使わないが、腕がガトリングがわりになる。(3000発)弱点は電撃使い(エレクトロマスター)に極端に弱い事。

容姿：メタリックボディ、人工皮膚を装備。黒の髪に学校の制服。顔は子供っぽい。背は低い。

【ティンク様より・ID176467】

名前：川中植木
かわなかうえき

性別：男

年齢：13

レベル：0

能力名？：『新天界人^{ネオ}』、『職能力（ジョブ能力）』

能力内容：『新天界人』自分でゴミと認識したものを木にかえる能力。（あくまでゴミがないと使えない）ゴミが木になり、その木がゴミと認識されてさらに木としての形をかえ、トリサイクルする。そのサイクルを他者の能力へと影響させる『回歸^{リバース}』は、あらゆるものを元に戻す（演算を元に戻す）ことが出来る。ただし万能ではなく、元に戻しきれないものもある。（だいたいは相殺される）あくまで能力で木を出している事が発動条件。

天界力のコントロール そのまんま。自らの中に眠る『天界力』をコントロールして、『燃え状態』になる。（身体強化）少しでも気を抜くと暴走してしまう事が難点。

神器 ゴミがないと使えない。『回歸^{リバース}』をつけることも可。

一ツ星神器 『鉄^{クロガネ}』 巨大な大砲を出現させて木の弾丸を打ち出す。

『自覚』の神器。

二ツ星神器 『威風堂堂^{フールド}』 鉄甲のついた木の腕を目の前に出し、防御する。『忍耐』の神器。

三ツ星神器 『快刀乱麻^{ランマ}』 刀を召喚して切る。大きさは自由自在。

『不惑』の神器。

四ツ星神器 『唯我独尊^{マッシュ}』 顔のついた巨大な立方体で相手をかみ砕

く。『渾身』の神器。

五ツ星神器 『百鬼夜行』^{ヒック} ブロックで相手を突く神器。攻撃の他にも橋やエレベーターがわりにすることも。『集中』の神器。

六ツ星神器 『電光石火』^{ライカ} 高速移動できるローラーブレードのような神器。使用中はジャンプ不可。『先読み』の神器。

七ツ星神器 『旅人』^{ガリバー} 地面に碁盤状のマス目を出現させてそこから0.5秒で相手を箱の中に閉じ込める。中からは壊せないが外からは簡単にこわせる。相手に動き回られると捕縛できない。『持続』の神器。

八ツ星神器 『波花』^{なみはな} 巨大なムチ。『把握』の神器。

九ツ星神器 『花鳥風月』^{セイクー} 黄緑の翼で空を飛ぶ。『バランス』の神器。

十ツ星神器 『魔王』^{まおう} 自分の思いの強さほど強くなる生物神器。植木の場合はなぜかブルーアイスホワイトドラゴン。6発しか使うことができない。

『職能力』

『モップ』に『？』^{ガチ}を加える能力。右手にある紋章からモップを出す。モップの先は自由に伸びて、対象を掴める。ただし、直線のみ。

容姿：黄緑色の髪の毛。手に黒のリストバンド。あとはふつうの中学生。

性格：一人称僕、二人称君、知り合いには。君、さん。基本優しい性格。だけど怒ると手がつけられない。好物はラーメン。

あくまで天界力を使う能力なのでLEVELは0（そもそも能力開発をうけていない）

【フニヨ様より・ID145847】

名前：バアル

性別：男

年齢：？（幼いころの記憶がなく、

自分が何歳かわからない容姿的には十代後半）

容姿：赤い目に黒い髪、顔は上の中と言える

黒いワイシャツに黒いスーツ黒いネクタイに黒縁めがね

性格：多重人格、人格は4人

『バアル』 普段出ている『主』の人格、基本優しく友達思い、

一人称は僕、ですます口調でイメージは優男、

『ベール』 罵詈雑言で怒る寸前になると、出てくる人格、

一人称は俺「うるせえなあ…黙れよ！」など荒々しい口調、目つきも鋭くなる

『バエル』、疲れた時や弱った時に出てくる

一人称は『ワシ』「ひどいのゝ老体にこの仕打ち！

まったく持ってひどいもんじゃー」など老人のような口調になる

思考が早く、人格の中では一番頭がよく、剣術の達人

『ブラック』本気で怒った時に出て来る人格

言語をしゃべれず、ほか人格の記憶をから敵を認識し、迅速に殲滅に移る、一応思考が存在し考えて行動する、

魔術名：『Promittte1（最後の約束）』

使用魔術：人格ごとに使う魔術が変わる、

バアルの人格の時は

天候を操り、雷や水を操る魔術を使う、

魔術の名前：『天候操作』（イメージコントロール）

弱点：魔術が10時間しか使えない、自分の半径1kmしか天候を操れない

ベールの人格の時は、式神の蠅を多数召喚し、蠅を操り菌に感染させたり

蠅に乗って空中を闊歩したり、蠅と情報の共有をし、監視カメラのように使ったり、蠅に乗って高速移動したりする魔術を使用する

魔術の名前：『蠅の神』（ベールゼブ）

弱点：蠅を一気に多数召喚するため魔術消費が激しく1日50匹しか召喚できない

蠅に乗って歩くのには80匹、高速移動は200匹必要

バエルときは透明になったり、自分の知識の共有をしたり、する魔術が使える、

魔術の名前：『魔神序列1』（ナンバーワン）

弱点：透明になるだけなので広域攻撃には弱い相手の知識は読み取れない、

ブラックのときはほかの人格の魔術をすべて使え、普段より強くなる、

バエルの魔術はまったく触れなくなる&相手の記憶を読み取る魔術になり

ベールの魔術は蠅が一気に5万匹召喚できるようになる、

バアルの魔術は地球すべての天候を操れるようになる

ブラックは5時間しか出れず出た後に2週間睡眠状態になる、

参考資料↓<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%82%A2%E3%83%AB>

【ティンク様より・ID176467】

名前：御仏聖みほとけひじり

年齢：13（実際は4000を越えている可能性あり）

性別：男（実際はどちらでもない存在になってしまっている可能性あり）

レベル：0

能力名：ブッダの悟り

設定：ブッダの魂を受け継いでしまった少年。（ちなみに約八割くらはブッダの魂）そのせいで人を超えた存在になってしまう（自覚はある）。その事を隠して生きているがさまざまな奇跡をおこしているので、あまり人として見てもらえない（超人的な意味）。ブッダの魂を受け継いでいるため肉は食べない（魚は食べるらしい）。

インデックスみたいに経文を全て暗記している（ブッダの記憶）。が、別に魔術的な意味もないので命を狙われるなんて事はない。最近の悩みは昼寝しようとするとうるせに入ると勘違いされてしまい世界中から動物が集まってきてしまうことらしい。（学校の教室で三分うたたねしてしまうと学園都市中の鳥が集まってきてしまうレベル）じつは自力で地デジ電波を受信するためアンテナをつけてないしテレビも地デジ非対応（対応する必要がない）。あぐらを組むと後光がさしてしまうのでうかつにすわれない。水面や空中を歩くことができる。なぜかテレビのチャンネルを勝手にかえられると頭突きしてくる（許可したらオーケー）。黒髪で身長は普通。

彼から攻撃をすることは一切ない。大体の人物は彼から出るオーラで降参してしまう。また、心の中に直接語りかけることも可能。悪しき心や闇の心を持った者の攻撃を全て打ち消してしまう。一応武術の心得はあるが、一度も使ったことはない。あまり人を分け隔てないのでスキルアウトにも友達がいる（ていうか弟子）。弱点は、聖なる心を持った者の攻撃は普通に通ってしまうこと（まあ攻撃する瞬間の心持ちによる。もともと聖なる心を持った者でも憎しみを

持つて攻撃しようとする弾かれる。また、悪しき心を持った者でもただ単に勝負したいだけとかだと通してしまう）一人称私。二人称あなた

前にいた街で消防団に協力したら街から火の気が完全に消え去り、千代田区よりタバコに厳しい街になったという伝説がある。

イラスト展示

絵で参加してくれた方々の絵置き場です。ありがとうございます！

こちらは下へ行くほど新しいです！なんとも見づらい構成すみませ
ん。

ユーシン様より・茨野アゲハ

BYこなつ（管理人）

> i 3 3 1 2 1 — 2 1 6 1 <

みてみんURL↓http://2161.mitemin.net
t/i33121/

（サンプルがてら描いたものです。誰だコレになりました；申
し訳ありませんユーシン様！あとアゲハちゃん！一応テンペスト
の綴りはあつてる！はず！です！多分！！）

管理人より・竜守綾季/ライエ

BYこなつ（管理人）

> i 3 5 6 1 4 — 2 1 6 1 <

みてみんURL↓http://2161.mitemin.net
t/i35614/

（所謂落書きですが…。我が家の綾季ちゃんとライエ君！→のアゲ
ハちゃんとはおっそろしくタッチが違いますが同一人物です。こっ

ちのタッチのが描き慣れてはいますね！。紫大活躍でした）

ラストデイズ BYこなつ

>i36300—2161<

http://2161.mitemin.net/i36300/

想像屋様より・桜小路影虎 BY想像屋様

>i36208—2210<

http://2210.mitemin.net/i36208/

随時追加予定です。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（前書き）

サンプルにするため書いたものです。参考になれば幸いです。多分
ならないです。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜

肌寒い風。淡く輝く月。擦り寄る黒猫。静かな大公園。冷たいベ
ンチ。湯気のたつホットココアの缶。
それから、

「ぎゃあああああああ！！！」

劈く悲鳴。

あたしは放心の先の虚無の世界から無理矢理意識を引っ張り起こ
し、苛々と声の方を睨んだ。

「ちよっ…！何コレ！何なのコレ！何でこここんなに猫多いんだ
よおおお目光って怖いんだけどおおお！！！」

愛しのマイフレンズに何を言うか。声の主は情けない悲鳴を続け
様にあげながら、こっちに向かって突っ走って来る。背丈はあたし
以下、それから肝っ玉のサイズもあたし以下。どういうわけだか作
業服を着て、手にはコンビニの袋を提げていた。

そいつはあたしの目の前で急に止まって、今にも泣き出しそうな
声色で言う。

「その人！助けてくださいここは化け猫の巣窟です！！！」

「……」

「……あ」

そして、今度は半泣きの聞き取りにくい声で、

「ぎゃああああああ！！猫娘えええええ！！！」

「うっさいなもう猫娘とかこの鬼太郎だようせあたしは猫と戯れるのが好きな根暗だよ！！！」

思わずそう怒鳴った。失礼なことを言われた怒りと、あたしの持つ負のスキルの一つ被害妄想が炸裂する。

「いやあああああもしかして僕いつの間にやら猫の王国にトリップしてたのおおお！！？ひいひいひいお助けください王女様ああああ」

「うるさい黙れ耳が痛い！！！」

「ひッ！」

泣き喚くプチサイズ肝っ玉（今命名）はあたしに怒鳴られ萎縮した。面倒くさい奴だ。余計にストレスが溜まる。

「…名を名乗れ」

「あ、あの、もしかして変な契約書に使ったりするんじゃないか」

「家に帰ってたかったら名乗れって言ってるんだよ変なこと気にしてんじゃないよこのプチサイズ！」

「は、はい！！！！みったにさく光谷桜ですう！！！」

何だ、女々しい名前だな。思ったことは言わない性質なので口には出さない。桜は既に半泣きで硬直していた。対するあたしはベンチで体育座りをしたままである。何だこのシュールな光景は。

あたしたちを包むシュールな雰囲気能耐えられなくなり、あたしは立ち上がった。桜は「ひッ」と怖気づいて後ずさる。立っただけでその反応はビビリすぎだろう。

「…桜はあたしに余計ストレスを与えたわけだけどその辺どう落

とし前つけるよ?」

「はいっ!? 落とし前ッ!?」

「そう落とし前」

光景的には脅迫現場だろう。そしてあながち間違いではない。

「ストレス発散させてくれるよねさせてくれないのねえさせてよ」

桜の顔が真っ青に染まった。

*

この学園都市では、超能力開発なんていうイカれたカリキュラムが存在する。

230万人の学生がそのカリキュラムを受けていて、当然あたしも受けたわけだが、その結果得られた能力は実に使い勝手が悪いものだった。

ダメージカウンター
衝撃貯蓄のレベル1。

レベル0——無能力者の一個上、である。

まあレベルに関しては文句は無い。カリキュラムを受けた約6割があたしみたいなレベル1やレベル0に分類されるのだから、納得できる。逆に一番上のレベル5は230万分の7しか居ないらしいから、何もそんな寂しいランクに入りたくもない。

だが、宿った能力があたしはあまり好きじゃない。

あたしの能力は——受けたダメージをそっくりそのまま好きなときに放出できる、というものであった。

つまり、一度痛い思いをしないと、満足に能力を行使できないのだ。

お陰であたしの身体には、傷が耐えない。

＊

一目散に逃げ出した桜を、あたしは追っていた。

人から見たらその姿はさしずめ、脱兎とチーターだろう。脚力だけは自信がある。どんどん差を詰めて、思いっきり奴の襟を引っ掴んだ。

「ぐ、えッ!」

「何で逃げんの」

理由はぶっちゃけわかってるが、それでもなお聞いた。聞いてやらないと可哀想かな、なんて思った。ああでもこっぴどい人から嫌われるんだろうな。

「ごめんなさい!!猫娘呼ばわりしてすみませんでした!!だから離してくださいお願いします!!」

「そんなの聞いてない」

逃げ出さないようにがっちりと襟を掴んでやる。桜はじたばたと

暴れるが、襟を掴まれては力づくで抜け出すのは困難だ。さもなくば首が締め付けられる。

「さて――」

ストレスの捌け口に向けて、あたしは暇な片手を振り上げた。

「……ッ！！」

視界の隅でそれを捉えていた桜の手が何かを握っていた。何だ、それは。どこから出したのか、そんなことを考える暇も無く、それはあたしの腹に勢いをつけて食い込み――

「がつ！！」

激痛。思わず桜の襟を掴んでいた手を離してしまう。桜はその隙をついて、あたしから距離をとった。ぐらりと揺らいだ上半身を支えるため、あたしは地面に触れる両足に力を入れる。

何だ、何が起きた。

痛む腹を押さえながら、殴ったのであろう桜を睨んだ。

彼の手に握られていたのは、小ぶりなハンマーだった。

「な……」

「……はっ！？あ、え、あの、これは」

荒く呼吸をしていた桜が、我に返って慌しく言葉を探す。生命の危機に瀕して、咄嗟に取り出したハンマーがあたしの腹を殴った――ということでもいいのだろうか。彼の慌て方を見る限り、故意では無さそうだ。演技だというなら話は別だが、桜の究極と言ってい

いびりりが火事場の馬鹿力を引き出したと考えれば辻褃は合う。

まあいい。これで彼に『ハンマーで殴られる痛み』を与えることが出来る。

武器を持たないあたしにとって、この痛みはありがたいものだった。

だんだんと痛みがひいてきた。痣にはなっているだろうが、切り傷よりはマシだ。切り傷はそれこそ大ダメージを与えるチャンスが増えるけれども、その分体力が削られるから。

「…ひやは、ひやはははははは」

「え、あの、猫娘（仮）さん…？」

「細波六月」
ななみむつき

「さざなみ…さん？」

「よつくもやってくれたなあこのチェリーブロッサムめええええええ！…！」

彼は自業自得という言葉を知っているのだろうか。目には目を、歯には歯を、でも可。

右の利き足で強く地面を蹴る。あたしの脚力では桜とあたしの間は半歩ほどで縮まった。一瞬で目前に迫ったあたしに、彼は目を見開いた。その瞳は驚愕と恐怖が混じったような色で濡れている。

拳は必要ない。触れるだけで能力を行使することが可能なあたしは、右手を彼の腕へ向かわせた。怯んだ桜には叫ぶ暇も無ければ、逃げる暇も無い——はずだった。

ドスッ、と痛々しい音がして、やはりあたしの痛覚が泣き叫んだ。

桜の肩へ伸びた右手は、彼に触れる前に一瞬停止した。その隙を利用し、また桜に距離を取られる。

さっきのは、見えていた。

恐ろしい反射神経だ、と感嘆しよう。――桜は、ハンマーをあたしの肩に振り下ろしたのだった。

「…うあ、ああ」

またやってしまった、と言いたげな呻き声が桜から漏れる。呻きたいのはこっちだ。二発目だからと言って、ハンマーに殴られる痛み慣れるわけでもない。むしろ倍増したかのように錯覚さえする。

「このッ…！」

ハンマー二発分のダメージを受けたあたしの身体には今、ハンマー二発分のダメージを与えるだけのエネルギーが貯蓄されている。一気に放出させることが出来れば、当たり前所にもよるが桜のような小柄な人間は気絶させることが可能になった。

だが、それが果たして出来るか。二回目の火事場の馬鹿力が、偶然にしては出来すぎている。

彼がそういう人間なのかはわからないが、無鉄砲に突っ込んでもまたハンマーで殴られるのがオチだろう。

あたしは苦虫を思いつきり噛み潰して、飲み込んでやった。エネルギーと一緒に、ストレスも溜め込んだあたしの身体に、ぐちゃぐちゃの苦虫は大分効いた。

火事場の馬鹿力は、窮地に立たされたときに出るものだと聞いている。

なら、その窮地を崩してやろうじゃないか。

「うぐ…っ、こっ、来ないでください!!」

ハンマーをあたしに見せつけるようにして桜は言うが、気にせずあたしは無表情でじりじりと詰め寄った。二回もハンマーで殴っているのだから脅しにくらいなるだろうと思ったのだろうが、あたし相手になるわけない。あたしが怖いのはストレス、それだけだ。……まあ、嘘だけだ。

さっきまでとは違う、焦らすように近づくあたしに、桜の火事場の馬鹿力は完全に出るタイミングを見失ったらしい。飛びかかって来ないしハンマーを振り回したりもしない。それでもあたしは油断はせずに、ゆっくりと確実に距離を詰める。直線距離にして大体5メートル。

桜は舐るような不穏な圧力に、元々引きつっていた顔をさらに引きつらせた。ここからでも握ったハンマーに力が入っているのがわかる。

そろそろか、とあたしが思った、その瞬間だった。

「わああああああッ!!!!」

桜の悲鳴と、あたしと桜の間にレンガの壁がそり立ったのはほぼ同時だった。

「なっ!？」

あたしの行く手を阻むその壁は、それこそ幅は広くない。だが、あたしの思考を中断させるのには十分すぎた。なお続く桜の絶叫が

徐々に遠くなっていくのに気づいて、慌てて壁を潜り抜けて彼を追う。

「わあああああああああ、あッ！！？」

「誰が逃がすか！」

やはりすぐ追いつけたあたしは、今度はかの壁のごとく桜の前に立ちふさがってやった。彼は怯えた表情をしていたが、手に持ったそれは凶器ではない。しかも桜は立ち止まらず、半ば発狂したように絶叫してハンマーを振りかぶってきた。

「あああああああああ！！！」

「っ！」

横殴りに迫ってきたそれは、どう避けるか考えることすらさせてくれないくらい、豪速だった。さっきの壁といい何といい、何なんだこいつは。

避けきれないと悟ったあたしは、作戦を変更して手の平でそれを受け止めることにした。もちろんそれだけでは手の骨が砕けて終わるだろうが、あたしの能力で相殺すれば受け止められるはずだ。

ぱんっ、と乾いた音がして、あたしは右手から伝わる鉄の冷たい感触を噛み締める。上手くいったみたいだ。桜がぼかんと呆気にとられている。あたしはもう一発分残ったエネルギーを叩き込もうと、ハンマーを押さえたまま桜の腹に左手を押し付けた。

思いのほか強くその手は彼の腹にめり込んだ。そしてそのまま、

「うぐっ！！！」

放出してやる。

小柄な桜の身体はいとも簡単に吹き飛ばされ、彼は公園の土の上に叩きつけられる。コンクリートよりは受ける衝撃は小さいはずだが、それでも桜は痛々しく呻いた。

「――さて」

あたしはそう小さく言って、倒れる彼に歩み寄った。

*

「こんにちは。細波六月さん、だよな？」

長身の美青年と、あたしは対峙していた。場所はいつもの大公園。黒髪の上のシルバーのヘアピンが日光を反射して、あたしの目を眩ませにかかる。

「…何の用」

「いや、この間光谷桜っていうレベル2の能力者がここで暴行にあつたって聞いて。その犯人が君だって聞いて、さ」

何だあいつ、レベル2だったのか。結局桜の能力が何だったのかはわからないままになっていた。まあ今となっては聞いてもどうにもならないし、あたしは心底どうでもいい。

「あんたは風紀委員か何か？」
ジャッジメント

「いいや」

黒髪は即答した。あたしは目を細める。

「…じゃあ何」

「ええ？俺が君に会いたかった理由なんて聞くほどのことじゃないよ。…ただ、ダメージカウンター衝撃貯蓄をボッコボコにしてみたくてさ」

桜といい、こいつといい、——あたしといい。

この街はイカれてしまっている。

【サンプル】 細波六月VS光谷桜（後書き）

（そんな街で、これからどんなことが起こるのだろうか？）

ボッコボコ宣言の彼と細波さんの話は書きません。多分。

【サンプル】とある小路の犬気支配（前書き）

オウニンポヤ様より、サンプル小説となります。

「サンプル」とある小路の大気支配

動脈より枝分かれした毛細血管によって人体の隅々まで血液が運ばれるのに似て、大通りより無数に別れた小路を通り生徒たちはここ、学園都市の各地へとその身を運んでゆく。

これはとある小路で起きたこと。

とある小路の大気支配

エアリアル

> i 3 3 4 9 3 — 2 1 6 1 <

夜、人通りが絶えた裏通り。月の光は聳え立つビルに遮られ、それに代わる街灯は疎らにあるのみ。影の黒さは幾重にも重ねられた罪の数。そこは正しく悪意が支配する空間である。

寮への近道なのであろうか、地へ届かんばかりに長い鮮やかな茶色い髪を揺らし、その少女は暗い小路を歩んでいた。常盤台中学の制服を纏ったその少女は盲いているのか、神と同じ色をした瞳に光はなく、左手に握られた白杖を振り行く手を探っている。

少女の前方に足音、三人分のそれが小路に響く。立ち止まった少女の行く手を塞ぐように足音は動き、そして指呼の距離で停止した。

足音の持ち主は、その顔を獲物を見つけ出した肉食獣のような笑みで歪めていた。彼らはこの小路を本拠として様々な悪事を為す不良少年の集団、いわゆる武装無能力者集団である。

スキルアウト

「おいおい姉ちゃん、こんな夜道の一人歩きはあぶねえぜ。それとも誘ってんのかあ。」

彼女の正面、リーダー格であろうか、三人の中央に位置する金髪の男が下卑た笑いと共に少女へと口を開く。

続けて金髪の右手側より、左耳にピアスをつけた男がニヤニヤと笑みを浮かべながら声を放つ。

「慌てて帰るにやまだ早えよ。寄り道ぐれえいいだろお。」

少女は男たちが漂わせている危険な雰囲気には怯えているのか、その場より動かないでいる。

「楽しいトコ知ってんだよ。遊びに行こうぜえ。」

黙り込んだ少女の姿は嗜虐心をそそるものであったのか、残る一人である丸顔の男は楽しげな顔でそう話しかけた。

少女が動きを見せたのはその時であった。軽い溜息と共に肩をすくませ、そして左手の白杖を地面に線を引くように軽く振る。

刹那、三人は何か足元を打ち払われ、その身を前方へと半回転させて倒れこむ。慌てて立ち上がろうとするが、彼らにできたことは驚愕の声を上げることぐらいであった。動かせるのは僅かに首のみ、彼らの腕が、足が、胴が、何かにより地面へと押さえつけられ微動だに出来ない。

「てめえ、何しやがッ!？」

得体の知れぬ戒めより逃れようと身を震わせつつ少女へと放たれ

た金髪の罵声は、延髄に何らかの衝撃を受けたのか、頭部を跳ね上げさせられたことで途切れ、そこから続くことはなかった。両側の二人も失神した金髪と同じように一瞬、頭をもたげたかと思うと意識を刈り取られた。

眼前の男たちが突如這いつくばり気を失う、という異常な事態が起こったというのに、少女が驚いた様子はない。それどころか、何の関心も持たぬかのように、この場を立ち去ろうと再び歩み始めた。

三人の横を抜けて進み続ける少女の後方より、軽い、踏み台より跳び下り着地したような足音が小路に木霊した。その音を聞き取った少女が振り返ると、路面に伸びた男たちの向こう側、そこに少女と同じく常盤台中学の制服に身を包み、黒髪をツインテールに纏めた女の子がいた。

「ジャッジメント風紀委員ですの！暴行の容疑で・・・と・・・これは・・・。」

背筋を伸ばし、袖に留めた腕章を示しつつ凜とした声で放たれた女の子の言葉は、次第に尻すばみになってゆき、全てが発せられることはなかった。

さもあるう。三人連れのアンチスキルが少女へと絡んでいる場面を監視モニターで確認し、現場の裏路地へと駆けつけてみれば、当の男たちは吐き捨てられたガムのように路面にへばり付いていたのだから。その無様な姿を目にすれば張った気も抜けよう、というものだ。

思わず脱力してしまったとは言え、その女の子もジャッジメント風紀委員として多くの経験を積んだ者、すぐに立ち直ると手際よく倒れている男たちに手錠を掛け拘束していく。

「あらー？そこにいるのは黒にゃんかしらー？」

少女が女の子へと話しかける。この二人は面識が有るようだった。

「風祭先輩！？・・・犬猫ではありませんのでその呼び方は止めていただけませんか？」

風紀委員の女の子、白井黒子は不良男子に絡まれていた少女が知人であったことに驚いた様子を見せた。ついで白井は軽く眉をよせて話し掛けてきた少女、風祭涼が使う呼び名が気に入らないらしく、使わないよう求める。

そしてはぐらかされる。

「えー？黒にゃんは黒にゃんでしょー？」

そのような風祭の反応に慣れているのか、白井は本題へと話を進めてゆく。

「それで、これはどういう状況ですの？」

「何にもやってないよー？この人たちが勝手に転んで気を失っただけだよー？」

「ウソですわね。」

風祭の返答を白井は一刀両断に切り捨てる。「状況」を問うているのに「何もやっていない」と答える時点で、「私は何かをやりました」と言っているようなものだ。

そして、風祭にはその「何か」を可能にするだけの能力を持っていた。

「なっ！？もしかして聞く耳なしー？」

「そう言う風祭を見る白井の目は、」好き勝手能力を使わずに風紀
委員長を待て、ジメント「いつも言っているじゃないですか！」と、雄弁に語
っていた。

「<大気支配>たる先輩の能力なら不良の二人や三人、エアリアル スキルアウト気絶させる
ことぐらい簡単ですの。」

「<大気支配>、それは学園都市最強の能力者たち（LEVEL5）
の一人、空力操作系能力者の頂点に立つ者へと授けられた尊称であ
る。この少女、風祭涼は大気の王者として君臨する者であった。」

「あはは・・・、じゃさよならー？」

これから先に予想される面倒を回避するべく逃げる宣言をする風
祭。それを止めようと白井は空間移動レポートの演算を開始するが、一歩遅
かった。

風祭の姿が一瞬、歪んだかと思うと溶けるように消失していった。

「じゃあねー？バイバーイー？」

虚空から姿なき風祭の声が小路に響く。残された白井の顔には、
「次はお説教だけでは済ましませんの！」という内心のセリフがあ
りありと刻まれていた。

【サンプル】とある小路の犬気支配（後書き）

オウニンボヤ様、ありがとうございました。

感想など、お待ちしております。

【サンプル】とある月夜の超進化論（前書き）

ユーシン様より、サンプル小説です。

「サンプル」とある月夜の超進化論

学園都市の十八学区にはトップクラスの教育機関意外にも様々な施設がある。例えば植物園。といってもその施設自体が大学の持ち物なのだが。

明星大学付属植物遺伝機能研究所、という書類上の堅苦しい名前ではお客がこないのに、園長の独断で勝手な看板が取り付けられている。もちろん研究施設といっても、観光を主軸になるよう設計されているので外装も内装も見栄えの点では問題ない。

ガラスのドームから見える生い茂った草木を見ればここが何をする所かはある程度推測できる。

こういった管理が難しい場所には専門のスタッフや業者を必要とするが、ここは違う。

すべてが学生達にまかされているのだ。それは園長でも例外ではない。茨野アゲハ^{いはの}という少女は十八歳にしてここの管理を任されている園長だ。

彼女は学生でありながら授業を受けることもなく一日ほとんどの時間を徘徊に使っていた。

入り口から入ってすぐにあるカフェから眺めることのできる花畑には様々な色の花が咲き誇り、彼女はちょうど今そこで水やりをしている。

木の幹のような髪色をした茨野の顔立ちは綺麗に整っているが、そこに血の気のない肌の色や生気の無い目つきが加わって、周囲には服屋に並ぶマネキンのような無機質で冷たい印象を与えており、身に着けている真っ黒なワンピースはもはや着せられているように見えてしまうほどだ。酷くいえば、ガラス越しのシヨールームでじっ

としても誰も気に留めないかもしれない。

生命力が溢れでるこの空間と対称的な茨野に、初めて来た人間は不気味さを感じ、そこに近寄ろうとしない。

だが、慣れればそんなこともないと言わんばかりに一人の少年が、彼女の背中に声をかけた。

「植物園の年間フリーパスって売れるんですか？」

赤黒いロツプイヤーのような髪で、白いカッターに黒いズボンの無個性な制服を着た少年は、草花を見に着たとは思えない、それでいてデリカシーのない台詞を平然と口に出しつつ問題のカードに目をやっている。

「あそこのカフェが見えるだろう？　昼食や放課後にここで時間をつぶしにくる学生用だ」

ゆっくりと振り返り、茨野が真っ白な指を向けた先にはたくさんのパラソルと椅子が並べられている。賑やかというほどではないがそれなりに席は埋まっているようだ。

「最近顔見てなかったんで、ちょっと心配だったんですけど」

「わざわざ訪ねてくれたのか？　心配も何も毎日同じことの繰り返しだ。巡回、食事、睡眠、それだけだ」

「あんまり充実して聞こえないんでやっぱり心配です。それで楽しいですか先輩は？」

「結論から言えば、割とな。お前が来てくれるだけで今日は十分

充実しているよ」

薄く笑みを浮かべる少女の言葉に、表情のなかった顔を少し赤くした少年は気恥ずかしさを誤魔化すように話題を変える。

「そういえば、オレが来たときはいつつもここにいるような気がするんですけど」

「この花には色々と思い入れがあるんだよ。　そうだなあ、お前はパンジーの花言葉を知っているか？」

「さあ？　ソーユータイプの豆知識には全然興味ないんで」

「心の平和、だそうだ」

茨野の目線は少年の方でなく、ネックレスのように首に下げている植物のデザインをあしらった銀の鍵の方だった。

その鍵をみつめる彼女は、どこか笑っているようにも悲しんでいるようにも見える。

「どっかで聞いたような気がするような、しないような」

「私の親友が好きだった言葉だ。　お前の方がよく聞いてそうだが」

「あんまり昔を振り返るのは好きじゃないんですよね」

少年は嫌そうな顔をしつつも彼女の言う親友と同じくであろう人物を思い浮かべてしまう。

会話が途切れたのが気まずいのか、「まあ、元気ならいいんです。

「じゃあ仕事があるんで行きますね」と、少年はそそくさ出口を目指して歩く。

とても短い会話だが、彼も彼女も特に不服そうな表情はない。少年はいつもせわしなく動き回っているし、少女にはいつでも時間がある。

簡単な見送りを終えた茨野は来た道をゆっくりと戻り、一番奥の自室を目指し歩を進め始めた。

茨野の自室は観覧できる区画と変わらない広さを誇る。外壁には大量のツタが張り付いて、そのいくつかは秋でもないのに紅葉しているのだが、それは試験的に造り出した植物を混ぜて観察するためだ。部屋の中央にある玉座に似せた岩のようなものと、そこに座らされたマネキンのように、じっと動かない少女は、屋根のガラス越しに差し込む薄い月明かりに照らされている。

「久しぶりの客人だな」

貯水用に外壁の真下に設置された細い円の水路が揺れを感知し進入者の存在を茨野に知らせる。

そしてすぐにボンツという音とともに、防火扉のような分厚い入り口が焼き切られて内に倒れた。

その奥から十人程度の物騒なモノを装備した覆面達が一斉に茨野を取り囲む。部屋の向こうからはキーンという耳障りなかん高い音が

響いてくる。

「茨野アゲハ。抵抗せずに後ろの扉を開け」

リーダーらしき男が指をさす先には植物園という光景からはどこか浮いている鉄の扉がある。

「対能力者用のジャミングか。用意がいいな。どこの部隊だ？」

「その状態ではろくに動けないだろう。お前はおとなしく開錠の方法を提示するだけでいい」

「その後で殺す、か……なかなか無慈悲な連中だ。そうやって何人殺してきたんだろうな」

溜息を吐きながらくだらなさそうにしている茨野の顔からは恐怖を感じ取れない。

「そうか、こちら側の危機感が伝わっていないらしいな。……三秒以内に答えろ」

男は不格好な機関銃の先を茨野に向ける。

「……三！二！いつ！……ちい？」

男の叫びはそこで途絶えた。なぜなら、彼は足下から生えた槍のような大木の根に腹部を貫かれたからだ。

男の頭は垂れ下がり、槍のようなものには赤黒い液体が流れている。

「結論から言えば、必要ない。それと、書類も見ずに能力者とい

うだけで判断したのは迂闊すぎるな」

一瞬状況を遅れて認識した他の覆面達は合図もなく一斉に銃の引き金を引く。

ダンッダンッという大量の発泡音が部屋中に響き渡る。

結果、一つも弾も彼女には届かない。阻んだのは先ほど男を貫いた槍のようなもので茨野が創り出した特別な植物だ。

茨野は背中に植えつけられた接続装置にある九つのうち二つのスロットをその植物に使用している。

一つは地面に潜らせ、もう一つは一度地面まで下がってから根のように別れ、槍のスカートがUの字状に彼女の全身を覆っている。

「ややこしい過程を省くと、私は創る能力者だ。つまり振るうすべては私が体を動かすことと大差ない」

そこで言葉を切る。そして強く、静かにこう言った。

「お前達の相手をしているのは特殊な武器を持った子供ではない。真正正銘の化け物だ」

それが合図だったのか、一斉に地中から槍が飛び出し、反応が遅れた者は先ほどと同じ結果を招いた。

何人かが転がるように回避して発泡を続けても茨野アゲハは座ったまま動かない。

編みこんだようになっていいる太い根の隙間を狙うには距離があり過ぎるし、この状況で足を止めることは自殺行為だ。

とっさに、部隊の一人が腰に着けていた缶ジュースぐらいの手榴弾からピンを引き抜き、彼女目掛けて投げつけた。

たとえ彼女自身にダメージが入らなくても植物は焼け、間接的に戦闘手段を失うだろうと判断したからだ。

小型といえ、それは人一人をバラバラにするには十分な威力である。爆発はドガンツという炸裂音とともに周囲を焼き、彼女のいる玉座を挟り飛ばし、周囲に大量の土煙を巻き上げた。

二人の男が彼女の死を確認するため近づくとか何か細い蛇のようなものが動くのが見えたが、その正体が分かった時には男の一人の体中に鞭のようなものが撒き付いていた。

バキバキッと肋骨が折られた音と共にゆっくりと立ち上がった茨野は頑丈な装甲さえ失ったものの体には傷一つない。

ぐらつと揺らめく彼女が袖を振るうと、中から飛び出す触手がもう一人の男の銃を握り潰す。

男は唐突な反撃に硬直してしまった。そして次の行動をとるよりも速く彼女の周囲に針山が築かれた。

残る三人のうち足を止めていた二人もすでに串刺しになっている。

「あと一人か」

その一人は茨野の視界には入っていないが、彼女は別の方法で索敵を開始する。

地中に潜った根には貫く意外にもう一つ役目がある。それは振動を感知することだ。

一本一本が彼女の意味で動かせるので、彼女からすれば簡単な作業だ。

「うおおおおおッ！！」

彼女は根で感知するよりも先に背後から絞り上げた絶叫を耳にした。

弾切れしたのか、迫る男は刺殺用と分かる異様なナイフを握っている。

それでも茨野は振り返らず、そこに立ち尽くす。

そして男は見た。彼女のばつくり開いて露出している背中部分、正確には中心の接続装置から急速に柿色の蕾が生まれた光景を。

今までの根や蔓と違い、具体的な使用方法のわからない武器に、男は思わず足を止めてしまう。

そして男の次の判断よりも先に蕾の茎が急激な細胞分裂を行い、花は男の目の前で開花した。

普通の花なら何の意味も持たないだろう。だがその花は違う。大きさは茨野の全身よりも二回り大きいなら全く違う意味になる。

男はその光景を見て、花が開くというよりもっと的確な表現があると素直に思った。

竜の頭が大きく口を開けている。実際には見たことなど無いがおそらくこんなものなのだろうと。

花卉一枚はまるで爬虫類の鱗のようで、内側には大きな刃が三重にびっしりと備わっている。

ガチンツと竜の口が閉じられたのを最後に辺りは静寂な夜に戻った。

砕かれて機材がむき出しになった玉座に腰掛ける茨野は首だけになった竜を眺めている。

あれこそが自身の能力名でもある『テンペスト』だ。破壊力は凄まじいものの、キャパシティーは馬鹿にならない。

百のエネルギーがあるなら、発生だけで五十、十分間の起動で十程度だろうか。あまり割に合わない。

この玉座のようなものは植物園全体とのパイプラインであり繋がったままなら百以上も余裕だがそれでは他がもたないので結局すぐに使い捨てる。

（まあ、キャパの高さが急速な枯化を生み出すから問題はないが、金属は溶かせないからな）

もうすでに水分を失い変色し始めている『テンペスト』は辺りの死体を丸飲みにし、内容物を溶かし栄養にしたものの、後ですぐ土にかえっていくだろう。

（いつからだろうか。何人殺したかも憶えていない）

静まりかえった中で、一人彼女は先ほど男を侮辱した言葉を思い出す。

人を殺すことは食物連鎖と変わらないと認識している、というよりそう考えることにした。勿論、いつしか自分の番が来ることも承知している。

彼女は親友と約束したのだ。ここの扉を守ってくれと頼まれ、自分はこの植物園という居場所をもらった。

だが彼女はその中身を知らないし、扉を開けたことも無い。そして今日もまた繰り返された殺戮も当初からはあまりにも想定外の事だった。

それでもいい、たとえ親友がいなくなろうと役目を降りる気はない。

ピオラという花はパンジーと誤解されるらしく、正確には別種で花の大きさが違うらしい。

それを誤解した親友はその花言葉の一つをパンジーとともに彼女に送ったのだ。

『信頼』。

（お前は私に、生きる理由をくれた。たとえこの奥にあるのがどんなにくだらないモノでも、お前との約束は私のすべてだ）

過去に円盤を埋め込んだ時から続いた悲惨な実験の毎日から、救い上げてくれた彼の手のぬくもりと、暖かい言葉の一つ一つを思い返しながら、彼女は瞳を閉じた。

【サンプル】とある月夜の超進化論（後書き）

ユーシン様、ありがとうございました。
感想お待ちしております。

オウニンボヤ様より。

序章ということ、よろしくおねがいます。

地に在る限り昼より夜へと時が進む。この不変の法則は全てを支配するもの。必ず訪れる夜は闇を含み、それは光を塗り潰し、一色へと染めてゆく。

ここ、学園都市もその例外とはならない。漆黒に沈む街を科学の光でどれほど明るく照らそうとも、全ての闇を破り捨てることなど出来はしない。

そう、このビルの屋上のように、かしこの建物の地下のように、闇は確かに存在する。

> i 3 4 5 5 0 — 2 1 6 1 <

1・Side | Mikoto Misaka

とある街角、そこに在るのは白という差し障りのない色を纏い、およそ特徴の無い形を取る、「無個性」の一言で表現可能な建築物。それが面する通りはもう深夜といってよいこの時間帯、人が通る気配などはない。白い建物と道を挟んだ対面のビル、その脇に設けられた街灯が、通る者が絶えた道をビルの下半分と共に明るく、しかし虚しく照らすのみ。

視点を移し、ビルの上方より下方を望む。黒々とした中空を四角に切り取るその空間の境界線、屋上の縁に足を置き佇む少女がいた。短めの茶髪を後ろで括り、黒いＴシャツとクリーム色のショートパンツという活動的な装いの少女。自らが立つビルの道向かい、白い建物を見据える少女の名は、御坂美琴という。

御坂は酷く疲れていた。さもあるう。昼夜問わず、休息も、食事
も碌に摂ることなく動き続けていたのだから。普段の健康的で活発
なイメージとは対照的に、今、ここにいる御坂は疲れ淀んだ雰囲気
を纏っていた。

しかし、御坂の瞳は力強い光を放っている。それは内に秘めた固
い意志であろうか、それとも強い怒りであろうか。

「あと二ヶ所。」

ポツリ、と御坂が呟く。それはとある計画に關与し、かつ未だ御
坂の襲撃を免れている施設の数。そのうちのひとつが御坂の視線の
先に在る建物、名をSプロセッサ社病理解析研究所という。

つい、と黒いキャップを握った手をかざし、御坂はそれを目深に
被る。その鍰の下、影に覆われたその表情は先程よりも厳しさを増
している。

自らに言い聞かせるように再び呟く。

「今夜中にすべてを終わらせる。」

意を決したのか、御坂は虚空へと足を踏み出す。眼下の標的を破
壊するべく。
けんきゅうじょ

それは『絶対能力進化』計画を止める為に、我が身の分身達を救
う為に。
イカレた
シスターズ

とある外道の断頭奔流（前書き）

asuta様よりお預かりしました。アポリオン様のキャラクターとのコラボになります。

とある外道の断頭奔流

「ぜえ．．．はあ．．．」

少女と男は逃げていた。

少女は、学園都市の暗部と呼ばれる組織に所属していた高位の能力者である。

男の方も、統括理事長直属部隊『獵犬部隊』に所属する元『警備員』である。

そんな二人は出会い、恋に落ちた。愛し合っているが故にお互いの死が怖かった。結ばれたいと、一緒にいたいと思っていたとしても、学園都市に、統括理事長アレクスター・クロウリーによって自分達は使い捨てられるのみである。そんな自分達の運命から逃れるために、二人は学園都市を捨てる覚悟をした。愛の逃避行。二人の前には希望しかなかった。なのに．．．．．

「何なんだよ！？アレは！？」

男は、少女の手を引き逃げながら叫ぶ。意味が分からなかった。何であんなモノがよりにもよって追いかけてくる？

男の口元だけが見える般若の面で覆い、ビジネススーツに身を包んだ、真つ黒い長髪を靡かせた死神のような男。それが、西洋刀を引き吊りながら追いかけてくるのだ。一目で分かる。アレは確実に危険だ。剣なんて持っているのだから、危険というのも当たり前かもしれない。だが、それ以上に纏っている雰囲気が危険過ぎた。暗部に所属する人間なら誰でも分かる、人を簡単に、躊躇いもなく殺せる人間の、独特な殺意。追いかけてくる死神のような男はそれを持っているのだ。

あれに追いつかれてはいけない。それだけを考えながら、男は少女の手を引いて逃げる。だが、運命とは無情かな。路地裏に逃げた二人は、死神のような男にあえなく追い詰められた。死神は、迫る。命を刈り取る武器を、カタカタという音を立てながら引きづって、

ゆらりゆらりと、陽炎のように。

男は少女を自分の後ろに隠しつつも、

「く、くるなあ――！」

恐怖のあまり銃を構える。『スターマイン星火花』と呼ばれる学園都市製のハンドガン。まだ暗部でしか出回っていない、未だ実験段階の、詳しい原理が男には全く理解不能な発明品。分かることは只一つ。これは、人を一発で血と肉の飛沫に変えられるということだ。

「ちよつとでも動いてみる――！こ、こ、こいつをおまえにぶち込むぞ――」

男は銃を構えて、目の前の死神に脅しをかける。だが、止まらない。死神は、一心不乱に、ただただ自分たちに迫ってくる。

「ひい！？」

男は、自分の想い人の前だということ等すっかり忘れ、情けない悲鳴を上げながら引き金を引いた。

バンッ――！という乾いた音が鳴り響く。銃弾は、真っ直ぐに死神のような男へと向かう。銃弾は死神の命を摘み取りにいく。しかし、
「フン――！」

死神は、それを蚊でもはたき落とすかのように、軽く叩き斬った。まるで鈍器を叩きつけるかのようなその動きは、決して剣術などと言ったスマートなものではなかった。言うならばそれは暴行。それは人殺し。乱暴で粗暴な、狂った殺人者の挙動であった。そんなことを考える間もなく、

「イライラさせるなあ――！」

男に刃が叩き付けられた。一閃する白刃は、男の右腕を斬り落とす。
「ギヤアアア――！」

男は痛みあまりにうずくまり、絶叫した。男は思った。このままでは確実に殺されると。その予想通り、死神は男にとどめを刺さんとして西洋刀を振り上げた。だが、その瞬間

「お前、何のつもりだ？」

死神は不意に動きを止め、尋ねた。今まで男の後ろに隠れていただ

けだった少女が両手を広げ立ちはだかった。

「モヨコー!」

男は少女の名前を叫んだ。モヨコと呼ばれた少女は男の方を振り返って、

「平気だよ、しげる。アナタにだけは手出しさせないから」

と言って微笑んだ。

「手出しさせないって．．．やめろよ．．．お前、戦闘系の能力者じゃないだろ．．．」

男、四季崎樹は、少女、倉科モヨコの死という未来がはつきり見えてしまい弱弱しく呟く。倉科モヨコの能力はレベル4記憶探求^{メモリートラベル}。相手の体の一部に触れ、記憶を選択して擬似体験する能力である。希少性が高い能力ながらも、戦闘能力は全くない。暗部組織に居た頃も、回される任務の殆どが諜報の類であった。それに相対するビジネススーツの男。何かの能力を使っていたのか、元々の身体能力かは不明だが、少なくとも銃弾よりは素早く動いていた。刀なんて持つてることからも分かる通り、明らかに戦闘系である。勝負は初めから明白であった。だが、

「大丈夫。絶対大丈夫だから」

少女はそれでも決して逃げようとはしない。恐怖に震えながらも、大切な人の為に。

「さっさとどいてくれないか？俺は可愛い女の子の顔面を破壊したくないんだ」

西洋刀を、モヨコののど元に突きつけながら男は吐き捨てた。だが、「やってもいい。けど、しげるには指一本触れさせない。死んだって、アナタを呪い殺してでも止めるから」

モヨコはそう言って死神の男を、凍てつくような眼光で睨む。その瞳には恐怖が映りながらも、それでいて力強かった。本気で呪い殺す気さえ伺えた。それを悟ると死神は逆上、

「アああははははは!」

．．．するどころか笑い出した。その光景に少女は呆然とし、男は

痛みさえ忘れそうなほど驚いた。

「ハア．．．面倒な」

打って変わり、死神は億劫そうに首をコキコキと鳴らした。いよいよもってモヨコは思考がついていかなかった。地面に蹲る樹も同じだ。

「男はともかくお前はいいや。助けてやろう」

死神は面を食らっているモヨコにそう言った。

「私だけって．．．しげるはどうするの!？」

モヨコの言葉に、

「知らんな。どのみち俺が殺さなくても別の誰かが殺るだろうよ」
素っ気なく死神は返す。

「蚊がいるとイライラして殺したくなる。つまりはそういうことだ」
非人道的な、それすらも超えて化物じみた考えだった。そう語った死神は、

「．．．．．行つてよし」

と言ってモヨコと樹に対して西洋刀を上段で構える。その行動は、
「三度は言わん。行つてよし」

と、自分に伝えているのだとモヨコは思った。だが、それを分かっていたながら少女は、

「私はここを絶対に退かない」

と力強くそう言った。大切な人を見捨てるという選択肢なんて、考えられるワケがなかった。死神はモヨコの決意を受け取ると、はあ．．．と溜め息を吐き、剣を振り下ろそうとした。その時、

「ま．．．待て．．．．．」

地面に崩れ落ちていた樹が、斬られた腕を押さえながら、立ち上がった。その様子に、死神は動きを止め、少女は目を見開き驚愕する。
「なんだ？」

死神は尋ねた。すると樹は、

「お前．．．．．モヨコがもしここで逃げれば．．．．．絶対手出ししないんだな？」

と問うた。

「見ていてイライラするバカカップルならともかく、流石に殺せんわ」
死神はあっさりと答えた。

「それに、さつきも言ったが、可愛い子は斬りたくない」

と、付け足す。死神の口調は飄々としていたが、嘘は無さそうだった。樹はそれを聞くと、

「そうか．．．．．良かった．．．．．」

そう言つて安堵の表情を浮かべた。

「何．．．．．言つてるの？」

モヨコはその表情を見るなり、樹にそう尋ねていた。

「まさか、私だけ助けて自分は死ぬとか、そんなこと言わないよね？」

嘘だと、そんなことはないと言つてほしかった。しかし、少女の思ひは簡単に打ち砕かれる。

「そうだ」

樹はたった一言そう言つた。何で？どうして？そんなモヨコの気持ちを察し、

「俺はモヨコに生きていて欲しい。そういう選択をして欲しい」

と自分の思いを伝えた。好意という気持ちから発生する、自己犠牲に過ぎないその気持ちを。

「もし俺と一緒に死ぬなんて言うなら、俺はモヨコ、君を嫌いになる」

その思いはあまりにも強く、少女にとって残酷な一言に結びついた。モヨコは絶望した。樹の嫌いになるという一言はポーズではなかった。本気で、死ぬその瞬間に自分との愛を忘れると、冷た過ぎる表情は伝えていた。死神から逃げきつて二人とも生きるなんて選択肢は最初から消え失せている。つまり選択肢は二人とも死ぬか、自分だけ生きるか。樹と心中を考えれば、樹は自分を嫌いなまま死んでしまう。かと言って、樹を見捨て逃げる選択なんて出来ない。少女は、死神がしびれを切らしかけたその時、選択した。

「グアアアアア！！」

後方から響く樹の断末魔を振り払いながら、モヨコは必死に走った。少女は、死神から逃げるという選択肢を取った。樹の気持ちに答えたかったのかもしれない。自分を好きなまま、樹に死んでもらいたかったのかもしれない。ただ単に、最後の最後で死神が怖くなったのかもしれない。兎に角少女は、自分だけが生きる道を選んだ。少女は走って、走って、走って……そうして幻想を殺す少年の物語が始まった鉄橋で、恋という名の物語が終わってしまった少女は全てを消失して立ち尽くした。

「……なんで私には力が無いんだ」

少女は自分の無力を呪った。能力者の街学園都市。様々な能力が0〜5までのレベルに分けられている。そんな街の中にいて、何故自分は戦闘系の能力者でないのか？大気の支配者と呼ばれる盲目の少女のように、引力を統べる争い嫌いの少女のように、感情の無い完全な空間移動能力者のように、最低最悪最強と呼ばれるスキルアウトの長のように、自分は何故超能力者（レベル5）ではないのか？

「……なんでしげるが死ななきゃいけないの？」

ふとした瞬間、出会った年上の男。出会った瞬間に二人は惹かれあい、最初はお互いに暗部の人間だと知らず、知ったらきつと自分を愛してくれなくなると思っていた。だが、樹は変わらずに自分を愛してくれた。自分にとって、間違いなく運命の人だったのに……

「……どうすればいいの？」

少女は誰かに答えをこうようには呟く。

「……しげるがいない世界なんて耐えられないよ」

少女は人知れず涙を流した。すると、どこからか声が聞こえた。

「死ねばいいんだよ」

と。妙に澄んだ、純白な少年の声だった。

「誰！？どこにいるの！？」

モヨコは辺りを探すが姿は見えなかった。そんなモヨコに、

「ここだよ」

と上から声をかけられた。モヨコがそちらを見上げると、ソイツはそこに存在していた。月を背に橋のアーチ部分に腰掛けたその少年。長点上機学園という、学園都市の名門校のブレザーの下に、ファーフードの真っ赤なパーカーを着た黒髪の少年だった。切れ長の瞳と妙に大人びたのである。月を背負っているその姿が似合い過ぎる程に似合い、そこはかとなない不気味さを漂わせていた。その少年は、

「√?5点」

と唐突に言い出した。少年の言葉の意味をイマイチ理解出来なかったようにできよとした表情をしていた。少年はハアと、溜め息をつき、

「君と四季崎くんの純愛ごっこに対する評価だよ」

と言った。

「ボクとしてはさ、相手の命を差し出して自分だけが生き残ろうとする、そういう人としての穢れた部分つてのを見たかったんだ。それなのに君達ときたら、お互いのことを庇いあつてさ」

さもつまらなさそうに、侮蔑を含めて少年はモヨコに語る。

「いらないんだよ、そういうの。純愛なら俄然、『君に届け』とか『花より男子』の方が上なんだから。ボクはそっちで間に合ってるんだよ」

少年の言葉は、罵詈雑言とかそういうレベルのものではなかった。モヨコが今まで生きる意味としてきた恋愛に対する全面否定である。ギリギリと齒軋りするモヨコの表情を見て少年は笑顔になり、
「さらに言っならさ、『お互いが死にそうな環境に置かれてるから駆け落ちする』？全くもって意味が分からないね。世の中にはもっ

と苦しい状況に置かれても、それでも愛し合ってる人達がいるんだ。その人達に対して、君達の行動は、侮辱に価するよ」

と、まともで一見筋の通った意見の中に侮蔑を込めて語った。

「だから√-5点だ。実数で表すことすら厚かましいんだよ。君達の行動はさ。ていうか、虚数で表すにしても過大評価だが。兎に角、ボクをあまりガツカリさせないで貰いたいな」

少年はそう言いながら、軽快な動きで立ち上がり、

「まったく。生体観測の為に『アンダーライン滞空回線』と携帯を無理矢理接続したっていうのに。観察対象の片方は、ポンコツを超えたジャンクときたよ」

と、肩を上げ、お手上げと言わんばかりの手振りをした。そして、少年は

「まあ、もう一方は期待以上のものを見せてくれたからこの観察は成功としておこう」

と言ってほくそ笑んだ。そんな少年の言動に、モヨコは怒りを露わにして、

「ふざけるな！！さっきからなんなの！？あなたは！？」

と叫んだ。すると少年は橋のアーチから、まるでそよ風に揺れる木の葉の如く、フワリと少女の目の前に降りてきた。風を操る能力でも持っていたのか？はたまた念動力かなにかか？兎に角少年は、少女倉科モヨコの前に相対した。そうして、

「何って、ボクはただ趣味を楽しもうとしたものの満足度が5割にしか到達しなかったから、少しガツカリしてるだけだが？」

と、至極真面目な顔で答えた。そして、モヨコが何かを言い出す前に、

「そういうことを聞いているのではなくて、ボクの名を尋ねているのなら」

と話し出す。

「ネットでのハンドルネームは『月桂冠』。裏社会での通称は『イスマン非無知者』。魔術と呼ばれる非科学世界での名はオカルトscio050。そ

して-」

少年はモヨコが、今にも噛みつきそうな獅子のように凶暴な表情になっながまつおおきみているのを楽しみながら、

「本名は永松大王。情報屋をやっている、しがない能力者だよ」

と言った。その瞬間少女のくすぶっていた怒りは臨界点に達し爆発した。モヨコは、

「ふざけるな!!」

と、激昂して情報屋を自ら名乗る少年永松大王に、拳を握りこんで殴りかかった。大王はそんな様子を他人事のように眺め微動だにしなかった。普通なら拳は、大王の頬骨を抉っていた筈だった。少女の一撃とは言えども、大王は細身で筋肉が無さそうな虚弱な体系であり、大王にとっては致命傷にも成りうる攻撃だった。しかし、
「.....っあ!!」

モヨコの方が逆に呻き声を上げていた。少女の拳は、大王ではなく彼と自分の間に突如として現れた氷の壁に阻まれたのだ。苦悶を浮かべたモヨコの表情が、壁の硬さを物語っていた。

「言い忘れてたけど、ボクは身に降りかかる外界からの干渉に対して、無意識下の防御が可能だから、そこのとこ悪しからず」

大王は人を食ったような物言いをする。少女はそんな大王を敵意を持って睨み付けた。が、

「あ.....れ.....?」

視界がどんどん大王から、下へ下へと遠ざかった。そして顔が地面にぶつかった。顔に激痛が走り、口の周りが真っ赤に染まった。そして、顔の激痛の後に、

「嫌アアアア!!」

それ以上の形容し難い痛みが襲いかかった。

足が、足が、足が-痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い-
思考の中はそれだけで埋められていった。分からなかった。いつ斬られたのだろう?

-私はいつ両足を斬られたんだ?

太股から先が切断されていた。少女はパニックになり、痛みのあまりに地面にのた打ち回った。だが、そんな状況下であろうとも情報屋の少年は至って冷ややかに、

「これも言い忘れてただけだよ」

と、話し始める。

「ボクの本名って裏の人間にとっては殺し名と同義語だから。今決めたけど」

そう言いながら、永松は少女を見下すように嘲笑う。そして、少女が自分に対して呪い殺すような視線を向けた瞬間、
グサツ！！

と、氷の棘がモヨコの顎を貫いた。

「うん。自分の本名を殺し名にするのはもうやめよう。自己紹介が不便になる」

大王は、勝手にそう自己完結し、

「そう思うだろ？ 岩見祥吾くん？」

と自分の視線の先にいる男に同意を求めた。そこには、先ほど倉科モヨコの思い人を殺した仮面の死神が刀をぶら下げて立っていた。

「――極めてどうでもいいな」

岩見祥吾と呼ばれた死神の男はそう吐き捨てる。

「そんなことより、どうして殺した？」

岩見祥吾は尋ねる。すると、大王は祥吾の言葉にクスリと笑い、

「本当に君は人に対して『愛する』か『殺す』か『無関心』かしか行動を選べないようだね。今の言動で大体分かった」

と言って

「君はこの娘を『愛する』という選択肢を取ったワケだね」と悟ったように語った。

「そして彼女の恋人である四季崎くんには『殺す』という選択肢を取った。全く君は本当に恐ろしいよ。故に面白いけど」

大王の物言いに、

「さっさと答えろ」

と祥吾は苛立ち始める。

「ああ。そうだったね」

大王はワザとらしくそう言って、

「まあ、一言で言えばボクは合理主義でね。いらなくなったものは邪魔だから、極力排除したいのさ」

と常軌を逸した考えをさも当然のことのように語った。その発言を聞いた瞬間、死神は西洋刀を引き抜こうとした。しかし、

「む？」

西洋刀は抜けなかった。西洋刀の鰐の部分に水が巻き付いて、いくら力を入れても抜けないのだ。

「言わせて貰うが、ここでボクに刃を向けるのは不正解だよ。君はボクに聞きたいことがあるんだろう？」

彼は岩見祥吾にそう、諭すように言った。苛立ちが募り始めていた祥吾だったが、大王の言い分は的を射ていた。そのために彼はあの二人を、さしてイライラもしていないのに殺したのだから。

「なら言え。すぐ言え。今言え。お前の顔を早く破壊したいんだ」

祥吾が刀から手を外し、面倒くさそうに、だが苛立ちながら言った。

「君の中に偏在するフラストレーションを消す方法だっけか？連続殺人鬼の岩見祥吾くん？」

大王は分かりきっていながらも、敢えて尋ねた。

「岩見祥吾。君がボクのところを訪れた時は驚いたよ。全国指名手配中の有名人が学園都市に潜伏していたとは知っていたがまさかボクにあんな事を頼むとは思わなかったからね」

大王は大袈裟に手振りをしながら言った。

「まあ、君にあんな過去があれば当然かもしれないが」と大王は同情するかのよう語る。

「お前のような奴に同情される覚えはないな」

祥吾は吐き捨てる。

「君の過去を色々と調べたり、記憶を探る能力者を雇って色々と調べたからね。そこから君のことは大抵予想出来る」

しかし、大王は語ることを止めない。

「岩見祥吾。20年前に放火魔により家族と死別。12歳の頃、とある人物と出会い西洋刀とビジネススーツと仮面の三点セットを手に入れその放火魔を殺害。それ以来、自分のフラストレーションの赴くがままに人を殺し、いつの間にもやら全国指名手配の犯罪者になつていた。大体こんな感じだよな？君の過去って」

「流石は自称『情報屋』だな」

自分の過去をさも壮大そうに語る大王に対し、祥吾は賞賛し、
「だがさつさと言え。今すぐお前の顔面を破壊したいと言っている
だろ？」

と自分の聞きたいことを答えるようにいった。

「あまり急かすな。君の聞きたいことへの『回答』だからさ」
大王はそう言つて、さらに語り続ける。

「君の人への接し方って、ボクの仮説が正しければ100%、20年前の放火が原因となつていんだよね。君が人を『愛する』のは、家族を失い愛に飢えているからだし、放火によってフラストレーションが溜まり『殺す』という選択肢を取るようになり、放火の後に全てに対して『無関心』だった名残で今でもその選択肢が存在するわけだ」

長々とした台詞を殆ど一息で言う。そして、

「だったら君のフラストレーション、消すなんてお断りだね」
と軽い調子で大王は語った。

・・・・・・・・・・イラッ。

祥吾は青筋を浮かばせる。

「君のフラストレーション、間違いなく今の君の人格形成に一役買つてるよ。だったら消してしまうなんて勿体ない」

大王は祥吾の反応を楽しみながらそう言つて

「ボクは『死神』としての君に『面白さ』を感じているんだからさ。
消すなんて有り得ないよ」

と大王は祥吾を馬鹿にしたように、嘲笑うかのように嬉しそうに語

る。祥吾のピリピリとした殺気を感じると、さらに

「言つとくけど君のフラストレーションを消せないわけじゃないから。学園都市には感情を操る能力者なんてのも沢山いるし、ボクはそついうところにもコネがあるからさ。ここ重要ね」

と明らかな侮蔑を込めて語った。その瞬間、

「もういいや。殺す」

祥吾のフラストレーションが頂点に達した。

「お前の顔面を破壊する！」

と、祥吾は宣言し、かと思えば祥吾の姿がいきなりその場から消失した。もしこの場に、他に人間がいたならば錯乱しかねなかっただろう。祥吾はいつの間にか大王の懐に入り西洋刀で大王の首をなぎにいき、その西洋刀を大王が氷柱のようなものを手に持ち、それを防いでいる状態が形成されていた。大王は氷柱の剣に罅が入っていることに冷や汗をかきながら、

「ねえ」

と祥吾に話かける。

「さつさとお前を斬りたいんだが・・・なんだ？」

と祥吾は西洋刀にさらに力を込めながら尋ねた。大王も氷柱の剣に力を込めながら、

「ボクがさつき放った『断頭奔流』^{ウォーターソウ}、いくつあったと思う？」

と聞いた。

「21だな」

祥吾は素っ気なく答える。

「ボクの『断頭奔流』、マッハ16で水を動かして放ってるんだけどさ、それをそんなにかわすなんてさ、どういうことだよ？」

大王は尋ねる。

「しかもさ、ボクは君が刀を抜けないように水でおさえてた筈なんだけどなんで君はこうして抜いてるんだよ？」

皮肉混じりの大王の言葉に祥吾は何も語らない。

「ていうか、ボクの鋼鉄より硬い氷の防御を力ずくで破った挙げ句

に、同じ硬さの氷の剣を破るなんてさ。君は一体どういう腕力をしているんだい？」

大王がそう尋ねた瞬間、

「お得意の情報網で調べれば？」

と祥吾が口を開いた。そうして、

「イライラすんだよ．．．お前を見ると」

祥吾は明らかに敵意を持って言い放つ。そして刀を一旦引いて、突きを大王に向けて放とうとするが、

「面倒な能力だ」

いきなり辺りに30cm先すら見えない程の濃霧が発生した。

「やめてくれ。岩見祥吾くん．．．．面倒だからシヨウちゃん
で良いかな？」

とどこからか、ふざけた調子の情報屋の声が響いた。しかも先ほどの場所にはいない。祥吾が辺りを探すと、

「無駄だよ。この霧の中じゃボクを探すなんて不可能だから」

と語る。尤も、大王にも祥吾の姿は見えておらず、自分の姿をさがしているのと当てずっぽうで語っているだけなのだ。

「いやあ。君の戦闘スタイル、予想通り近距離型だねえ。ボクの近距離戦闘用の裏技だけじゃ、いつかボクが出てくるし、自動演算による防御も通じそうにない。よって逃げさせて貰うよ」

霧の中から語りかける大王に、

「死ぬがいい」

と祥吾は言った。

「そう言っな。ボクだって君と戦いながら、観察を楽しみたいと思ってるけど」

霧から聞こえる祥吾の声はそう語り、

「今は他にも楽しみがある。ここでボクが死ぬのもキミが死ぬのも惜しいからさ」

と言って、大王は笑った。霧の所為で全く分からないが、確実に笑ったと祥吾は思った。その瞬間霧が晴れ薄気味の悪い情報屋の少年

はそこから、最初からそこにはいなかったかのように、忽然と姿を消した。それを確認すると祥吾は沸々と湧き上がる憤怒のままに、
「チツ．．．次に会った時は今度こそ．．．お前の顔面を破壊する」
夜の学園都市の中でそう誓った。

「予想通り、いや予想以上だ」

大王は夜の学園都市をピーターパンのように空を舞いながら、岩見祥吾をそう評価した。

永松大王は決して、水的能力と、氷的能力と、念動力を有する多重能力者ではない。彼は『水』に関することなら、状態変化も、運動も、硬度も、純度も操れる万能な水的能力者であるだけなのだ。氷と水の両方を操れるのもその為であり、先ほどの霧も空気中の水の操作で作りに出したのだ。そして、今こうして空を飛んでいるのも普段から、弱点である運動音痴をカバーするために表皮の上に纏っている『水の鎧』、能力によって体をあたかも操り人形のように操作し聖人並みの運動力を誇っているように見せる為の『裏技』を操り、空を飛んでいるだけなのだ。

「盲目の『エアリアル大気支配』、感情の無い『パーフェクトレポート完全移動』、逃げの『アトラクタ万有引力』、スキルアウト『プレッシャースペース圧殺空間』、この街はいくらでもボクを楽しませてくれる！」

心を躍らせながら少年は空を舞い、とあるビルの上に降り立った。
「これだから好きなんだ！！学園都市が！！世界ってヤツが！！」
そう興奮しながら叫ぶ。そうして、

「だからさ、やり過ぎるなよ。君の計画もボクを楽しませてくれるが、もし世界を殺すっていうならさ」

と言つて自分の目線の先にあるビルを、より正確にはそこに住まう
住人を冷たい瞳で睨んだ。

「君の幻想、跡形もなくぶち殺すよ？」

情報屋はそう宣戦布告する。

この街の創設者であり、最も歪んだ存在、『アレイスター』クロウ
リー』に対して -

とある外道の断頭奔流（後書き）

感想など、お待ちしております。

とある迷子の万有引力（前書き）

管理人より、a s u t a様のキャラである永松大王君をお借りしました。

とある迷子の万有引力

「えーっと……」

彼女——竜守綾季の視界を埋め尽くすのは、ひたすら人、人、人。

今日は休日。この第七学区はショッピングと称して外へ繰り出してきた人々で轟めいていた。

人々は皆、休日を有意義に過ごそうと同じようなことを考えてここに来たに違いない。そしてそれは、竜守とて例外ではなかった。

だが、今の彼女のこの状況は何か。

この状況と言うのは、自分の現在地を把握できず、さらに付き添いで来てくれた『彼』をも見失う——そんな状況である。

「これって……迷子？」

「とある迷子の万有引力」

「……と、とりあえずっ」

兎にも角にも、連絡をしなければ始まらない。そう思い立って、竜守は慌てて携帯電話を取り出そうとショートパンツのポケットに手をつっ込んだ。しかし、——まあ展開としては当然、そこに携帯電話の感触は無い。

「あれ？ ……お、落とした？」

竜守としては顔も真っ青である。竜守はやつと事態の深刻さを理解し、そして、

「どーしよっ！？ うわあ怒られる、怒られる以前に二度と巡り会えなくなる、もうなってる、うわあああん！！」

——パニックに陥った。

道の真ん中で小さなポニーテールを振り乱し喚く少女に、道を行く人々は当然彼女を怪訝な目で見ると見る。だがそんな視線に気づかないまま、竜守の思考はフルスロットルであらゆる選択肢を右往左往し、やがて一つの場所へ不時着した。

「とりあえず、探さないでっ！…ふにやつ！？」

弾かれたように竜守は駆け出そうとした。が、それは呆気なく阻まれる。

どんっ、と何かに衝突したのだ。

「……大丈夫？」

やんわりとした声色で、その何かは竜守に声をかけた。竜守は何が起きたのか、しばらくポカンと呆けていたが、やがて状況が掴めると素早く『何か』から一歩離れた。

「ごめんなさい！ あの、言い訳をいたしますと、綾季はわざとじゃなくて、急いで探さないといけないひとがいて、それであるパニックになつて周りが見えなくなつてとりあえずごめんなさい！」

深く頭を下げて、竜守は謝罪する。その謝罪の言葉は早口な上

に大音量で、道行く人々はやはり怪訝以下略。相手は困ったように笑った。

「僕は大丈夫だから、顔上げてよ」

そう言われておずおずと顔を上げる竜守。そこに居たのは、長身で細身の少年だった。着ている制服は、竜守もどこかで見たことがある。

その人懐っこい笑顔には好印象を受けるが、そのシルエットはどうにも細すぎるような気もする。なかなかの勢いでぶつかって、彼が押し負けなかったのが不思議なくらいだ。

簡単にぼつきり折れてしまいそうなその少年は、どことなく硝子細工のような『彼』に似ているような気がした。そして再び今が由々しき事態であることを思い出し、竜守は慌てふためく。

「あの！ほんとにすみませんでしたっ！じゃあ綾季は急ぐのでっ！」

「え、あ、ちょっと待って」

「はいっ!？」

改めて駆け出そうとした竜守を、少年は呼び止めた。事態の深刻さ故半泣き状態の竜守だが、そんな彼女の心情を少年が知る由もない。少年はおもむろに口を開いた。

「——綾季って言った？」

何を言っているのか、この少年は。

竜守は猫のような大きな目をぱちくりと瞬きさせると、「はい？」と聞き返した。

「だから……自分のこと、綾季って言った？」

「あ、まあ、はい……」

「上は？ 苗字」

「えと、竜守、ですけ……あ、」

見ず知らずの他人に名乗ってはいけない、と『彼』に言われていたことを今更思い出して、竜守は自分の口を手で覆った。また怒られる理由が一つ増える。

だがやはり遅い。少年は目つきを変えて、竜守に詰め寄った。

「竜守綾季ちゃん、でいいんだよね？」

「え、いや、あの」

「人探ししてるの？」

「まっ、まあ、はい……」

「迷子？」

「迷子じゃないっ！ー！」

反射的に否定してしまった。今までと違う反応に、少年は一瞬キョトンとしたようだったが、すぐにその表情を愉快そうに変える。

「もしよかつたらなんだけどさ、その人探し手伝ってあげるよ」

「っ、ほんとっ！？」

思わぬところから救いの手、と言ったところか。竜守は案の定それに食いついた。少年はにこにここと機嫌の良さそうに頷く。

「どうせボクも暇だしね。手伝うよ」

知らない人には付いていくな、と小学生が受けるような指導を日頃から聞いている竜守だったが（言わずもかなそう言ったのは『

彼』である）、今の状況とその忠告を秤にかけるとこれまた案の定、秤は前者に傾いた。忠告なんかは遠い彼方に吹き飛ばして、竜守は少年の手を掴んで言う。

「ありがとうっ！ すっごくありがとう！」

「どういたしまして。ボクは永松大王^{ながまつおおきみ}。探してる人が見つかるまで、よろしく」

*

竜守綾季という少女について。

まず年齢は十四歳だが、身長は148センチと小さい。さらに無邪気で大きな瞳も手伝って、実年齢より幼く見える。本人もそれを少し気にしているようではあるが、愛くるしい見た目のお陰で周りから好かれている節があるので明言はしていない。

そして中身も、これまた幼稚というか、純粹である。

彼女に嘘をつけば、まずバレることはないと言われる。疑うことを知らないのだ。単純に馬鹿だからともとれるが、どちらにしろ純粹だ。

と、まあこのように、竜守綾季という少女は何処かずれているところがある。それは今に始まったことではない。

だが、明らかにずれすぎているところが他にもある。

この学園都市では、超能力開発という少年漫画よろしくなカリキュラムが存在している。学園都市内の全ての学生が、その開発を受けそれぞれ異能の力を手にしているのだ。中にはそれが発現しな

い者も居るようではあるが、全くの無能というのはそう居ない。皆その強度に差はあれど、何かしらの力を手に入れている。

しかしその中で、全く異能の力を持たない無能力者以上に、稀な存在があった。

超能力者——レベル5。たった一人で軍隊に匹敵する力を持つと言われている、正真正銘の化け物がそれである。

230万人の学生が学園都市には在籍するが、レベル5はたったの七人しか居ない。それほどまでに彼らはイレギュラーだった。

話を戻して、単刀直入に本命を撃ち抜こう。

——竜守綾季は、まさにそのレベル5であった。

——そしてそれを、永松大王が知らないわけがなかった。

*

「え、えと、大王……？」

『彼』を探して第七学区を練り歩いていた竜守と永松は、いつの間にか学区の外れまで来ていた。

人通りはさつきまでの盛況ぶりが嘘のように皆無になっている。ひたすら学生寮ばかりが陳列しているが、その学生が居ないだけで何となく寂れた雰囲気を漂わせた。

「ここまで来ちゃったら流石に居ないと思うんだけど……」

竜守のこの意見は、彼女にしては的確だった。『彼』と彼女は

ショッピングに街へ出てきたわけだから、当然である。

だがそんな竜守の正論に、永松は返事をせずただ歩を進めるだけだった。

「大王、ねえ、大王つてば！ ストップ！」

反応を示さない永松に痺れを切らした竜守は、彼の腕を強く引いた。これにはやっと永松も、こちらを向く。

「聞いてるっ？ 戻ろうよ、多分こっちには居ないから」

「あー……いや、でももうちょっと」

「だから！ 居ないんだってば！」

意地でも腕を離そうとしない竜守に、永松は小さく溜め息をついた。溜め息をつきたいのは竜守の方だが、文句を言う暇を与えず永松は口を開く。

「もうちょっと人目につかないところに行きたかったんだけど、あまり目立つと面倒だし」

「え？」

わけがわからない、と言った風に、竜守は首を傾げた。理解が追いつかない竜守を尻目に彼は続ける。

「いい拾い物だな。——超能力者の万有引力がこんな単純に手に入るなんて」
アトラクタ

瞬間、竜守の頬を冷たいものが撫でて通り過ぎた。

「——え」

それが水の刃だと気づくのに、そう時間はかからなかった。

「大人しくついて来てくれるんだったらこういう手は使わないんだけど、仕方ないね」

本能的に、永松の腕を放し後ろに下がる。彼は笑みを――それも好奇心しか感じられない無邪気な笑みである――を浮かべていた。竜守は自身の血管が縮むような感覚を覚える。

「何で、その名前を……」

「ん？ 万有引力アトラクタっていう名前？ 有名じゃないか。重力操作系能力者の頂点に立つ超能力者だって」

まるで褒め称えるような言いぐさだったが、その名を冠している竜守としては嬉しくも何とも無い。警戒を解かぬまま、竜守は問う。

「……大王は綾季を連れてって、何するの」

「何って言われてもなあ。面白そうだから遊ぶだけだよ」

しかし返ってくるのは玉虫色の答えである。明らかな歪みを永松に感じながら、竜守は竦みそうな足に力を入れる。逃げる、と彼女の全身の神経は叫んでいた。

叫びはしたが、その前に。

どこからともなく、水の束が永松の背後で湧いた。轟々と音を響かせながら、その水は竜守を威嚇するようにうねる。

「早いうちにネタばらしした方がいいかな。……断頭奔流ウオーターソウ、簡単に言くと水流操作の能力だね。逃げる気なら容赦は出来ないよ」

「っ！」

はじかれたように竜守は彼に背を向けて駆け出した。タイミングを見計らい逃げ出すなら、今しか無かったのは間違っていない。だが、逃げ出すという行為は最早最善の策ではなかった。

轟！と水の大蛇が唸り、鱗を撒き散らしながら竜守の行く手を阻む。

阻んだものの——次の瞬間には大蛇はここでは珍しいコンクリートの道路に叩きつけられ、飛沫を散らしてその形を崩されていた。

「——やめて」

無論、そんなことが出来るのは一人しか居ない。

質量を持つあらゆる物質に存在する『引力』を、思うがままに操ることの出来る能力者——竜守綾季。

竜守は場面に似合わない、泣き出しそうな表情で振り返って、言った。

「その能力じゃ——大王じゃ、綾季を傷つけられないよ」

その言葉は、二人の間に語弊を生むには十分だった。それどころか、永松の知的好奇心を滾らせるのには十分すぎるくらいだ。

「……中身は普通の子なのかなんて考えてたけど」

「え？」

「流石超能力者」

「え、あの、何か勘違いして——！？」

聞き入れる耳が無いのか、はたまた聞く気が無いのか。再び永松

の背後から水の大蛇が噴き出す。今度はその数は五つに増え、それが違った動きを見せる。

「面白いや」

その言葉を合図に、蛇たちは一斉に竜守に向かって特攻した。

「――！」

猛攻、と形容するのが相応しいだろうか。蛇たちは目で追うのも難しい凄まじい速度で竜守に迫る。

だがそれも、竜守に届くことはない。今回は直接地面ではなく、空中でそれらは静止させられ道路に落ちた。

「ちがうんだよつ、見下すとかそんなじゃなくて、本当にそういう意味じゃなくて……っ!？」

蛇だけでは止まらない。次に竜守を狙ってきたのは、彼女によって地面に落とされた大蛇『だったもの』であった。

裏手から這い出たそれは、自身の身体を仰け反らせて竜守に向かって振りかぶっていた。竜守は反射的に、能力を使うより先に振り下ろされるであろう水の刃の軌道を読み身を擦らせる。

ドスッ!という鈍い音がして、刃はコンクリートを抉った。その威力はどう考えても水のものではない。

「っ……!」

「こんなもんじゃないだろ？」

身を擦らせた不安定な体勢の竜守に向けて、また先ほど地面に落

とした蛇が刃として復活を遂げ追撃してくる。戦闘慣れた他の能力者だったなら、このような状況をいくらでも打破出来たはずであった。永松もてつきりそう考えていた。

だが、生憎戦闘慣れしていない竜守は思わず怯み、あろうことが目を瞑ってその場にしゃがみ込んでしまう。

「あ」

これはまずい、と永松は直感する。――が、時既に遅し。

ズシャツ、と飛沫を散らしながら、水の刃はコンクリートにめり込んだ。

「え？」

「……ふ、え？」

何が起こったのか、二人の間に少しの静寂が流れる。
永松ではない。見たところ竜守でもない。

では誰か。

「駄々言うから一緒に来てやったのに、はぐれるわ携帯は通じないわ終いには不審者に襲われてるわ……。ホントどうにかなんねーの、お前」

ちょうど永松の正面、竜守の背中の中線上に、『彼』は居た。

声に聞き覚えがあったのか、恐る恐る振り返って『彼』を確認する竜守。そして案の定思い描いたそれであつたらしく、歓喜に顔を

綻ばせ——たかと思いきやすぐに引きつらせる。

白い肌に蒼い目、さらには金髪。この時点でフランス人形を思わせる風貌だが、細い手足が手伝ってフランス人形と言うより硝子細工を連想させる。繊細、美麗、なんて単語が浮かび上がる、そんな少年だった。

——これで妙に夥しい殺気を纏っていないければ、それだけで済んだものを。

「らっ、らいえ……？」

「何でお前はそうやって人にホイホイついて行くんだよ、自衛なんか小学生でも出来るぞ。小学生以下かお前は」

面倒そうにがしがしと頭を掻きながらしゃがみ込む竜守まで歩み寄る、ライエと呼ばれた硝子細工。小学生以下と罵られては黙っているわけにもいかない竜守だったが、立ち上がって抗議しようにも彼の静かで綺麗で繊細でおどろしい憤怒の圧力に口を開くことさえ出来ない。

「今までにも襲われてんだろ。いい加減学習しろよせめて暴れるとかしろよ頭潰すくらい造作もねえだろ」

「怖い！ 怖いよライエ！」

やつと口を聞けたかと思えば、何やら漫才のようなものが成立した。彼がただ饒舌に文句を連ねるのは怒り心頭であるという証拠だと竜守は知っている。早急に消火を行わなければならないと踏んだ彼女は、おずおずと言った。

「……ごめん、なさい」

「……別に怒ってねえよ」

「うそだっ！」

「あーもー、いいから」

適当に竜守をあしらうと、ライエは大人しく漫才を眺めていたらしい永松に向き直った。

「次、お前の番なんだけど。何か言い訳とかあるか？」

「あれ、ボクはとっちめられるのかい？ その前に聞きたいんだけど、キミは竜守綾季の保護者ってことであってる？」

「……だつたら何」

ライエの無愛想な返答を聞いた永松は、「じゃあちょうどいい」と笑って言った。

「しばらく彼女を譲ってくれないかな？」

返事は猛スピードで飛んできた釘だった。

釘は永松の黒髪を掠め、そのまま彼方へ飛んでいく。即答であった。

「……交渉決裂だな」

「随分堂々とした誘拐宣告じゃねえか。……ぶち殺すぞ」

「ちよつ、ライエ！ 前者の台詞と後者の台詞が綾季には結び付かないよ！」

何処から出したのかわからない釘を四本握ったライエは、竜守の指摘など無視して永松を睨み付ける。硝子のような外見のお陰で迫力は薄れているが、纏った殺気は誰にでも視認出来そうなほどであった。

「……なるほど。竜守綾季が妙に戦闘慣れしていないのはキミの仕業か。彼女を狙う虫を退治してきたのは君なんだね」

「お前には関係無い」

「関係あるよ。……キミも面白そうだから、ちょっと遊んで行こうか」

ぶわっと、水の網がライエと竜守の二人を囲むように湧き、飛沫をあげる。竜守は「ひっ」と小さく悲鳴をあげたが、ライエは動じない。——というか、まるで興味が無さそうだった。

その水の網が、幾数もの刃となり——彼らを中心に弾かれてしまったのだから無理も無い。

「選ばせてやる。——脳天ぶっ潰されて死ぬのと、心臓に釘刺されて死ぬのと。どっちがいい？」

散った水泡の中で、ライエは無表情を貫いたまま言った。

*

怪しい笑みを貼りつけた永松と、氷のような無表情のライエ。対峙する二人の少年の顔を、竜守はただ不安げに見渡すこととした出来ないでいた。もちろん声をかけられるものならすぐにでもかけたいだが、二人の間に流れる空気はどう足掻いても断ち切れない、と彼女は悟っていた。

そして、唯一断ち切ることが出来るものがあるとすれば、それは

空気を斬る、微かな音。そして直後に、轟という——やはり、音

ライエの放った——というより手から離れたただだったが——釘

を飲み込んだ永松の断頭奔流が、そのまま空気を突つ切りライエへ向かう。ライエは少し目を細めたかと思うと、竜守を庇うように立ち塞がった。

「っ、ライエ……！」

やっと発された竜守の声は、ズドン！という重い音に掻き消された。二人の目前まで迫っていた水の刃が見えない壁にぶち当たったかのように遮られる。雫の一つさえその壁を越えてくることはないやがて刃はその場で霧散した。

自身の技をことごとく潰された永松だったが、その表情は崩れない。ポーカーフェイスというやつだろうか、と竜守は思う。それどころか彼は、相変わらずの楽しい声色で呟いた。

「へえ……じゃ、これならどう？」

第二撃。今度は特攻でも、振り下ろされる水剣でもない。横から薙ぐように——まるで鞭のように、それは襲い掛かって来た。だがわかるのはそこまでで、『襲い掛かってきている』以上のことはわからない。——というのも、目視出来ないほどにそれはスピードを増していたのだ。

永松という一点から伸びているため、軌道を読むことは竜守でも容易だった。これならこれまでのように、単純に防ぐことが可能である。

バンツ！という叩きつけるような音。豪速のそれはやはり『見えない力』に阻まれた。そしてそのまま跳ね除けられる。

「ら、らいえ……」

「……気に入らねえな」

何が、と竜守が再び問う前に、永松が手を叩いた。まさに謎解きを始める探偵のように、彼は言う。

「なるほどね、よくわかった。——キミの能力は竜守綾季アトラクタと同一、もしくは似たようなものなんじゃないかい？　そこまで珍しい能力でもないわけだし」

「……だったら」

「色々考えて、レベル4と見たんだけど、どう？」

「……だったら」

何というワンパターンなレスポンス。だがそれ以上に、竜守を驚かせたものがあつた。

ライエの操る『見えない力』の正体を、曲がりなりにも解き明かしたのは永松が初めてだったのである。

斥力操作——簡単に言えば、そういうことだ。竜守が操る引力が引き寄せる力だと言うのなら、ライエの操る斥力は斥しりぞける力。大きくなれば物体同士は反発し合い、小さくなればそれらは引き付けあう。本質は竜守のそれとほとんど変わらない。

だが、操るのが『斥力』だというのが問題である。

「そろそろ種明かししてくれていいんじゃないかな？　ほら、ボクのは見たままだけど、キミのはまだ不確かだ」

「お前の予測で大体合ってる。それでいいだろ。それより——」
「よくないよ。ボクは面白い奴のことは隅々まで知っておきたい」

だからそれはお前だけの事情であろう、というか人の話は最後まで聞けよこの野郎、とばかりにライエは不愉快指数を跳ね上げた。

永松の饒の舌に、本来無の口であるライエが口挟みをする暇などは無かった。これで指数は二倍である。

苛立ちに対しての耐性が皆無なライエは、しびれを切らしたように溜め息をついて鬱積した思いを吐いた。

「——絶対排斥。^{レジスタント}これで満足かよ」

その言葉と、ほぼ同時に。

今時学園都市ではほとんど見られない、広いコンクリートの歩道が『弾けた』。文字通り——弾けたのである。

バゴツ！なんていう鈍い音と共に、永松の足元が炸裂した。コンクリートの大きな破片——最早それは岩塊と呼ぶのに似つかわしいそれと、粉塵が一斉に溢れる。暴風と砂塵が辺りを覆いつくし、竜守視界を霞ませにかかった。

「……っ、大王！」

一陣の風が吹き抜け、辺りは一瞬静寂を取り戻す。竜守は直ぐ様顔を隠していた腕を下ろし、目前で起きた大惨事に顔を青くさせた。

爆発と言ってもさし違えない事故だった。それに真っ向から巻き込まれた永松の無事は保障できるものではない。というか、ただの人間なら確実に死亡ものだ。だがそれを起こした本人は無情にも無言無表情無感情のスリーコンボを決め込んでいる。

「ライエっ！ やりすぎだよ！ 怪我どころじゃ済まないかもしれないじゃんっ！」

「怪我で済んでたまるか。死んでてもらわねーと困る」

「バカ！……わぷっ」

漂うだけだった砂塵が、風圧を受けてぶおっ、と一帯に沸き上がった。咄嗟に目を瞑り顔を守った竜守だったが、砂は顔のみならず全身に叩きつけてきて、少々痛い。

——風圧？ 思い立った瞬間には、竜守は身体中のちくちくとした痛みなど忘れて顔を上げていた。

「——今のはちよつと……いや、かなり危なかったかな」

舞った粉塵のせいでその姿は上手く掴めない。だが、声はしっかりと捉えられた。竜守は当然、ライエですら目を見開く。

砂の濃霧が退いたその先で、彼は——永松大王は、屈託の無い笑顔でそこに立っていた。

「お、大王……？」

「ビックリした。死ぬかと思ったよ、本当に」

そう言っただけのように笑う永松。笑い事じゃなかっただろう、と竜守は言葉を失う。代わってライエは竜守とは別の意味で押し黙っていた。

「さて、と。絶対排斥^{レジスタント}だっけ？ 聞いたことあるよ。学園都市で唯一斥力を操る能力者だっけ」

制服についた砂埃を払いながら、永松は確かめるように言う。話しかけられた当人は肯定も否定も示さなかったが、永松は構わずに続ける。

「ごめんごめん、さっきまでは予行練習みたいなもの。気を悪くしたんだったら謝るけど——もう遅いか」

わざわざ明言する必要が無いほどの大遅刻だ。上機嫌そうな永松に対し、不機嫌そうに彼を一瞥したライエは、足元に転がっていたコンクリートの破片を足で小さく小突いた。

まるで、鬱憤を閉じ込めていた蓋を開け放つスイッチを押したかのように。

＊

そこからは、れっきとした『戦闘』であった。

まず、自身の主力武器がほぼ無意味だということが明確になつて
メインウェポン
いるライエは当然釘を使うことはしなかった。永松の断頭奔流を打
ウォーターソウ
ち破るには結局大きな力が必要になる。釘ではそれが適わないとなれば、あとは別の——今この場合ではコンクリートの岩塊である——を使う他ない。普段は釘を自身の質量で飛ばしていた彼が岩を遠隔操作することが慣れているはずもなく、戦力的には圧倒的に不利な状況であった。対する永松はフルに能力を活用できるのだから尚更だ。

それでも文句も泣き言も、弱音すら吐かないのは、彼や竜守に永松の攻撃が届かないからである。

水には質量があり、質量さえあれば斥力は発生する。ライエにとって重要なのは『質量』だった。それが無いなら話は別だが、兎にも角にも目の前の鬼畜は質量を持たないもの——例えば熱、光、電気などを操作する術を持たない。よって、ライエの斥力による防御は破られることはないのだ。そう言った意味で言えば、戦略的には

彼が圧倒的有利だということになる。

ただ、目先の永松のにこやかな顔だけがライエのただでさえ切れやすい堪忍袋の尾をじわじわと腐らせていた。

永松を中心に空に舞った岩石たちが、風を切る音だけを残して彼に突撃しに入る。逃げ道は皆無。故に永松は一步も動かず、断頭奔流ウオーターソウの切っ先でそれらを砕き、飲み込みんだ。

そしてそのまま、砂やら何やらが混じった濁流をライエに——訂正、ライエの斥力の壁に叩きつける。一向に破ることの出来ない壁にそろそろジレンマを覚えてもおかしくないはずだが、そんなことは微塵も感じさせず永松は微笑み続ける。

再び岩が浮かび上がったのを見計らい、断頭奔流ウオーターソウは壁を破ることを諦めてまた主人を守る大蛇へと様変わりした。もうこんなことを飽きることもなく何度も繰り返している。竜守はさっぱり終了の兆しを見せない緊迫した空気に、だんだんと緊張し放題の心をやつれさせてきていた。

唯一変化しているものをあげるならば——それは、水流のスピードだろう。

目で追うのも難しいほどに、それは飛躍的にスピードを上げてきていた。轟音をたてながら猛スピードで迫ってくる水の大蛇には命の危機を感じさせるものがある。しかし、生憎ライエの斥力の障壁は速度に関係なく作用するので、結果的には大した変化とは言えないかもしれない。

バンツ！と、濁流が懲りもせず真っ向から特攻してきたのを斥力の壁が阻む。それは勢いを殺さずまに受け止められ、弾かれるようにして後退する。

「——うーん、つまらなくなってきたなあ。かと言って打開策があるわけでもなく……」

そうぼやいたのは永松だった。このままではたちごっこそのものだと踏んだ彼は、わざとらしく唸ったかと思うと、ぱっと何かを思いついたかのように顔を上げる。

「そうだ、ライエ君。こういうのは？」

彼の言葉と共に、濁った水の大蛇が幾数にも枝分かれする。根元から裂かれたそれは、薙刀の如く細く、高速で四方八方から二人に迫った。——否、高速という言葉では済まないように思われた。どちらかと言うとそれは——音速。

一閃、一閃、一閃。

これまで見てきた断頭奔流が重みと力強さで真っ向から敵を圧倒する剣であるなら、今四方からライエの壁を切り裂こうとしているそれは、速さとしなやかさで相手を攪乱させ首をはねる刀に違いないだろう。先ほどと比べると随分細身になった刀身のせいか、そのスピードは最早比べ物にならない。目で追うことも出来ず、気付けば壁に衝突している始末だ。

——もしかすると、彼は。

竜守は唐突に脳に浮かんだ不安に、背中がじつとりと濡れる感覚を覚える。当たり前だが気持ちのよいものではない。

不安の霧に巻かれていたそのとき、バンツ！という音と共に、水の刀が竜守の肩に触れる寸前で止まった。彼女は思わず「ひゃあっ!？」という悲鳴をあげ、その場から立ち退く。

「馬鹿、動くなっつーの」

そう叱咤するライエの声は静かではあるものの、余裕が無いように感じられた。仕方のないことだとわかつているだけに、「だつてびつくりしたら逃げたくなるじゃん！」とは思っても言えない。

彼と同系統の能力を持つ竜守には、そのデメリットも弱点も知っている。——正確に言うと、戦闘慣れしていない彼女はそれらを性質だとだけ理解していて、一転させればデメリットにもなりえるということを知っていた。

例えば、今まで破られることのなかった壁は常時展開されているものではない。引力と斥力はいくまで物体と物体との間に発生する力であつて、物体単体には絶対に発生しないものなのだ。つまり、この壁は『ライエ』と『水』という二つの物体があるからこそ——と言うより、ライエが『自分』と『水』を物体として認識できるからこそ成り得るものなのである。

そして、質量の大きさも関わってくる。質量が大きければ大きいほど引力と斥力は大きくなり、逆も然り。よって、細身になり質量を減らした断頭奔流は前よりずっと斥力が小さくなっているはずだった。

——視認出来ない上、質量が小さいとなれば、斥力を操作するのも困難になるわけで。

「やっぱり、ね」

「——！」

息を飲んだのは、ライエだけではない。

ドッ！と一際鋭利そうなそれが、竜守を突き刺そうと側方から迫っていた。

「ひッ……！」

竜守の掠れた声に、ライエは反射的に振り向く。——彼女がそう簡単に死ぬわけがないということを、彼はいつも忘れてしまうのだ。

竜守が本能的に自衛のための演算を組み上げたのと同時に、ぱきんと薙刀の時が止まる。だが、止まったのはその薙刀だけ。ライエに向かう刃は止まらない。

皮膚と、肉が裂ける嫌な音が鼓膜を揺さぶる。

「っ——！」

「あッ——！」

ハッと、意識をライエに向ける。彼の白い左腕に、赤い筋が通っていた。演算の名残があったからか、腕は刈り取られずに済んだらしい。傷口から深紅の液体が溢れるだけに留めている。一緒に、痛み二割、面倒臭さ八割の感情を込めた舌打ちが漏れた。

「らいえ……っ！」

「……別に、大したことない」

そんなはずがあるものか。命に関わる怪我でこそないが、やはり血を見るのは気持ちのいいことではない。よくもまあ舌打ち一つで済ませるものだ、と竜守は半ば彼に絶望する。

怪我をしてもなお変わらないライエの反応を見て、満足そうに永

松は言った。

「そんなに竜守綾季アトラクタが大事なんだね。ボクにはよくわからないけど」

能力事情に疎い竜守でも、永松が高位の能力者だと理解できた。――この手の能力でライエを圧倒する人物を見たのは初めてだったのだ。

ライエもそれをわかっているらしく、永松を睨む。

「彼女を巻き込まないように演算組んでるのが見え見えだし、お陰で演算速度も落ちてるみたいだし」

「うるさい、関係無い」

「……やっぱりわからないな」

相変わらずの、というか、より一層殺気を含むライエの声。向けられた牙に対して、永松は呆れたように溜め息をついた。

「どうしてそこまでして竜守綾季アトラクタを守ろうとするんだい？ 放っておいても勝手に死ぬような生き物じゃないだろう、『それ』は」

竜守の肩が震える。永松の言うことはもったもたであった。

超能力者は皆規格外の能力を有する。竜守も例外ではない。襲われることがあってもまず死なないし、それどころか一秒足らずで相手を殺すことが可能だ。

「むしろもう人間って言うのにも語弊が出るというか。何て言うんだろうね。異形？ 怪物？」

「……！」

言葉を失う。

「綾季………？」

「あれ、どうしたんだい、アトラクタ竜守綾季。キミのことを言ってるんだけど」

「う、う…！」

ぐらり、と竜守の『何か』が揺れる。喉の奥で熱が疼く。足が竦むのとは違うけれども、彼女の身体には身じろぎが許されない。

明らかに動揺している竜守を見、ライエはもう一度舌打ちをした。対して永松は一瞬きょんとしてからすぐにほくそ笑む。反応を楽しんでいると見えた。表情を出すまいとしても、竜守には元々無理な話であった。

「もしかしてさ——八年前の事故とか関係あったりする？」

「——……っ…！」

今度揺れたのは身体と瞳。身体を雁字搦めにしていたはずの緊張の糸が嘘のように弛緩し、支えの力を失ってふらつく。同じく焦点の定まらない瞳は何も映さない。

「おいっ、綾季！」

「ひっ、う…！」

ついに竜守の上半体が揺らいだ。地面に倒れる前に、ライエが竜守の肩を掴む。新たな支えに何とか持ちこたえる竜守だったが、表情を見るからに確実な意識を保っていない。

「あれ、まさかとは思うけど壊れちゃった？ 早いなあ、それだけ凄いトラウマになってるんだね。あの事故ももつと掘り下げておいた方がいいかな」

「お前…！」

「さて、と。キミはどうするのかな。竜守綾季アトラクタを渡すか、死ぬかのどっちかってことに——あ、でもキミももう少し遊ぶ余地がありそうだし…」

苛々、とかそんなレベルではない。そもそも、『怒る』という感情ですらない。目の前の鬼畜が竜守の心を抉ったということに、信じられないほど強い不快感を感じた。

何と言うか、それは——危機感。

今すぐにも永松の憎たらしい笑みをぐちゃぐちゃにしてやりたい、と思う。純粹にそう思った。だが、それはこの状態の竜守を差し置いてすることではない。そうライエは思い直して、竜守の身体を支えなおすと、永松に向き直った。

「決めた？ 竜守綾季アトラクタが心配ならついて来てくれてもいいんだけど」

「アホ、誰がついて行くか。そもそも渡さない」

「…えーと、それは死にたいってことでいいの？」

「生憎だけど俺は精神的DMでも何でもねえからそれもない」

「……理解に苦しむから単刀直入に言ってくれないか？」

ライエが極めて小さく、呟くように返す。

「こつこつことだ」

爆発、破裂。派手に音をたてて破裂したのは、やはりコンクリー

ト。今回は三度、その音がして、その分に見合うだけの量の砂塵が辺りに溢れかえった。

「——こういうこと、って——」

自身の能力ゆえ『無意識下での防御』なるものが可能である永松は、それに対して怯みもしない。どちらかと言うと呆れ返るくらいだが——

とんつ、という軽く地面を蹴る音が聞こえた——ような気がした。

永松の頭上を、身を翻して彼が飛び越えていく。

「——へえ」

「んじやな、鬼畜」

超能力者を抱えた金髪碧眼の硝子細工のような少年は、言葉の通り『全てを拒絶』しながらそこから飛び去った。

*

自身を石や砂から守っていた氷が、空気へ溶けるように消えていく。

永松は、コンクリートの岩塊やら何やらが散乱するそこに突っ立っていた。

（……あー、勿体無い）

逃げるにしても、後退するだろうとばかり思っていた。だがライ

工は、竜守綾季というリスクの塊を抱えたまま特攻して自らの頭上を飛び越えて行ったのである。

（最悪死ななきゃ良かったのかな。大事にしてるなーとは思っただけど）

そうだったならばかなり性質が悪いだろう、と苦笑する。何という最悪な王子様だろうか。

「さて、と」

永松はこれからどうしようかを思案した。彼を追うもよし、追って殺すのもある意味よし。まだまだ遊びがいはあるだろうと思う。

間を取って、永松は引き返すことにした。

どうせあの最悪な王子様は、近く自分を殺しにやって来るに違いないだろうから。

（それにしても——あいつ、絶対惚れてるって。竜守綾季に）

とある迷子の万有引力（後書き）

後日談なんかもございますので、合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力 + (前書き)

『とある迷子の万有引力』の後日談…みたいなものです。合わせてどうぞ。

とある迷子の万有引力+

竜守綾季が恐れているのは何か。

答えは複数ある。例えば幽霊だとか、虫だとか、ピーマンだとか。普通の女の子が思う恐いものと、大差無い。

「——やだよ……」

だが、虚ろな目でそう呟いた彼女は生憎なことに『普通』ではない。真正銘の化け物、超能力者。

世話焼きな保護者はライエの腕の傷を見て慌てて救急箱を取りに行ったところだ。ライエはその間に力無く自分に縋りつく竜守を彼女の寝室へと運んだ。あの場を無理矢理脱した決断は間違っではないはずだったが、変わり果てた竜守を見るとそれも思えなくなってくる。

「やだ…やだよ……」

そう呟いたのは何度目になるかわからない。ライエは半ば乱暴に竜守をベッドに放り投げた。こうなった状態の彼女を見るのは初めてではないから、対処法も知っている。『絶対安静』という名の放置がそれである。

すぐに立ち去ろうとしたライエだったが、自身も貧血で目眩を起していることに気づいた。これ以上歩くと良くないような気がして、ベッドに腰を下ろしておく。

「いや、だよ…！」

竜守が呻くように呟く言葉は変わらない。何とも鬱な気分させ
るBGMに、ライエは一つ溜め息をついた。

彼女の恐がるもの。ライエはその全体を掴み得ない。知っているのは一部だけである。竜守から直に聞くのも気が引ける——というかこの様だし、他に全てを知っているのはあの忌々しい研究者のみであるから、どうにも機会が持てない。というか、持ちたくない。

八年前。竜守とライエが会うほんの前のことである。

竜守はそのとき既に万有引力という能力を有していたらしい。八年前で、彼女は今十四歳であるから、当時六歳だろうか。そんな若い少女を用いて、忌々しい研究者はある実験を行ったのだそうだ。

成果は——無し。実験途中で爆発事故が起こったのだ。

最初百人は居たと言うのに、生還したのはその研究者と竜守の二人だけ。使用した施設は全焼して、それこそ本当に成果はマイナスといった感じであろう。話を聞いたときライエは、ざまあねえな、と思ったものである。もちろん研究者に対して。

爆発を起こしたのは機器類だったらしいが、その具体的な理由は公表されなかった。ここからライエの憶測になるが、今思うと研究者が器用に裏で手を引いたのだろう、と予測できる。下手をすれば竜守綾季という研究材料を奪われてしまうことにも繋がるだろうから。

その研究者が何をしようとしていたのか、機器の爆発理由は何なのか。そこさえわかればきっと、竜守の恐怖するものの正体が見えてくるはずなのである。

(……憎いね)

全くこの少女は、自分をどこまで振り回したら気が済むのか。能力は自分より格上だし、その癖に戦うことはいけないことだとくならない精神論を述べるし。本気で自分を殺そうとした人物——まあライエのことなのだが——を堂々と許すと言っし、その上彼を「恩人」だと言っし。お陰で、すっかり病んでしまったではないか。

（ほんと、訳わかんね…）

彼女も、自分も。

結局彼女の手のひらで踊り続けているだけだ。

どういうわけだか竜守を守り続ける自分に、憤りに似た感情を感じる。守っても意味は無い。むしろ足手まといになるくらいであるう。

それでも、竜守はその手で自分の手を握る。

彼女は、きつとそれを知らず知らずのうちにやっているだけ。自分は、自分を繋ぎとめるために彼女が必要なだけ。

（かつこ悪い、今まで綾季なんか消してやろうと思ってたのに。酷い様だな…）

とりあえず、あいつ——永松大王は殺してやらないと竜守が、自分が危ない。自衛のためにも、あの鬼畜は敵として警戒した方がよさそうだとライエは思う。

廊下の方からばたばたと慌しい音が聞こえてきた。部屋を乱雑に使っているせいで救急箱の発掘に時間がかかったのだろう。ライエ

はその音で血生臭い思考から抜け出すと、精神系能力を有する友人もどきに連絡しなくちゃいけない、という思考へシフトした。当然、竜守の苦痛を除くために、である。

無言無表情でただひたすら燃え上がるテンションを押さえるままに
A T O G A K I !!

いかがでしたでしょうか？企画主催者として最初にあげた小説が
どうにも酷い出来でお目汚しになってしまったやもしれません。こ
れで大体一ヶ月かそれ以上かかっているんですから驚きです。皆さ
んにご迷惑をおかけしましたことともに、とにかく永松君と a s
u t a 様には多大なる感謝を。

さて、今回は a s u t a 様からキャラクターを拉致…ではなくご
招待いたしましたて、書かせていただいたわけですが。永松君は面白
ければそれでいい思考の所謂俺得キャラクターです。上手く書けて
いるでしょうか。ホントにもう…色々変なこと聞きに行つてすみま
せん、 a s u t a 様…！書くのが本当に楽しかったです。ありがと
うございました。

続いては我が子について少し。今回起用したのは引力斥力コンビ
です。永松君のキャラに一目ぼれして、いい感じに襲われてくれる
子って誰だろう、と考えたとき疾風迅雷が如き速さで綾季ちゃんが
上がりました。レベル5だし！面白いし！ライエに関してはノーコ

メントです。綾季在るところライエ在り。ライエは何だか永松君を
目の敵にしそうなので目の敵エンドにしましゅ（（）

本編だけでは何だか消化不良に感じたので、少し後日談（まあ後
日じゃないですけど）みたいなものを書きました。戦闘描写が無い
とskskでいいですね！とりあえず恐らく書くであろう『とある
科学の万有引力』^{アトラクタ}にもちよこつとリンクするので、頭の片隅にでも
置いていただけるとありがたいです。あれっ、何か宣伝みたくなっ
てる。

そんなわけでアトガキがそんなに長くてもアレなので、そろそろ
区切りをば。次の企画小説も近いうちに！目標は12月中に！クリ
スマスに間に合うように書いていきたいなー、とか思っています。
戦闘は…次のモチベーションの大波が来るまで待つてください…。
らぶこめを…らぶこめを書かせてください…。では、どうかそれま
で見捨てないでいただけると幸いです。

ここまで読んでくださった方々に、溢れんばかりの感謝を！

【サンプル】機械人間と新天界人（前書き）

ディング様よりお預かりしました。サンプル小説になります。

「サンプル」機械人間と新天界人

「はあああじいいいめええくうううん!？」

『うわっ、来た!!!』

相澤一、もといA01はただいま絶賛爆走中だった。

『悪かった植木っち!!謝る!!謝る!!ライカ電光石火で追いかけるのはやめええええ!!』

「許すわけないでしょおおおおお!?君のせいでバーゲン行けなかったんだよおおお!!」

『そんなバーゲンくらいで……………ギャアアアア……………』

そもそもこうなってしまった訳とは。

お昼過ぎ

『あー腹減った。植木っちゃんか買ってなんか奢って』

「自分で買いなよ。僕今月ピンチなんだよ」

『まあ俺達はレベル0だもんな』

ここ学園都市はレベルの高さによって奨学金などの額が上下する。彼らにいたってはレベルなどの問題ではなく、2人とも能力開発自体受けてない。植木は頭に電極をつけた瞬間痛いと言って逃げ出し、相澤にいたっては能力開発なんてものを受けたら死んでしまうような体をしているのでできない。そもそも2人とも人であって人ではないので、例えば能力開発を受けたとしても能力を使う事は不可能だ。なので表向きは2人ともレベル0となっており、それによってもらえる奨学金の額が驚くほど低い。植木にはじつは他にも収入源があるが、それでも少々生活をするには足りず、貧乏生活を強いられているのだ。

「でも確かにおなか空いたね。どこかでお昼ご飯食べようか」

『あーあそこはどうだ?』

相澤が指を指した先には、曲がり角にあるラーメンのお店。なかなか和風な雰囲気で、お客さんもそんなにいない。

『どうだ？』

「うん、確かによさそうだね。あそこにしようか」

2人はうなずきあい、店に入ってしまった。

「あーおいしかった」

『植木っち食い過ぎ。店の人泣いてたぞ』

店に入ってメニューを見ると、早食い企画のようなラーメンがあったのでラーメンに目がない植木は即座にそれを頼む。

制限時間30分だったところを5分で完食してしまい、さらに植木はもう一つ同じ物を注文。さすがにペースは落ちたものの7分で完食し、10000円分のラーメンをただにしてもらい、賞金の10000円を入手して店を出た植木であった。

店にとつてはとんだ誤算であつただろう。

植木はラーメンが好物で、ラーメンであればバケツ10杯分食べれるらしい。

潰したラーメン店は数知れず。異名『ラーメン店の死神』と呼ばれる男だ。

彼が昔いた町ではこのような早食い企画をやることは決してない。なぜなら、一日で彼が店を潰してしまうからである。

「あーおなかいっぱい」

植木は腹をポンポンと叩きながら満足げに言う。

『さすがラーメン店の死神だな』

相澤は半分感心しながら言う。

「やめてよハジメ君。あれなんてほんの少しじゃないか。今日は調子悪くてさ」

『あれで!?!』

相澤は驚きの表情を見せる。今回の店は運がよかったようだ。

「…あれ？あそこの郵便局こんな時間なのにシャッター閉じてる」

植木の視線の先には、今の時間閉まってるはずのないシャッターが閉まっている郵便局が見えた。

『あー、あれじゃないか！？強盗とか』

「そつだとしたら問題だね。行く？相棒さん」

『当たり前だ相棒』

2人は郵便局の裏に周り、裏口を目指した。

「『おっじゃましてーす』」

「な！？なんだ貴様ら！！」

「問答無用！！」

「侵入『寝てろ』……」

相澤が0・5秒で見張りの首を絞めて意識をブラックアウトさせた。

「やっぱり強盗か」

『物騒な世の中になったな』

「そうだね。通り魔に刺されたり……」

『それは言っな』

2人は裏口から侵入し、郵便局に乗り込んだ。

『いやっほおおおおおおおう!!!!!!!!!!』

相澤が雄叫びをあげて、近くにいた銃を持っている男を殴り、気絶させる。

「「「「!?!?!?!」」」」

「もっと静かにやってよ。もう気づかれちゃったじゃないか」

『そんなのは俺の性分に合わねえ』

「だ、だれだ!!」

「『人間』」

実際に2人は人間ではないが、2人とも口をそろえてそう言う。

「チ、死ね!!」

銃を持った男は銃を構え、撃つ。

「よっ」

植木に向かったその弾はドッジボールをよけるような感覚で避けられた。

「な…!!」

『うし。行くか』

「頼むよ相棒さん」

そんなやりとりをすると、銃を持った男が笑う。

「はっ、相棒を庇うつてか！？友情だねえ、じゃあ死にやがれ！！」

銃をもった男たちは一斉に銃を撃ってくる。

「とっ。はっ。突撃ー！！」

『ちょ、待て植木っち！！』

植木は相澤を持ち上げ、それを自分の前にだして男たちに向かう。

「（むしろ相棒を盾にしてるー！！）」

ここで初めて強盗犯たちと中で縛られていた人達の思考がリンクする。

「ちっ、てめえから死にやがれ！！」

一人の男は銃を乱射させる。

『イタイイタイイタイイタイ』

カンカンカン、という音がして相澤の体に銃弾は弾かれる。

「!？」

「百鬼^{ヒツク}夜行!!（ものっそい手加減）」

「ぐぼは!？」

植木はブロックのような物体を突くように発射し、男を気絶させた。

「な、なんで銃が効かないんだ!？」

「なんでもなにも」

『じつじつことぞ』

そこまで言つと相澤はガトリング砲を腹の中から取り出し、強盗犯たちの銃目掛けて発射する。

そう、彼はサイボーグであり、いままでセリフの枠が『』だったのも機械であるためだ。

「「な…!!」」

銃は男たちの手から離れて、カラカラと音をたてて落ちる。

「さーて」

『お待ちかねの』

『「フルボッコタイムだ（よ）」』

「「「た、助け…」」」

『ロケットパンチ!!』『モップヘッドバット!!』

相澤は腕を飛ばし、植木は右手からモップを召喚してそれぞれ攻撃した。

「「ぎゃあああああああああ!!」」

『終わったな植木っち』

「そうだね。あ、アンチスキル警備員が来たよ。後は任せようか」

「そういう訳にはいきません。あなたがたに事情聴取をします」

2人^{ント}が振り向くと、緑色の腕章をつけた女子中学生：天下の風紀委ジャッジメント

員が立っていた。

「やば…」

「早く来てください」

『あ、俺無関係ですんでー。さようならー』

「ハジメくうくうくうくうん!？」

相澤は足のブーストをフル稼働させ、その場から去った。
「あなたに2人分の事情聴取を受けてもらいます。覚悟してください」

「うわあああああ…」

あわれ植木はその風紀委員
ジャッジメント
に連れて行かれてしまった。

夕方

『あー、疲れた。アイス買いにいこ』

「へー、それはよかったね…」

『（ビクッ！！）』

ゴゴゴゴゴ、という音がして植木が相澤の目の前に立ち上がる。

「人に面倒事を押しつけといて自分はアイスかー…いいご身分だね。機械のクセに」

『ちよ、ちよつと待つんだ植木っち。人は話せば分かりあえる!』

相澤にそんな機能はないはずなのに冷や汗を滝のように流しながら必死に弁解する。

「そう…でも残念だったね。あいにく僕も君も人じゃないんだよ」

言い忘れていたが植木は人間ではなく、『新天界人^{ネオ}』という人のように人でない生き物だ。

『新天界人^{ネオ}』はAをBにかえる能力や、神器という装備を扱うことができるのだが、今の相澤、もといA01にはそんなことはどうでもよかった。

『…………』

「……………歯あくいしばれっ」

キレた。

植木がキレてしまった。

一番怒らせてはならない人物を怒らせてしまった。

その脅威を一番よく知っている相澤は、

『…さようなら！！』

ブーストを使い全速力で逃げ出す。

「逃がさないよ」ライカ電光石火」

それを植木はローラーブレードのような神器で追いかけ始めた。

その後相澤は植木に捕まり、神器集中砲火を受けてしばらく学校を休む羽目になったのは植木からすればどうでもいい事である。

とある昼夜の黒之微笑（前書き）

あしゆき様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボです。

とある昼夜の黒之微笑

12月某日、夕方、学園都市、とある公園。一人の少女がベンチに座り途方に暮れていた。

「……また携帯忘れた」

どうしよう、と頭を抱えているのは”竜守綾季”見かけは美少女で普通そうに見えるが、服装は異常だった。冬だというのに寒さを感じないのか半袖短パンなのだ。おかげで通りかかる人は体を震わせた。

「あんなことあったばかりなのに……どうしよう、ライエに怒られる」

あんなこととは、前回は参照にしてほしい。簡単に言えば外道と戦ったのだ。

だが、あんなことがあった翌日に出掛けられるその神経の図太さは称えるべきかバカにするべきなのか。今日はちよつとテンションが高いから知らないところに出掛けてみよー等と訳のわからないことをほざいた数時間後にこれである。やはり、天然等という生易しいものではなく、ただのバカなのだろう。

けど綾季は決して迷子になってわけではないのだ！ちょっと好奇心にたかられて冒険に出掛けただけなんだ！と竜守は心のなかで愚痴る。けれどそれで現状が回復するわけがなく、もう一度ベンチに座って重く息を吐いた、口からでた溜め息は冬の空の下、白い息となり空気に溶ける。

「ハア……どうしよう」

携帯もない、保護者（仮）も行方不明、ここはどこ？状態。打つ手なし。そんな時だった、公園に一人、コートとマフラーをつけた者がベンチに座って溜め息をついている竜守を視界に入れる。その人は勇気を振り絞り声をかけた。

「あ。あの、その、だ、大丈夫でしかあ？」

へ？と竜守は顔をあげた、そこには黒と紫のメッシュ、黒いコートにチェック柄のマフラー。メチャクチャオドオドしている女が男がよく分からない人がいた。

「ええっと、どちら様ですか？」

「あつ、ええっと、その、あつ……」

あまりにオドオドしている目の前の人に竜守は首を傾げる、背は竜守の方が低い、竜守はベンチの上に立って落ち着かせるためにその人の頭を撫でる。

「大丈夫、落ち着いて？綾季は何もしないから、ね？」

竜守は安心させるためにその人に優しく微笑んだ。その人は意を決してのかは、はいと答える。

「ぼ、僕は”常闇直人”、です。よ、よろしくお願いでし！」

でしか…ちょっと可愛いと竜守は内心そう思う、それに声も中性的なので分らないが多分女性なのだろう。うん、可愛いし和む。常闇はその様子に気づいてないのか話を続ける。

「あの、その、困ってそうだったんで、その…」

ああなるほど。と竜守は頷く。常闇は純粹に竜守が困ってそうな顔をしていたから声をかけたのだ。しかも竜守の格好は半袖短パンなのである、もしかして服を買うお金もないのかもしれない。それも一つの要因なのだった。

困ってる人は見過ごせない。ある意味、竜守とよく似てるかもしれない。

「そうだったんだ……ありがとう直人」

「よ、呼び捨て!？」

「あ。ごめん。嫌だった?」

流石にちょっと馴れ馴れしかったかな? 竜守はそう思いすぐに謝る。

「え、いや、そのびっくりしただけなんで、別にいいです、よ?」

「そう? ありがとう!」

につこりと満面の笑みを浮かべる竜守、常闇もそれを見て思わず笑う。

「うんうん、やっぱり女の子は笑顔が一番だよね!」

「……………僕、男でし」

「あ？」

――

「……………」

「あ、あの、その、元気出してくださいでし」

結果として言うと、探し人である”ライエ”は見つからなかった。
30分も探したが影も形も見当たらず、結局振り出しである公園に戻ってきた。

「ハア…どうしよう。ここ初めてくるところだから帰り道なんて分からないよー！」

竜守は叫ぶ。まあ知らないところで冒険に出て、あげくのはてには迷子になる。完全に自業自得である。それに時間も時間である。この公園には時計がないため分からないが、太陽は既に三分の一も覗かしていない。

それに、夜の学園都市は素行の悪い奴らが彷徨く時間である。戦い
をなるべく避けたい竜守にとっては早く家に帰って寝たいところだ。
このままだと、危険な夜の中、野宿することになる。それだけは一
人としても避けなければならない！

しかし、彼女は気づかない。この世にはホテルというものがあるこ
とを。

「あ、あの、もし、よかつたら、僕の家に来ませんか？」

しかし、救いの手は目の前にあった。それを聞いた竜守はガバツと
俯いていた顔を上げ、常闇の手を取った。

「え？いいの？本当！？」

「で、でし」

あまりの食い付きように常闇は思わず引く、ドン引きである。

「あ、ありがとうー！」

路頭に迷っていた自分を助けてくれた、今の竜守には常闇の背後に後光が差しているように見えるだろう。あまりの嬉しさにピヨピヨンと跳ねる竜守を見て常闇は現金な人だなあと笑いながら苦笑を浮かべていた。

とその時。

「へえ姉ちゃんたち綺麗だな」

ザッザッと音をたてて男が近づいてくる、男たちは三人とも下品な笑みを浮かべている。竜守は思わず顔を歪める、常闇はびくびくする。

「どうだい？俺たちと一緒に遊ばない？」

「……悪いですけど、綾季達もう帰るんで。行こ直人」

竜守はびくびくしている常闇の手を引っ張って公園を出ようとするが男たちがそれを許さない。

「まあまあそう言わずにさあ」

と男が竜守の肩に触れようとした時、パン！と男は手を弾かれる。竜守はしまった！という顔をする。

「（しまったー！反発状態を解くのを忘れてたー！）」

竜守は純粹だ、それこそ嘘を本当と信じこむ程に。詐欺師に会えば100%騙される。だが、前回のようないことがあつてはいけない、そのため竜守は自信の能力を使い質量を持つ物を反発するようにしていたのだ。

「っ！コイツ、能力者だ！」

ど、どうしよう！もう誤魔化せないし、けどケンカは痛いから嫌だし。そうだ！強い人の振りをしよう！そしたら諦めてくれるはず！この思考にかかった時間、僅か0.5秒である。そうと決まれば早速行動。

「ハア…そうだよ、見たところ貴方達一般人だろうし、あきらめて帰ってください。死にたいなら別だけど（え、えっと。こんな感じだよね？なりきれてるかな？）」

はつきり言って、これを見て振りだと気づけるのはライエだけだろ

う。

そう言われた男達はますます笑みを浮かべる。そして懷からウォークマンを取り出す。

「俺らさあ、前に能力者に痛みつけられたんだよねえ。だから、その時の鬱憤を姉ちゃん達はらさせてもらっぜ！」

カチツとボタンを押す、するとウォークマンから金切り音が流れて竜守の脳に激痛が走る。

「ッ……！」

あまりの激痛に竜守は頭を抱えて踞る、男達はそれをニヤニヤしながら見下していた。

「（何……これ……頭が……ッ……！）」

「ハハハ……！スゲエなあ！これがキャパシディダウンの力か！」

キャパシディダウン、それは一種の音響兵器。能力者の演算能力を阻害し、大幅に下げる道具。竜守は『超能力者』だ、能力は完全に

抑え込むとはいかないが『弱能力者』程度にまで下げられてしまう。

「綾季ちゃん！」

常闇は効いてないのか、普通にしている。しかし、その顔は焦燥に塗りつぶされていた。

「ハハハ！無駄だって！お前の声だって認識出来てるかすら分かんないだぜ？」

「おい、はやくやつちまおうぜ？俺もう我慢出来ねえよ！」

「そうだなあ、んじゃいつちょ腰振りますか」

下品な笑い声を上げながら男達は竜守に手を伸ばす。

「に、逃…げ、て。直人（誰か、助けて……私はいいからせめて直人だけでも！）」

竜守は助けを強く願うが、そう毎回毎回ヒーローが来るはずもない。涙が一筋流れた、その時、太陽が地平線へと消えた。

パン！常闇がその手を弾く、男手を押さえて常闇を睨みつける。

「何すんだこのアマ！」

「……いかん、いかんねえ。こんな美少女に手を出すなんて」

常闇は刃のように雰囲気を纏い、男を睨みつけた。

「美少女は汚すもんじゃねえ、愛でるもんだ」

常闇は先程とは全く逆の雰囲気を纏っていた。オドオドしていた気の弱さは男にタンカされる程に強くなり、その目はつり上がった。髪は黒と紫のメッシュ、それがより恐怖心を駆り立てた。男は思わずその雰囲気飲まれそうになる。

「く、くそ！行くぞお前ら！」

しかし男はなんとか常闇の雰囲気に耐え残りの二人に声をかけるが、声はだれもない公園に響くだけだった。

「お、おい！お前、ら」

男は不安になって振り返る。そこには真っ黒い何かに刺され、まるでその罪を償うかのように十字架のようなポーズをしたをした男二人がいた。

「ひつ、な、なんだよ…これ？」

「安心しろ。お前もすぐにああなる」

男は振り返る、そして見る。自分を殺そうと襲ってくる、無数の黒の槍を。

そこで男の意識は途切れた。

――

「う、うっ……ん？」

暗い部屋の中、竜守は目を覚ました。頭がボーッとする。考えが纏まらない。暗くて見えないが辛うじて机の上にコップがあることだ

けは分かった。目を覚ますために竜守は中身があるかどうかを確認して、コップを傾けた。

「ブーッ！ゲホッ、ゲホッ！に、苦アアア！」

そして吹き出した、珈琲のようだが、苦い、ひたすら苦い。どれだけ珈琲が好きな人でもこれほど苦い珈琲を飲む人など存在しないだろう。まるで炭焼きで炭になった物の苦味を百個分詰め込んだ苦さだ。わかさ生活もビックリである。これを飲む人があるのだとすれば、それはただのキチガイか、味覚障害を持つ人だけだ。

だが、おかげで目は覚めた。とりあえず状況を判断しよう。確かに自分は公園で男達に変な音を聞かされて、何も考えられなくなって、そこで意識は途切れた。

「……判断材料、何一つないじゃん」

もしかすると、自分は男に連れ去られてここに来たのかもしれない。暗い部屋で一人、ヒトリ。そして竜守の頭の中で一つの記憶が浮かトラウマび上がる。

「ひ、い、嫌だよ…嫌だよお」

竜守はその場で踞り、小さく小刻みに震え出す。しかし、どれだけ嘆いても部屋には竜守の怯えた声しか響かない。

その時、コンコンとドアがノックされる。思わずビクツと震える。もしかして、あの男達の仲間かも知れない。ケンカは嫌いだが、大人しくやられるつもりはさらさらない。震える体に鞭を打って、演算を始める。的はあの扉の向こうにたたずんでいる誰か。ドアノブが回る、珈琲を吹き出したことによつて空気中に漂っている水分を凝固させ、小さいが槍にする。扉が少しずつ開かれ光が射し込んでいく。狙いを定め、いざ！

「あれ？起きてたんだ。丁度ご飯出来たから、持ってきたよ」

「へ？」

ビシャッと、水の槍が床に落ちた。そこいたのは自分を色々と助けてくれた、後光の射す人、常闇がいた。

リビング、中々質のよさそうなソファーに二人は座っていた。一人は竜守、もう一人は常闇だ。竜守はよほど腹が減っていたのか常闇

の作った炒飯をものすごい勢いで食べる。それを常闇は冷や汗をたらしながら微笑んで眺めている。

「んぐんぐ…つまり、直人は二重人格みたいなものなんだよね？」

「まあ、簡単に言うならそんな感じだな。あと、焦らなくていいからもつとゆっくり食え」

常闇が竜守に言った情報をまとめるところだ。

自分は能力の関係で昼と夜の性格が替わる。昼は竜守の見た通りの気が弱く常にびくびくしている臆病な性格、夜は男にタン力をきれるほどに気が強くなり、口調も荒くなる。そして能力が使えるようになる。その能力は『黒之微笑』影や闇を操る能力で常闇自信『超能力者』らしい。なので竜守も『超能力者』で『万有引力』だと言うととても驚いた顔をしていた、理由を聞くと『まあ綾季ちゃんには関係のないことさ』とはぐらかされた。

次に竜守がここまで連れてこられた経緯だ。竜守が気絶した後夜となり常闇の能力は解放、あつという間に男三人を倒したあとどうするか考え結局自宅に連れてきて寝かしたらしい。そのあと目を覚ました時のために飯を作り、部屋に置きに入ったところああなった、ということだ。

「ンゲング……んぐツ!？」

「あーあー、焦るなって言ったのによ。ほれ、水だ」

急いでろくに嚙まずに食べていた結果、やはりというべきか喉に米が詰まる。常闇はそれを見て苦笑いしながら水の入ったコップを手渡す。竜守はそれをはんば奪うように取って一気に飲み干した。

「プハア!…危なかった」

「ったく、あれほど言っただろうが」

竜守はえへへとはにかんで誤魔化す、それを見た常闇は呆れたように溜め息をつく。普段なら文句の一つも言うところだが、こんな純粋度100%の笑顔を見ては責められない。自分も存外甘くなったなと常闇はもう一度ため息をついた。

その時、リビングにチャイムが響く。誰かがきたようだ。

「ああ、もう来たのか。速かったな」

常闇は誰が来たのか分かったような口調で玄関に向かう。竜守首を

傾げたが気にせずチ炒飯を再びスプーンですくった。

少し経ち、竜守はご飯三号分は合ったであろう炒飯を一粒も残さず平らげていた。どうやらかなり腹を空かせていたらしい。

『おい、綾季ちゃん！お迎えがきたよー』

「？お迎え？」

竜守は綾季を迎えに来てくれる人なんていたっけ？なんてことを考えながら満腹感に浮かれながら玄関まで歩いていった。玄関には笑顔で、いやニヤニヤしている常闇と常闇を殺すと言わんばかりに睨んでいるライエがいた。ってか一触即発の空気だった。

「ライエ！直人とケンカはダメだよ！」

「……………チツ、覚えとけよ根倉野郎」

「まあまあ青春少年。愛しの綾季ちゃんが来たんだから機嫌直せよ」

「……………テメエはやっぱりここで殺す！」

「おっと、遊んでくれるのかい？」

「やめなさい！ケンカはダメ！」

常闇は冗談だ、と言ってまたニヤニヤし始める。それを見てライエは思わず手に持っている釘を投げそうになるが竜守の視線に気づき舌打ちをしながら釘を納めた。

「……帰んぞ、説教はそのあとだ」

「ハハハ……はい」

ライエはこんなところに一秒もいたくないと思わせるほどのスピードで玄関のドアを開けた、竜守は常闇にバイバイ、またねと言ってライエの後を追った。それを常闇は笑顔で見送っていた。

その背中が見えなくなり一人になった時、常闇は携帯を取りだし、誰かと通話し始めた。

「もしもーし、『黒之微笑』だけど。お前から受けた依頼 『万有引力』の殺害 だけど、あれ、破棄させてもらっわ」

『ッ———！』

「うつせえなあ、もう決めたんだよ。それにやる気がない。ああ、金はびた一文返さないからな」

「———！」

「あーあー、聞こえないーい。んじゃあな」

まだ何かしゃべっていたようだが、常闇は聞こえない振りをして通話を切った。冬の寒空の下、常闇は空を見上げて今日一日の出来事を思いだし、笑う。

「またね、か」

竜守が別れ際に言った言葉が常闇の頭の中に駆け巡る。常闇は楽しそうに嬉しそうに笑うと自分の部屋へ夕飯の用意をするために帰っていった。

「ハア！？なんじゃこりゃ！三合分もあつた炒飯が全部食われてやる！あれ俺の夕飯でもあつたのに！恨むぜ綾季ちゃん！」

誰もいないリビング、綺麗に平らげられていた炒飯が盛られていた皿を見て常闇は頭を抱えた。竜守は何故かくしゃみが出たとか。

とある昼夜の黒之微笑（後書き）

あしゆき様、ありがとうございました。感想などお待ちしております。

「サンプル」忘 善人（前書き）

黒羊様よりお預かりした、サンプル小説となります。

「サンプル」忘 善人

スキルアウトと呼ばれる連中がいる。

基本としてレベル0の集団が集まった、いわゆるこの学園都市におけるはぐれ者達。だが、はぐれ者だからといって力が無いのかといわれればそうではない。

武器を持てば当然、単純な数だけでも力になる。

古河^{ふるかわ}もまた、そう考える一人だった。

確かに自分は超能力を得られなかった。だがそれがなんだ。それで奴ら能力者に劣っているだなんて認めない。

能力があるからといって威張り散らす奴らこそクズだ。奴らと仲良くする奴らも同じ。それを正当化するこの街全てが気に入らない。

だから古河は数を集めた。武器を集めた。

あらゆる手段で、あらゆる奴らを。

そうして手に入れた力。これは自分の力だ。

古河はその力で能力者達を襲った。威張りくさった能力者が、地に伏して助けを乞うのは快感だった。涙と鼻水でグシャグシャになった顔で謝る姿は痛快だった。

そうして屈服した能力者を兵隊として使うのもまた、王様にでもなったように気持ちが良い。

能力者を狩り、狩った能力者を呑み込んだチームはみるみるうちにデカくなった。

気付けばチームの名前が決まる前に、この学区で逆らう奴がいなくなる程に。

ジャッジメントだろうとアンチスキルだろうと関係ない。むしろ俺たちが奴らを狩ってやる。

俺たちを馬鹿にする奴ら一人残らず、狩りつくしてやる。

そう決意していた所だった。

仲間と共にファミレスで昼食を食べていると、小さな子供——
おそらく小学生か中学生——が突然古河に向かってふざけた事を言った。本当に、ふざけた内容だった。

多分この少年は古河たちの事を知らなかったのだろう。

古河たちの事を知っている周囲の者達は顔を青くしてアンチスキルがジャッチメント辺りに連絡しているのが見えた。

しかし自分達が逃げる必要などない。来れば狩られるのは向こうだ。だから古河はゆったりと少年に尋ねた。

『デメエ、能力者か？』

本音をいえばこの質問に意味はない。既に報復相手が能力者だけでなくなってしまうていた古河にとって、自分に舐めた事をした少年は絶対許さない。たとえ彼が無能力者であろうと。

少年はまだ状況がわかっていないのか『うん』と無邪気に頷いた。意味の無い質問だったが、返答はとても愉快なものだった。

古河が席を立つ。仲間もニヤニヤと笑みを浮かべながら立ち上がる。

そうして古河は少年連れ店を出ると、人気もない、監視カメラの死角に連れて行った。

その日の夜、古河はチームのアジトへ向かっていた。
基本チームの活動は自由で、たとえば古河が能力者を狩るから人を
集める、と命令した時に連中は集まりそいつを数で潰す。

なのだが今日はちょっと違った。

家に帰ってから、チームの副リーダーの立場にある仲間から携帯に
連絡が入った。今夜メンバー全員を集めた集会をしよう。
何故だと聞くと、彼はそろそろチームの名前を決めた方がいいと答
えた。今夜それを古河の口から発表しよう。

古河が作り上げたチームはあまりにも急激に大きくなってしまった。
最初は自分と同じような連中を集め。その後もひたすら熱心に活動
を続け、似たようなチームを吸収し、能力者を従え。その後色々あ
って時間がなく、まだ名前がなかった。

彼自身、そろそろ考えていた事だった。なので仲間の言葉に同意し、
ついでにメンバーを今夜アジトに集めるよう指示を出した。

古河のチームのアジトとはある事情から使われなくなった研究所。
というか、研究が始まる前になんらかの理由で実験が凍結され、建
物だけ建てたはいいが、一度も使われることもなく捨てられた。
機材も何も運び込まれていない、ただっ広いスペースがあるだけの
伽藍の箱。

とかく数の多い古河たちにとっては都合の良いアジトだった。

古河がアジトに入ると、既に仲間は全員集まっているようだった。

元々の仲間に加え吸収したチームの連中、そして奴隷にした能力者共。

圧巻だった。

数もさることながら、武器の質も捕まえた能力者達の兵力も。これだけの力があればこの街全てを支配する事も出来る。そう思わせる程に。

「おー、やつと来たか」

見ると例の副リーダーの男が古河に手を挙げながら近付いてきた。彼もまた、今夜の光景に胸躍らせているようで、いつもよりテンションが高い。

古河はリーダーらしく、平静を装って応える。自分まであがっているとわかれたら示しがつかないと。

今夜、チームが生まれる。自分が名付けた最強の――

「それで、今日はどこ襲うんだ？」

最初、古河は彼が言った事がわからなかった。

黙ってしまった古河に、男は不審そうに首を傾げ。

「メンバー全員で襲うなんてどんな野郎だよ？ やっぱ高位能力者か？ なら常盤台の女なんて最高だよな。あの高慢なお嬢様を捕まえて、連中みたいに奴隷にしちまえりゃあよー」

「ちょ、ちよつと待て」興奮して話す男を制して、古河は確認する
「今日はチームの名前決めるんじゃないのか？」

副リーダーはきよとした顔をした。

「なに言っただよ。お前が、デカい狩りだから全員集めろって命令だしたんだろ？」

「違いーよ」割って入ってきたのは別の男「今日は誰が幹部か決めるんだろ？」

古河、副リーダーが揃って困惑する。それだけでは終わらない。それを機に次々と仲間たちが今日集まった理由を述べ始める。しかしどれもめちゃくちゃだ。

急激に大きくなったのだからキチンとした統率がとれてないのは仕方がないが、ここまで情報がバラバラなのに、メンバー自体は全員がしっかり揃っている。それこそが異常だった。

「待て、待てよ」古河は副リーダーの男の肩を掴んで「お前、今日俺に電話したよな？」

「はあ？　してねえよ」

異常は決定的だった。

その時、混乱したこの場を鎮めたのは古河の言葉ではなく――
少年の笑い声だった。

誰かが指をさす。だだっ広い施設に隠れる場所は無。すぐにその人物は見つかった。

建物が一番奥。体育館でいうと壇上のようなになったステージに少年は立っていた。

おかっぱ頭の、中学生ぐらいの少年。

彼はチームのメンバーではない。というか、あの子供を古河は知っている。

昼間、ファミレスで古河にふざけた事を言ってきたので、仲間と共に制裁してついでに迷惑料として財布を奪った能力者の少年だ。抵抗らしい抵抗もしてこなかったのですぐに飽きて放り捨てた。

「デメエか……」

少年は口元にうっすら笑みを浮かべるだけで答えない。

「昼間の復讐のつもりか？　なら失敗だったな」

この異常を引き起こしたのがこの少年だというのは、状況からして明らかだ。方法はわからない。だがこれだけは確かだ。
こいつは、俺を馬鹿にした。

「だって馬鹿でしょ？」

「……っ」

心を読んだような一言だった。途端、頭の中で何かがキレた。

「ぶっ殺せ！ 能力者だ！」

能力者。それだけで古河以外の人間達には理由は充分だった。

少年に一番近かった仲間たちが、各々ナイフや警棒といった武器を取り出してステージに乗り上がろうとする。

——閃光が瞳を焼いた。

古河には何が起きたのかわからなかった。

気付いたら、ステージに上がろうとしていた数十人の仲間が倒れていた。

あの少年の能力か、と目をやって、再び驚く。

ステージに少年はいなかった。代わりに、どこか良いところのお嬢様といった女が立っていた。

少年はいない。代わりに立つスタイルの女が顔に引き裂くような笑みを張り付ける。——直後、再び彼女を中心に光が爆発した。まさに光線といったそれが、さらに仲間を数十人吹き飛ばし、ついでに能力者用に造られた研究所のぶ厚い壁が飴細工のように溶解

していた。

古河は理解し、青ざめた。この女は能力者だ。それもかなり高位の。だが、だからといって退く理由にはならない。

「こっちは人数も揃ってんだ！ 全部使え」

その指示で、次に仲間たちはアジトのあらゆる場所に隠していた武器を取り出す。

それは銃火器。裏ルートからかき集めた、科学都市で生まれた兵器たち。

確かにあの女の光線は強力だが、これだけの武器を持った人数相手に対処できるとは思えない。

古河が勝利を確信したと同時に、けたたましい発砲音。

しかし古河は絶句した。なんと仲間たちが同士討ちを始めた。

「な、なにやってんだ!？」

「わからねえ！ アイツら突然——ぎゃっ!！」

次々と自らが集めた銃弾に倒れていく仲間たちに古河は狼狽する。

そうして再びステージを見た時、目を疑った。

いない。あの光線を放っていた女は消え、しかし少年が戻ってきたわけでもなく、いたのはまた別の、今度は少女だった。

ステージの縁に腰を下ろし優雅に足を組む姿は先ほどの女同様、傲慢な気品を感じさせる。

どこかの学校の制服姿の少女は、同士討ちする古河の仲間たちをステージ上から愉快そうに睥睨し、手元のリモコンを弄んでいる。無能力者とはいえこの人数を同時に操っているのか？

ぞっと、古河の肌が泡立つ。

「ど、奴隷共を使え！」

もはやリーダーの威厳などへったくれもない、泣き叫ぶような声だった。

それでも同じくパニックになっている仲間たちが奴隷とした能力者達に強制して攻撃させた。まるで花火のように色とりどりの閃光がステージ上の少女に直撃——しない。光はテープを巻き戻しように同じ軌道を辿り、最終的に放ったはずの本人たちに戻り仲間もろとも炸裂した。

ステージ上に少女はもういなかった。代わりに立っていたのは、髪も服も真っ白な少年。

もう、わけがわからなかった。何もかもわからなかった。

恐怖から敗走を始めた仲間は、しかし逃げられない。

天使のような白い六枚の翼を背中から生やした少年から放たれた烈風や光が、仲間たちを紙屑のように薙ぎ倒していく。

気付けば、残っているのは果然とへたり込んだ自分だけだった。

数分前までこの街すら支配出来ると信じた彼の力は、何も残っていなかった。

ふと、今日狩った少年の最初の言葉を思い出す。

『お兄さん幸せそうだね。いいなあ。僕もそれ欲しいな』

（なんなんだよ……）

空から地上に降り立った少年は、既に少女に変わっていた。

少女は親指でコインを上弾く。ゲームセンターで使われるような普通のコイン。

落ちてくるそれを、少女は、彼女ならば決して浮かべないような凶悪な笑みでもって弾いた。

「なんなんだよテメエはああああああ！！」

その日、名前の無いチームは壊滅した。たった一人の能力者によって。

「サンプル」忘 善人（後書き）

黒羊様、ありがとうございました。

とある人外と超能力者（前書き）

ティンク様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボになります。

とある人外と超能力者

「ねー、ライエ。もうそろそろお昼ご飯食べない!？」

この寒いというのに半袖短パンのポニーテール少女、竜守綾季は提案した。

今はちょうど休日のお昼時。普通の生活をしていれば普通に腹が減る時間である。

しかし彼女の連れである金髪の少年、ライエはぱつさりと言った。

「ダメだ」

「えー?!ライエおなかすかないの?」

「ダメだ」

「ねーいいでしょ!?!あそこにラーメン屋さんあるし」

「ダメだ」

「ねーライ「ダメだ」」

「……」

一体何が彼をそこまで強情にさせてるのであるのか。答えは簡単である。この少女、竜守綾季が天然で超トラブルメーカーだからだ。つい一週間程前に二回も面倒事に巻き込まれ、正直ライエは疲れていて、ぶつちやけ早く家に帰りたいかった。

それにいつどこでまた面倒事に巻き込まれるか分からない。油断は禁物なのだ。

が、彼も腹が空いていない訳ではなく、当然、

グ~~~~

……こうしてお腹が可愛い音をとてる時もあるわけで。

「なんだ…ライエもお腹空いてたんだ！じゃ早く行こう！！」

「……………ちつ。今回だけだぞ」

彼も空腹には勝てず、仕方ないと自分で言い聞かせながら竜守の後を追ってラーメン屋に入ってしまった。

「へいらっしやい」そんな男の声が響く。2人が入ったそのお店はなかなか繁盛していて、それなりに賑わっていた。ラーメンのおいしそうな匂いが2人の鼻をくすぐる。

2人はカウンターの席に座り、メニューを覗き込んだ。

「どれにするんだ？」

「んーとね……………あ！これ面白そう！！」

おいしそうならともかく面白そう？そう疑問に思ったライエは、竜守が指差している絵を覗き込んだ。

早食い企画！！

超大盛ネギラーメン！！

（麺15玉分＋ネギ100グラム）

30分で完食したら10000円！！

食べきれなかった場合は10000円いただきます

「……………」

ライエはそのメニューを見て驚愕していた。

麺15玉でも異常なのに、それを30分で完食しろなんてバカにしているにも程がある。

ましてやネギ100グラムも食べたら胸やけをおこしてしまう。

「……………」

「……………どう?」

「……………やめとけ」

「あはは…だよね」

さすがに竜守もこれを食べきれんとは思ってないようで、彼女にしてみればあっさり引き下がった。

だか2人は知らない。このラーメンを食い尽くせる可能性のある男が一人だけいることを……………

「いらつしゃい!!」

そんな店長の声が響く。

おそらくはまた客が入ってきたのであろう。

『またラーメンか植木っち。本当にラーメン好きだなお前』

「僕はねハジメ君。1ヶ月毎日ラーメンが食べられるなら死んでもいいと思っているんだ」

『あ……………そ』

植木と呼ばれた鮮やかな緑の髪をしたライエと同じ年くらいの少年と、これまたライエと同じ年くらいのハジメと呼ばれたやけに特徴的な声をした少年は、竜守達の方に歩いてきて、竜守に話しかけた。

「すみません、ここのとおり座ってもいいですか？」

竜守が周りを見渡してもに2人分座れる席がなさそうだったので、

竜守はいいよと答えた。

「あ！！この店にも早食い企画のラーメンがある！！」

『は！？植木っち何考えてんだ？！早まるな！！やめとけ！！』

「（まああれはやめといた方がいいよね）」

竜守はそう思ったが、ハジメ、もとい相澤はそんなことを心配しているのではなかった。

『この店潰す気か！？』

「大丈夫だハジメ君。僕今日すごく調子がいいんだよ！！」

『むしろ心配でしかねえ！！』

「「え！？」」

となりにいた竜守とライエは驚く。
今彼はなんと言った？！

「すみませんこの早食いラーメン『3つ』ください」

『ダメだ……この店終わった………』

相澤のつぶやきは、誰にも聞こえることはなかった。

「じゃあ始めるぜ。制限時間は一杯につき三十分だ」

『どうだ？ 植木っち』

相澤は植木に聞く。

さすがに早食い企画のラーメンだけはあり、竜守やライエ含めた客が全員植木に注目していた。

植木の目の前には超大盛ネギラーメンが三杯。

すると相澤にとって予想どおりであり、全く望んでなかった言葉が

かえってきた。

「うん。超余裕」

「「「え？」「」」

『……………やっぱり』

「いただきます」

「え、ちょ、今君なんて言った？」

植木の発言にさすがの店長も驚く。

「え？ちよつと君…」「ふう…休憩」え！？」

隣の椅子に座っていた竜守は植木に聞くが、植木はいきなり休憩を始めた。

彼女はラーメンの丼を覗き込み、驚愕した。

「……………え?!もう三分の一は食べちゃった」

『……………もうどうにでもなれ』

植木のとなりの相澤は、半分あきらめたような感じで普通のラーメンをすすする。

「なに！？……………これはすごいな」

ライエも丼を覗き込み、驚きの表情を見せる。

「な……………」

店長もむちゃくちゃ驚いている。

『店長……………夜逃げの準備をすることをオススメするぞ』

相澤の妙に現実味を帯びた言葉に竜守達は笑うしかなかった。

その後はもう散々だった。

植木は三杯完食した後さらに三杯注文し、10分で全て平らげた。

ちなみに店長は泣きながら自分の荷物をまとめていた事は言うまでもない。

植木達（竜守、ライエ含む）が外に出ると、竜守は植木に話しかけた。

「すごいね君…名前なんて言うの？」

「ああ、僕は川中植木、レベルは0。んでこっちが……」

『相澤一。レベルは同じく0』

「ほらライエ、レベル0だって。信用できるでしょ」

「嘘を言ってる可能性は考えないのかバカ」

「いや、本当だって。」

『信じろよ……ん?!』

相澤が何かに気づいたようにあたりを見回す。三人は何事かと相澤と同じようにあたりを見回した。

『危ない!!』

「キャ!!」

相澤が竜守を突き飛ばすと同時に、轟音がひびいて銃弾が相澤の頭を貫いた。

「ハジメ君!!」

「は、ハジメ？」

「?!」

三人は驚く。

どこからか「チッ」という声が響いて男が去って行くのが植木には

見えた。

「う、嘘だよね？」

竜守はつぶやく。

自分のせいで関係のない人を死なせてしまった。
その現実が彼女に重くのしかかる。
今彼女の心の中には絶望しかなかった。

「チツ……………ん!？」

ライエが相澤の異変に気づく。

「おい。こいつなんかおかしいぞ」

「……………へ？」 竜守は相澤の異変にまだ気づかない。

「こいつ……………頭撃ち抜かれたのに血が出てねえ」

「あ」

そう、倒れた相澤の頭は撃ち抜かれた筈なのに血が全くもって出てなかったのだ。

「……………もうバレバレだよハジメ君」

「「へ？」」

『あ、そう？』

2人は驚いた。頭を撃ち抜かれ少なくとも重傷を負ったはずの相澤が立ち上がり、どこにも傷がない状態で話し始めたからだ。

『こんど赤い液体が出る機能でもつけてもらおうかな……………』

「怖いからやめて」

「な…なんでハジメは生きてるの？」
竜守は聞く。

まあ当然の疑問であろう。人が頭を撃ち抜かれて平気で話していたら誰でも驚く。

『ああ…それはな。こういうことだ』

そう言つて相澤はシャツを脱ぐ。

そこにあつたのは相澤、いやA01自慢の輝くメタリックボディだつた。

「な…なにこれ!？」

「これは……」

『俺はな。機械人間………つまりサイボーグなんだ』

「……さいボーグ?」

聞き慣れない言葉が出てきたせいかな竜守は首をかしげている。

「…確かにすごいなこれは」

ライエはカンカン、と相澤の腹をノックする。

『だから銃弾を跳ね返せたわけだな』

「すごいね……」

ラーメン店の死神と呼ばれた新天界人に機械人間。

そんな異常な2人に会おうなんて日は、今日が最初で………

今日が最後であろう。

とある人外と超能力者（後書き）

ディング様、ありがとうございました。

【サンプル】とある物理の幻想空間（前書き）

だいふく様よりお預かりしました、サンプル小説となります。

「サンプル」とある物理の幻想空間

もし重力を無くせたら？

もし物体の質量を無くせたら？

既存の物理法則では、まずそんなことは不可能だろう。

それを叶えるのが『ファンタジーランド幻想空間』

幻想の世界の不思議の国。

物理法則の通用しない世界がここに存在する――

学園都市のとあるスキルアウトの溜まり場。

ここにスキルアウトではない一人の高校生が入ってきた。

「オイ！テメエ何入ってきてんだ？」

スキルアウトの一人が叫んだ先には、金髪碧眼の青年。肩に少し掛かる程度の金

髪は男にしては長いといえるだろう。

その無駄な肉のない身体からは華奢な印象をつける。

「いやいや、何もするつもりなんかないよ」
そう青年は告げた。

どうやら何となく入ってきただけのようだ。

「調子乗ってんじゃねえぞコラア！」

不良の一人が青年に掴み掛かる。

その手が青年の首で止まる。

誰もが不良が青年の首を掴んだと思った。

「うつ！」

呻き声上がる。

ただしそれは不良の声。

苦悶の表情を浮かべているのは掴み掛かった不良の方だ。

青年は全く表情を変えていない。

それどころか笑っている。

「ごめんね、僕の実力は大したことないんだけど…」

不良の手は彼の喉の直前で止まっていた。

青年はまるで自分に向かって来ることが嬉しいかのような笑いを止めずに、

「もしかしたら君たちが弱いのかもね？」

不良たちは勿論、その台詞を挑発と受けとる。

「てめっ、調子乗ったこと抜かしてんじゃねえぞ！」

先程殴り掛かってきた不良が一步下がり周りにいた別の三人が青年に襲いかかつてくる。

一人は青年の左腰に蹴りを。

一人は青年の左頬に拳を。

一人は青年の右脇腹に――ナイフを。

ナイフが腹に刺されば普通の人間ならば致命傷だろう。

しかし彼らは先程の不可思議な現象で、青年が普通の人間ではないことはわかつていいるはずだ。

「なっ！」「てめっ！」

口々に驚愕を声に出す不良たち。

その手は全て、青年の身体に触れる直前で止まっている。勿論ナイフも例外ではなかった。

「だからやめといった方がいいって……」

青年は溜め息をつきながら面倒臭そうな声で呟く。

「てめえ、一体何者だ！？」

ナイフを刺してきた不良が叫んだ。

青年は微かな笑みを浮かべて自身を示す言葉を告げる。

「『ワンダーランド 幻想空間』だよ――」

不良がの思考が恐ろしいものに突き当たった。

「まさか……お前がああ『幻想空間』なのか！？」

『幻想空間』

学園都市に七人しかいない超能力者のなかでも一位二位を争うと言われている能力者。

本名は誰も知らず、それ以前に名前があるのかすら分らないといわれる。

そんな化け物がスキルアウト達の前にいる。

——勝てるはずがない。

こんな化け物に勝てる人間がいてたまるものか。

そんなスキルアウト達の恐怖心が幻想空間には手に取るように分かる。

「さて、どうしようか……」

幻想空間は、薄いピンク色をした舌を口から出して唇を濡らすように舐めた。

先程までとはまるで違った性格になっているように見える。

「ひっ！」

スキルアウトの一人が余りの恐怖に、声を上げた。

しかし、それで許すわけがない。

「まずは地面に埋めようかな……」

その言葉の直後、幻想空間の周りにいた不良達の身体に今までは感じなかった重

さのしがたが掛かってきた。

まるで、引力に相対する斥力がなくなっただかのように、不良達は地

面に叩きつけられる。

「うがあああ！」

少しずつ地面に沈んでいく不良達。

これが『幻想空間』

不思議の国に迷い込んだ彼らは、既存の法則は通用しないことを思い知らされる。

そうこうしているうちに、うつ伏せになった不良達の顔が埋まり始めた。

「さあて、このままだと死んじゃうけどどうする？」

まるで人を虐める事が楽しいかのように笑顔を見せる幻想空間。

「ゆ…許してくれえ！」

誰かが謝罪を述べた。

それを合図にするようにスキルアウト達は口々に謝り始めた。そんなことをしている間にもどんどん沈んでいく。

「まあ許してあげるよ…、俺なんか大したことないし…」
あっさり許した。

その表情はこの溜まり場に入ってきた時の顔に戻っている。

スキルアウト達の身体にかかっていた、異常な程の地面に向かっていた力は直ぐ

に消えた。

消えた、という表現は正確ではないだろう。
元々存在していた力がなくなっていたのが元に戻っただけなのだから。

「す…すまねえ…」

下を向きながら立ち上がった不良達のリーダーと思われる人物が幻想空間に礼を

言った

—— 筈なのだが、既にその場には幻想空間は居なかった。

まるで昔読んだ絵本に出てくる不思議な猫のように。

彼がどこに行つたのかはスキルアウト達には分からない。

それ以前に、人間と怪物との思考を比べる方が間違っている。

この日、スキルアウト達は己の認識の狭さを思い知らされた。

周りの色彩は青一色しかない。

ここは学園都市上空。

そこを幻想空間が一人歩いている。

彼は引力の無効と有効を高速で切り替えることで宙に浮くことができる。

更に、空気には触れることが出来ないという法則を消すことで空気を蹴る事がで

きるようになるので、結果として歩いているように見えるのだ。

彼は気ままに空を歩きながら呟く。

「学園都市で誰が一番強いんだろうなー。

俺は興味ないんだけど…」

「でも面白そうなやつはいるなあ。万有引力に黒乃微笑、圧殺空間、大気支配に

事象選択と完全移動。大能力者だったら超進化論ってとこかな…」

幻想空間は不敵な笑みを浮かべ更に呟く――

「まあ、俺の能力じゃあ勝てないだろうけどね――」

【サンプル】とある疾患の絶対排斥（前書き）

管理人より、サンプル小説です。

「サンプル」とある疾患の絶対排斥

何度でも、何度でも。

竜守綾季を自分の元に繋ぎとめておくためなら、何度でも。

竜守綾季を自分から奪おうとするものがあるのなら、何度でも。

彼は、その存在を消し去ろうとする。

——とある疾患の絶対排斥——

真つ暗闇。そう形容するのが相応しいそこに、その少年は立っていた。触ったら崩れてしまいそうな、硝子細工のような少年である。そんな、繊細さを感じさせる金髪に碧眼を持つ彼は、

——自分は病気なんじゃないか、と危惧していた。

彼の目の前には、『駆逐すべき敵』の潜むらしい研究所がある。何が楽しくて自分はここに來たのやら。敵と言っても、自分の敵ではない分余計に疑問を抱かざるをえない。

ただここに、アトラクタ 竜守綾季を狙おうとする無鉄砲な馬鹿が集っているだけではないか。自分には全くとっていいほど関係ない。

だが何だ、この状況は。ここにそういう連中が居ると掴んで、気づいたらこれだ。何か夢遊病だとか、そんな症状の一部なんじゃないだろうか。そんな風に、ライエは解決しないはずの問題に悶々と頭を悩ませていた。

「……あー、クソ」

一向に解ける兆しを見せない難問に、ついにライエは痺れを切らして愚痴を漏らす。結局こんなところに自分は用が無いのだから、さっさと家に帰ってしまった方がいい。

と、そこまで考えて、ライエは。

——正面の鉄の門を、問答無用で吹き飛ばした。

*

(…絶対、病気だ。今度病院行った方がいいな)

そう思いつつ、暗い廊下を歩くライエの足は止まらない。

廊下に響くのは警報というやつだ。正面から門を吹き飛ばし、さらには玄関までもを破壊した彼を、誰が野放しにしておくものか。自分を威嚇するように鳴り続けるサイレンを無視して、ライエは廊下を歩いていく。行く当てなど、彼には無い——つもりなのだが。

無意識に、『敵』を探している自分に無性に苛立つ。

苛々を無理矢理抑え込んだ彼が行く先に、一つ緑色の光が差す扉が見えた。耳をすませると、数人の男の声が聞こえてくる。急に鳴った警報に、混乱しているらしい。警備員の一つでもつけておけばいいのに、なんて思いながら、ライエはそこへ向かう。

扉は半開きになっていて、そこから緑が溢れていた。素直にドアノブを引くのも億劫で、やはりその扉も吹き飛ばす。

バゴン！と鈍い音をたてて、扉が壁にぶち当たり止まった。男達の声も一瞬止む。

「……こんばんわ、お前らが馬鹿ですか」

いきなりの侵入者の、いきなりの質問に、男達の半数は呆けたような顔をしていた。もう半数は「何だお前は！」とありきたりなことを叫んだ。

男達の人数は大体十人。その全員が白衣を着ている。ライエにとってはとてつもなく醜い光景だった。硝子球のような瞳を細めて、ライエは舌打ちを漏らす。

「…研究者と白衣ってやっぱリセットなんだな」

——見てるだけでイラつくんだよ、それ。彼がそんな言葉を吐き出したのと同時に、研究者の男の一人が悲鳴をあげた。

「ぐああああああああッ！！！」

全員が、悲鳴の主を見る。見れば、男の目には深々と釘が突き刺さっていた。

「あ、あ、目が、目がああ……！」

「……やっぱり俺病気だな、うん」

「な、何を言っているんだお前は……！」

事態の深刻さに我を忘れて逃げ惑う研究者達。その一人が、ぽつりと呟いたライエに向けて怒鳴り、手持ちの拳銃を発砲した。

だが、弾丸が貫いたのはライエではなく——その研究者の右肩だった。

「——白衣見ると苛々する病つてことだ」

彼らがその意味を理解できるはずもない。とにかくわかるのは、これから始まるのは一方的な虐殺であるということだけだった。

*

「さて、と」

床は鉄分でできた生暖かい液体で濡れている。その海に浮かぶ十数体の骸を眺め、ライエは呟いた。

（……事情聴取忘れてたな）

まずい、いつも一緒に居るせいであの天然馬鹿少女のうつかり癖がうつっている。そのことに何となくまた苛立った。

今気づいたが、この部屋はどうやら実験室であるようだった。緑

色の光が灯っている時点で予想は出来ていたものの、確証は無かったのだ。

机の上には試験管や紙の束が乱雑に置かれている。…全て荒らされてしまっただけだ。

ライエは何となく、机に向かって紙を手取る。

「――」

万有引力^{アトラクタ}。その四文字を見ただけで、彼の視界が歪んだ。――そうだ、こいつらは、万有引力^{アトラクタ}という少女を狙って――。

「…忘れてた。すっかりだ、これは」

らしくもなく、自嘲する。

「…う」

本当に小さな呻き声が、ライエの耳に飛び込んできた。ライエはゆっくりと振り返る。どうやら、まだ息を持つ者がいたようだ。

その男は、確か――最初に目を貫かれた男。だが、そんなことはどうでもいい。

ぐしゃり、と今度こそ、ライエの放った釘が男の命を喰らう。

男は悲鳴も何もあげなかった。きっとそんな体力すら無かったのだ。しかし、ライエはそれを哀れむこともせずに無慈悲に彼の命を奪った。――奪って、そして、

「――ビョーキだな、これ」

再び、釘がその死体に突き刺さる。もう一度、もう一度。幾本の釘を使って、頭部を砕き、手足を床に打ち付け、男の身体を切り刻む。——それこそ、何度でも、何度でも。

快感だとは思わない。本能的に、この男をこの世から消してしまいたいと思った。自分から竜守綾季を奪おうと企てた人物を消したかった。殺すだけでは足りない。身体を、その魂を、碎いて碎いてぐちゃぐちゃにしてやりたかった。

それが原型を失った頃、ようやくライエは釘を止めた。表情は、ここにやって来たときから変わらない無。

「……病気だ」

それは名づけるなら、ばけもの 竜守綾季症候群。

「サンプル」とある魔術の焚書目録（前書き）

だいふく様よりお預かりしました、サンプル小説となります。

「サンプル」とある魔術の焚書目録

少女は走る。

薄暗い路地を走り続ける――

辺りは暗闇に包まれ、人の気配が全くない。

ここはイギリスのロンドン郊外。

郊外というだけあって都心部と比べればかなり寂れている。

パタパタパタパタ――

カッン――カッン――

足音が二人分。

ひとつは誰かから逃げているように走っている。

もうひとつは走っている方の足音を追いかけている。

追い掛けられているのは12、3歳くらいの少女。

彼女は『焚書目録』。

過去にあった『焚書事件』で燃やされた魔道書を記憶している魔道書図書館だ。

髪は金色で、眼も同じ色をしている。

要所要所に金の装飾が施された真っ黒な修道服を着ていてそれなりに目立つ服装だ。

彼女を追い掛けるのは魔術師。

イギリス清教の『必要悪の教会』ネセサリーウスに所属する、魔術師を殺すための魔術師だ。

まるで鬼ごっこだ。

焚書目録が逃げる側で、魔術師が鬼。

ただし、捕まれば焚書目録がどうなるのかは彼女には分からない。

「まったく、上も手荒いよなあ。いくら焚書が危険だからといって15歳の女の子を『殺せ』だなんて……」

呟いたのは魔術師。

単純に同情の言葉が漏れただけであって、別に彼がロリータコンプレックスという特殊な性癖を持ち合わせているわけではない。

彼はゆっくりと歩みを進めて行く――

焚書目録は走っていた。

「ハア、ハア、ハア」

荒い息を口から吐き出しては一瞬だけ空気を吸い込むことの繰り返し。

先程、魔術師に見付かって走り始めてから既に15分がたっているため、まともな運動をしていない彼女の体力はそろそろ限界のはずだ。

「ハア、ハア、ハア」

走るペースが少しずつ落ちてくるため、それに比例するように魔術師との距離が縮まっていく。

焚書目録が止まった。

ピタッ、という擬音が聞こえたかのような錯覚を覚える程に急に。

このまま走り続けてもいつかは追い付かれる事がわかったからなのか、魔術師に対抗する為に立ち止まったのか……。

「もう諦めたのかい？」

魔術師はその顔から浮かび上がる笑みを隠そうとはしない。

直後、彼の目の前から鎌鼬かまいたちが巻き起こった。

風の鎌は虚空を切り裂いて焚書目録の命を刈り取ろうとする。

（殺った――）

魔術師はそう思った。

「――！」

焚書目録の口から魔術師には理解できない『何か』が発せられた。

「っ!？」

魔術師の顔が驚愕でひきつる。

その『何か』を魔術師が聞いた瞬間、鎌鼬が消え去ったのだから。

「これは…強制詠唱…？いや、『崩壊詠唱』と言った方がいいかな？」

焚書目録は答えない。

魔術師は続ける。

「面白い――。面白いよ焚書目録！俺をもっと楽しませろ！」

狂ったような笑いが魔術師の腹の底から沸き上がってくる。

これが彼の『本性』

魔術師を殺すための魔術師。

「ははは、行けよ…。もっと逃げろよ…。じゃないと面白く無いだろっ?。」

焚書目録は魔術師に背を向け走り出した。

彼女が走り去った後で魔術師が呟く。

「はあ、上にどう報告しようか——」

大和と綾季と、時々ライエ（前書き）

ITEM様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボになります。

大和と綾季と、時々ライエ

学園都市。

東京西部を開発して作られた街で、ここでは「記憶術」や「暗記術」といった名目で脳の開発を行なっている。

人口の約八割が学生という、名前の通り学生の為の街だ。「開発」以外の科学技術もぶっ飛んでおり、外と比べおよそ数十年ぐらい文明が進んでいるらしい。

かなり大雑把な説明は終わり、舞台は学園都市のとある路地裏に変わる。

現在の時刻は午後10時ちょうど。学園都市といえども路地裏という所は外の世界同様、暗くて危険な場所だ。学園都市にはスキルアウトと呼ばれる外の世界でいうチンピラ、不良のような者が多くおり、夜の路地裏は彼等の格好の溜まり場へと変わる。

そんな危険な場所に一人佇む者がいた。

暗闇でも目立つ鮮やかな茶髪にホストを彷彿させるド派手な服装に身を包み、ズボンのポケットに手をつ込んでいる。身長的に小学生高学年か中学生だろうが、顔にはまだあどけなさが残っている。

こんな時間にこんな子供が路地裏にいる事自体かなり異常な光景だが、さらに異常な事に彼の周りにはスキルアウトが数人うめき声を上げながら倒れていた。

地面に倒れているスキルアウトの中心に学園都市最強の能力者、神鬼大和はいた。

（チッ、最近能力者狩りをしているスキルアウトって聞いたから期待したのによオ。この程度かよ・・・）

大和は世界の全てに敵意を向けている様な目でスキルアウトを睨み付ける。

（アレイスター野郎・・・つまねエ仕事言い渡しやがって。この程度、オレが出るまでもねエだろオが）

大和は学園都市の暗部の人間だ。アレイスターの右腕として暗部の頂点に君臨する彼にはアレイスターから様々な仕事を請け負っている。今回は最近学園都市で話題になっている能力者狩りを行なっているスキルアウトの殲滅という仕事だったのだが、学園都市最強の彼にはかなり役不足だった様だ。

（これだけ痛み付けりゃアしばらくは動けねエだろ。そろそろ帰るか・・・）

大和が自宅への帰路に着こうとしたその時、路地裏に誰かの足音が響いた。

（あア？^{アンチスキル}警備員か？いや、この辺は今日は巡回ルートから外れていた筈だが・・・）

暗部の仕事というものは一般人に見られる訳にはいかない。^{アンチスキル}警備員や風紀委員も例外ではない。アレイスターから貰った事前情報ではこの辺は巡回ルートから外れていた筈なのだが。

（見つかると面倒だな。さっさとズラかるとするか・・・）

大和が歩き出そうとしたその時だった、

「ここ、どこだろう・・・？」

路地裏には合わない女の子の声が響いた。

（ガキ？しかも女か？こんな時間に何してんだ？）

自分も立派なガキという事を完全に棚に上げる大和。

（チツ、一般人なら尚更面倒くせエな）

面倒な事がとにかく嫌いな大和は今度こそ、自宅への帰路に着こうとするが現実はその甘くはなかった。

女の子の悲鳴が聞こえたのだ。大和は心底面倒くさそうな表情をする。

（こんなお決まりなパターンは当麻だけで十分だったのによ・・・）

はア、と大きな溜息を吐くと大和は悲鳴のした場所に向かうのであった。

竜守綾季は路地裏にいた。いや、迷い込んだと言った方が正しいだろう。学園都市の地理には詳しくない彼女は自宅への帰り道を探し、路地裏を彷徨っている。

（どうしよう・・・。全然道わかんないよ・・・）

学園都市の路地裏は意外と入り組んでおり、綾季の様な迷い猫が入り込めば中々脱出する事は出来ない。他人が見れば「来た道を帰れよ」と言いたくなるが、生憎今の綾季にそんな冷静さはなかった。

（調子乗って近道なんかしなきゃよかった・・・）

今更後悔しても遅いのだが後悔せずにはいられない綾季。

「ここ、どこだろう・・・？」

綾季の不安が最高潮に達した瞬間、

「へえ、姉ちゃん綺麗だな」

後ろから声を掛けられた。

振り返るとスキルアウトと思われる男が五人、下品な笑みを浮かべながら立っていた。

思わず綾季は顔をしかめる。

「どうだい？俺達と一緒に遊ばないかい？」

「・・・悪いですけど、綾季これから帰るんです」

綾季はスキルアウトから背を向け、立ち去ろうとするが、スキルアウトは綾季の進路を塞ぎそれを許さない。

「まあそう言っなよ」

スキルアウトの一人が馴れ馴れしく綾季の肩を抱いてくる。

その瞬間、スキルアウトの手がパン、といい音を立てて弾かれた。

「ッ！！おい、こいつ能力者だぞ！！」

綾季の能力は『万有引力』（アトラクタ）と呼ばれるもので、その名の通り引力を操る能力だ。

今のはオートで能力を発動させる『反発状態』と呼ばれるものだ。

「ッ！！こいつ、能力者だ！！」

手を弾かれたスキルアウトは綾季を睨み付ける。

「能力者か……。ならちようどいい」

スキルアウトの一人が懷から音楽プレイヤーの様なものを取り出す。

（なにあれ……。？音楽プレイヤー？）

と、その時突然綾季を激しい頭痛が襲った。

（グッ、なにこれ……。頭が……。割れる……。）

綾季が顔を上げるとスキルアウトの一人が音楽プレイヤーのスイッチをいれながら笑みを浮かべていた。

（あれから流れているの……。？それよりも……。この音……。）

綾季は争い事が嫌いだ。反撃する前にまず逃げる事を最優先に考える。だが激しい頭痛がこの場からの逃走を許さない。

「さあて、どうやって遊んでやるつか」

スキルアウトの一人が綾季に手を伸ばす。

（だ、誰か・・・助けて・・・誰か・・・）

綾季が心の中で助けを求めたその時だった。

「そんなガキに欲情してんじゃねエよ。変態共が」

学園都市最強の能力者の声が路地裏に響いた。

「あア！？なんだてめえ！！」

スキルアウトの一人が大和を睨み付ける。

「ギャーギャー喚くんじゃねエよ。耳障りなんだよ、クソ共が」

「おいガキ！！誰に口利いてんだ！！」

スキルアウトの一人が大和の胸倉に掴み掛かる。

だが大和は逃げる事なく、その手を掴むと捻り上げた。

「痛ててて！！何すんだこのガキ！！」

スキルアウトは大和の手を振りほどこうとするが中々離れない。

「汚ねエ手でオレに触れようとすんじゃねエよ」

ボキッ、と骨が折れる様な音が鳴った。

「ぎゃあああああ！！！！」

大和の手首を折られたスキルアウトは腕を押さえながら悶絶する。

大和は視線を別のスキルアウトの手にある音楽プレイヤーに移した。

「ふーん、キャパシティーダウンか……。まさかテメエ等みてエなカスにまで拡がってるとはな」

「てめえ！！まさか無能力者が！！」

キャパシティーダウンが利いていないのを見て、スキルアウトが大和に尋ねた。

「いいや、オレも立派な能力者だぜ」

大和はあっさりと答える。

「なに！！じゃあどうしてこの男聞いても平気でいられるんだよ！！」

大和は溜息を吐くと、面倒くさそうに説明し始める。

「その音を聞いている、つつう事象を『拒絶』しただけだ。オレにはテメエ等が音楽プレイヤー持ってニヤニヤしている間抜けな構造にしか見えねエんだよ」

大和はこの世に発生した全ての事象に対して選択肢を持つ事が出来る。これが彼の能力である『オールセレクト事象選択』だ。

今回は『音楽プレイヤーから聞こえてくる音を聞いた』という事を『拒絶』したのだ。つまり、今の大和にはキャパシティーダウンの音は一切聞こえていない。

「嘘だろ・・・まさか、そんな事が・・・」

切り札であるキャパシティーダウンを事実上、失ったスキルアウトは力なく声を漏らす。

「これが現実だ。残念だ、本当に残念だぜ」

不敵な笑みを浮かべながら大和はゆっくりとスキルアウト達に近づく。恐怖の余りスキルアウトはペタン、と地面に座り込む。

後悔先に立たず

スキルアウト達はその言葉の意味を身を以て理解する。自分達は一休誰に喧嘩を売ったのかを。

スキルアウトの目の前に迫ると、大和は言った。

「こんな所で、たった一つの命を捨てるとはなア」

それがスキルアウト達が聞いた最期の言葉だった。

「う、うーん・・・」

明るい部屋の中で綾季は目を覚ました。

キヤパシティーダウンの影響からか、頭がガンガンし思考が上手く働かない。

綾季はキョロキョロと、部屋を見回す。

女の子の部屋だろう、自分が寝かされているベッドの周りには大量のぬいぐるみが並べられ、机の上には今時の子が使ってそうな化粧品等が散らばっている。余程の映画好きなのだろう、壁には大量の映画のポスターが貼られている。どれもこれも綾季の知らないものばかりだが。

その時、部屋のドアがガチャリと開き誰かが中に入ってきた。

「あア？ようやくお目覚めかア、お姫さんよオ」

鮮やかな茶髪に左右色の違った瞳が特徴的な少年、神鬼大和が言った。

「最初に言つとくが、ここはオレの部屋じゃねエ。義妹の部屋だ、つまねエ勘違いすんじゃねエぞ」

変態のレッテルを貼られる前に釘を打つ大和。綾季は微塵もそんな事思ってたが。

「綾季を助けてくれたんだよね？えーと・・・」

「大和、神鬼大和だ。あと助けたつもりはねエ。あいつ等が邪魔だっただけだ」

「綾季、竜守綾季って言うの。ありがとうね、大和」

満面の笑みで大和に礼を言う綾季。大和はふん、と鼻を鳴らすとそ

っぱ向いてしまう。

「つか teme、何であんな所いたんだよ」

大和がポツリと尋ねた。

「家に帰ろうとして近道したの。そしたら道がわからなくなって・・・」

「バカだな、teme。時間と自分の服装考えて行動しろよ」

大和は大きな溜息を吐きながら言った。

「……じゃないもん・・・」

「あア？なんか言ったかよ」

綾季が何か言った様だが声が小さく大和は聞き取れない。

「綾季、バカじゃないもん！えらくもないけど！」

どうやら大和がバカ、と言った事が気に入らないみたいらしい。

（何だこのガキ！面倒くせエ！）

大和は今までいろんな人間を見てきたが、一言一句にここまで反応する人間は始めてだ。

学園都市最高の頭脳でもどのように扱えばいいかわからなかった。

「あーわかった、わかった！temeはばかりじゃねエよ。悪ウーぜ」

いました！」

こめかみがピクピクと動くのを必死に押さえながら大和は言う。

「うん！」

綾季はまた満面の笑みで言った。

（チツ、こいつといると調子が狂うな・・・）

多分綾季は人を疑う事を知らない人間なのだろう。先程の大和の言葉に間に受けた事からも予想出来る。

逆に大和は人を信じる事を知らない人間だ。一部の人間を除き、大和は全く他人を信用しないし、しようとも思わない。神鬼大和という人間はそういう人間だった。

「あっそうだ！ねえ大和！連絡先教えてよ！」

綾季の突然の申し込みに大和は少し驚いた。

「あア？何でだよ」

「だって今日綾季が大和と出会ったのも何かの縁だと思うし・・・」

「縁だア？テメエが勝手に迷い込んだだけじゃねエか」

だが綾季は引き下がらない。

「いいの！だから教えてよ！ね？」

つくづく面倒くさいヤツだと、大和は実感した。これ以上何を言っても無駄だろうと思った大和はポケットから携帯電話を取り出した。

「仕方ねエから教えてやるよ……。ほら、テメエもさっさと携帯出せ」

大和は綾季に促すが、綾季は困った様な顔をすると言った。

「綾季……今携帯ないの……。だから大和の連絡先紙に書いてくれないかな……？」

その瞬間、大和の頭の中で何かがブチツ、と切れた。

「テメエ……オレを馬鹿にしてんのか。余程早死にしてエと見える」

明確な敵意と殺意を隠す事なく、大和は綾季を睨み付ける。レベル5の中でもとりわけ沸点の低い大和。

綾季も大和の雰囲気の明らかな変化を感じ取ったのか、泣きそうな表情でブルブルと震えていた。

と、その時大和は外に人の気配を感じた。正確には自分への敵意をチツ、と舌打ちをすると大和は適当な紙に自分の連絡先を書くと綾季に渡す。

「オレの連絡先だ。オレはちィとばっか出掛けてくるからそれを持って大人しくしてろ」

そう言っただ和は部屋から出て行ってしまう。

一人残された綾季は思った。大和を怒らせてはいけなと。

外に出た大和は一人歩いていた。出来るだけ人通りの少ない場所を
目指して。

（この辺りなら大丈夫だろ。さてと・・・）

その瞬間、大和の姿が消えた。いや、消えたのではなく肉眼では捉
えきれない程のスピードで移動したのだ。

「さっきから何コソコソ付いて来てんだア？ライエ君よオ！！」

大和は先程から自分を尾行していた人物に殴りつける。

ドゴン！！と轟音が鳴り響き、大和が殴り掛かった場所にはクレ
ーの様な物が出来ていた。

「早エな。相変わらず逃げ足だけは早エヤツだなア、ライエ！！」

大和の後ろには一人の少年が立っていた。

真っ直ぐな金髪に碧眼、中性的な顔立ちの少年、

ライエが大和を睨み付けていた。

「どうしてテメエが綾季と一緒にいるんだ。オイルセレクト 事象選択！」

敵意を隠す事なくライエは大和に向かって叫んだ。

「酷エ言われ様だな。テメエの愛しの綾季ちゃん助けたのはオレな
んだぜ？」

大和はからかう様に言った。

「つーか人様の家に向かって敵意剥き出しにすんの止めてくんねエかなア。正直、かなり鬱陶しいんだよ」

「綾季を返せ・・・」

「オレの頼みは無視ですか・・・。勝手に持って行けよ。あんなガキ、別にいらねエしな」

大和は手をヒラヒラと振りながら言う。

ライエは舌打ちをすると綾季を迎えに行くべく、大和に背を向けるが、

「おい、ちよつと待てよ」

大和に呼び止められた。

「あのガキは返してやるよ。だが、オレの気分を害したお礼はたっぷりとさしてもらおう・・・ぜ！」

そう言ったのと同時に大和はライエに殴り掛かる。能力者であるのと同時に聖人でもある彼の高速スピードは到底肉眼で捉えられる物ではない。

ライエは反射的に演算をすると、能力全開で大和の攻撃を躲す。

大和の拳は地面に直撃し巨大なクレーターを作る。

「あーあー、つまねエなア。逃げてばっかじゃ全然面白くねエぞ、ライエ!!」

大和はライエに向かって叫ぶ。

「俺だって好きに逃げてる訳じゃない。出来るならテメエなんかと
つくに殺してる」

宙を舞ながらライエは大和に言った。

ライエが大和の攻撃を必死に躲すのには理由がある。

ライエの能力は『絶対排斥^{レジスタント}』と呼ばれる物で、物体と物体の間に存

在する斥力（物体同士を退け合う力）を操る能力だ。つまり能力上、

ライエには物理攻撃は通らない筈なのだ。だがライエは大和の攻撃

を受け止めるのではなく避けている。それは大和が持つ『事象選択^{オイルセレクト}』

が原因だ。

事象選択はその名の通り、この世の全ての事象に対して選択肢を持つ事ができる能力だ。大和はこの能力を使って発生させている斥力を『拒絶』しているのだ。

それだけならまだしも加えて大和は聖人だ。聖人の一撃はそれだけで致命傷になりかねない。

「安心しな、殺しはしねエよ。ちいとばっか痛てエだけだ」

大和は脚力だけで飛び上がり、ライエに接近する。

「痛いだけじゃすまないだろうが」

無駄だとわかりながらもライエは釘を取り出すと、大和に向かって飛ばす。

釘はライエの予想通り、大和の目の前にまで迫ると見えない壁に弾かれた様に散る。

事象選択^{オイルセレクト}がある限りライエの攻撃は大和には届かない。

「んなもんがオレに効くとも思ってたのかア!!」

大和はライエの目の前に迫ると握り拳を作る。

「終わりだ！！ライエ！！」

大和の拳がライエの顔面を捉えようかとしたその時だった。

「大和！！ライエ！！」

綾季の声が戦場に響いた。

大和はフツと視線を綾季に移した。その瞬間をライエは見逃さない。

「もらった！！」

「ッ！！」

ライエは大和と自分の間にある斥力を全開にすると大和を吹き飛ばす。凄まじいスピードで吹き飛ばされた大和はそのままビルに突っ込んだ。

「ライエッ！！そんな事したら大和が・・・」

「問題ない、これぐらいでヤツは死なねえよ！！それよりここから離れるぞ！！」

ライエは綾季を抱きかかえると返事を聞く事なく宙に舞い上がった。

倒壊したビルの瓦礫の中に大和はいた。あれだけのスピードで激突

したというのに大和の体には怪我一つ、傷一つない。

「痛ってエナア。やってくれるぜライエの野郎」

瓦礫の上に倒れたまま、大和は呟く。

（まさか無意識的に『拒絶』を切っちまうとはな。オレも堕ちたもんだ）

大和は自分でもなぜ『拒絶』を切ったかわからなかった。考えられる理由はただ一つ。

（あのガキの声に反応したからか？それだけあのガキの存在がオレの中でデカくなってんのか？）

だが大和はその可能性を無理矢理頭から引き離す。

（んな事あつてたまるか！今日会ったばかりのヤツに、このオレが惑わされるだ？有り得ねエ、絶対に有り得ねエぞ！）

大和はまだ気付いてはいない。真っ直ぐな目で大和を見つめたあの瞳に、学園都市最悪の怪物が確実に惹かれていた事を。

大和と綾季と、時々ライエ（後書き）

ITEM様、ありがとうございます。

【サンプル】…お前ら何者？（前書き）

想像屋様よりお預かりしました。サンプル小説となります。

【サンプル】…お前ら何者？

今宵このたび満月の綺麗な夜。

学園都市から離れた高層ビルの屋上で下界を眺めながら

人から外れ世界からもずれ世界そのものに拘束されながらも一切の苦とせず甘んじて受け入れている絶対能力者軍団・・・誰かが呼んだわけではなく自らが学園都市で最も異常で過剰で有害な存在であるために自らを生徒の頂点である生徒会に置き換えた名称：せめて神程度には留まりたい生徒会・・・神生徒会のメンバーは屋上でそれぞれが適当に座りながらアンテナのてっぺんに立っている生徒会長・
・実際はじゃんけんで決まったボスだ・・・じゃんけんの回数は4000回にも及んだ。

その会長である翡翠色のツインテールの髪に、紅色の瞳。

背中の部分に大きなリボンの着いた・

これまた翡翠色のゴスロリのワンピースを着ており、そこに淡い紅色の桜の花の形をした独特の日傘を差している少女、天音 廻黎は空を見上げてから視点をおろしレベル6のメンバーに対して

「後、数年後くらいかな・・・この私達の住処に脅威が訪れる・・・確定事項だよ・・・」

そう天音 廻黎が言うのと廻黎の横に青い髪の長髪で顔が腹が立つくらいめっちゃ男前で体格がモデル体型で手足が長く服装が上下制服で首にロケットペンダントを掛けて日本刀を帯刀している爽やか系の色男の園崎 陽が飛んでいて

「あなたの眼で捕えたのでしたら起こるでしょうね……ていうか私は一度未来に言って帰って着てるので確定事項ですね……規模は……ふむ……どうだったかな……」

陽が頭を抱えて思いだそうとしていると

天音 廻黎が横から「……少なくとも人類は窮地に立たされるほどだよ……奴らは私たちの存在に気付いているね……」

と天音 廻黎が空を見え上げながらシリアスに言つと下で見上げていた桜小路影虎が何かを思いついたかのように

「その敵？そいつらはどうするんだ？俺らがやるのか？」

影虎の言葉に髪の毛がはねっパねの髪形で革ジャンとボロボロを通り越して雑巾なズボンをはいた日暮 暮日が続けて

「さつさとかたづけちまおうぜ？めんどくせえ」

そういうと一人憶病しそうな真っ黒な長髪と青白い肌という陰気な容姿で身長が160ちよつとの黒がメインカラーの上下制服の女、月明 灯は怯えながら手をあげ

「でも、それなら廻黎さんがもう殺してるかと……」

と彼女なりの疑問を問いかけすぐに土下座すると今度は金髪碧眼のシアンが灯を立てて

コホンコホンと2回ほど咳払いすると

【まあその脳筋二人は置いておいて・・・何かあるんだろ？会長さん♪】

シアンが天音 廻黎に礼儀正しく問いかけると天音 廻黎は正解だと肯定し

「その脅威にだが僕らが全力を出せばたやすく倒せる・・・だが敵の規模がえげつない・・・下手にやれば銀河が吹っ飛んでもおかしくないんだ・・・」

そう天音 廻黎が言うのと神生徒会の全員が「「「【げ!?!】」」」
「と嫌そうな表情をした・・・」

彼らは力を制御するのが得意で開放するのが嫌いなのだ（できない事はない）

「そして、あたしは一つ面白いゲームを考え付いた・・・」

そう天音 廻黎が降りてきて皆の耳にこそそと幼い雰囲気と言うと

全員がクスクスやケラケラと笑いだし・・・

「「「「【世界に喧嘩を売って人間たちに戦力を整えさせた後に・・・丸投げ作戦決定!!（ですね）（そうすましよう!!）】」」」」

とこの日、この時、世界にとって太陽爆発並にとんでも無く迷惑な作戦が決行されることが決定したのだ。

その事に人類が気が付くのは翌朝に世界の重要都市が急に破壊され

世界が彼らを恐れるのはまた別の時間の話・・・

彼らは皆ホクホク顔のまま月を見て陽が出したお団子を椅子に座りながら

「【「「「「「はあ・・・良い月で・・・いいお茶だ「「「「「」

と全員がお茶をすすりながらそう言って和んでいた。

しつこいが・・・次の日、世界に宣戦布告したのは今お茶を飲んで和んでいる6人である。

大和と綾季と、時々ライエノパート2（前）（前書き）

ITEM様よりお預かりしました。管理人キャラとのコラボになります。

大和と綾季と、時々ライエ／パート2（前）

「暇だよー」

自室の床に寝転がりながら綾季は独り言を呟いた。今日は日曜日だというのにライエは例の如く何処かに出掛けてしまっている。14歳の彼女にとって、独りで過ごす日曜日というのは暇で仕方がなかった。

「あーあ、今日は久しぶりにライエとお出かけしたかったのに・・・

」

そう呟いた時、綾季の目にある物が飛び込んできた。それは自分の携帯電話だ。そこで綾季はピーン！とある考えが浮かんだ。

「そっだ！」

綾季は携帯を取ると、ある人物に電話を掛ける。誰かを遊びに誘おうと考えたのだ。幸い今日は日曜日、きっとあの人も大丈夫だろう、と勝手に判断した。

しばらく呼び出し音が聞こえ、10秒ぐらい経つと意中の人物が電話に出る。

「あつ！もしもし？おはようー！」

綾季は元気良く、朝の挨拶をする。

『お掛けになった番号は現在使われてーーー』

「もう！どうしてそんな意地悪するの！」

綾季は電話の相手に向かって少し怒鳴る。

『あーあー、うるせエうるせエ。朝っぱらから怒鳴ってんじゃねエよ』

朝早くからの電話だったからか、かなり機嫌が悪い様だ。

「うつ・・・ごめんなさい・・・」

『一々謝ってんじゃねエよ・・・。で、何の用だ？』

「えーとね、今日何か予定あったりする？」

『何でそんな事テメエに教えなきゃならねエんだ』

「ライエが何処かに出掛けちゃって綾季独りなの。だから、もし何もなければ綾季と遊んで欲しいなあ、と思って・・・」

『他当たれ』

即答で断られた。

「即答ッ！？もう少し考えてくれてもいいじゃん！！」

『うつせエんだよ！何でテメエなんざと遊ばなきゃいけないエんだ！日曜ぐれエ静かに過ごさせろ！』

頑なに拒否する電話の相手だが綾季も必死に食らい付く。

「お願い！綾季と遊びに行こ！このままだと綾季、暇過ぎて死んじやうよ！」

『じゃア死ねよ』

電話の相手ははっきりと言った。

「酷い！酷過ぎるよ！人でなし！鬼！悪魔！」

電話の相手は豪快な溜息を吐くと言った。

『・・・わかったわかった。着いて行ってやるよ。だから泣き叫ぶな、耳に響く』

それを聞いて綾季はコロツ、と態度を変えて、

「ありがとう！やったー！じゃあ今からセブンスミストの前に来て！そこで集合！」

『今からだと！？おい、ちょっとまーー』

綾季は電話の相手の言葉を聞く事なく、一方的に電話を切ってしまう。

「そうと決まれば、いざ！セブンスミストへ！」

一人で宣言すると綾季はカバンを掴むとドタドタ、と玄関に向かって一直線に走る。

机の上に携帯を置いたまま・・・。

綾季は元気良く、日曜日の朝の学園都市に駆け出した。
学園都市最強の能力者が湧き上がる殺意を必死に押さえている事など知る由も無く。

（あのクソ女……絶対殺す！）

学園都市最強の能力者、神鬼大和は苛立ちを隠す事なく朝の学園都市を歩いていた。

彼が向かっているのは第七学区にある『セブンスミスト』という呉服店。学園都市随一の品揃えを誇っており、とりあえず服を買うならこの店の名が真つ先に思い浮かぶ程の人気と知名度を誇る。

（最悪の日曜になりそうだな……こりゃア）

大和は苛立ちが憂鬱に変わるのがわかった。

朝だというのにその表情は疲れ切っている様にも見える。

大和はチラッと腕にしている高そうな腕時計に視線を移す。

（まだ9時半じゃねエか……。どんだけ元気なんだよ……。あのクソ女）

大和は近道をするべく路地裏に入る。しばらく歩いて行くと、柄の悪い数人の男に大和は囲まれてしまった。

「おい、ガキ。痛い目に合いたくなかったら金目なもん全部置いていきな！」

俗に言う『カツアゲ』をされた大和。朝だというのに元気なヤツ等だ、と大和は思った。

（面倒くせエな・・・）

何も言わない大和に痺れを切らしたスキルアウトの一人が大和の胸倉を掴み上げる。

「聞いてんのか！！クソガキ！！」

掴み上げたまま、スキルアウトは大和に殴り掛かる。だが大和はスキルアウトの拳を難なく掴み取ると、そのまま拳の骨を砕いた。

「ギヤアアアアア！！！」

耳を塞ぎたくなる程の大声でスキルアウトは悲鳴を上げる。それを一瞥する事もなく大和は言った。

「残念だよ、テメエ等。本当に残念だ・・・」

拳を砕かれた者を庇うスキルアウトが大和に怒鳴りつける。

「テメエ！！何しやがー！！」

スキルアウトが最後まで話す事はなかった。何故ならスキルアウトの首は180°後ろを向いていたからだ。

つまり首の骨を折られたのだ。見た目中学生の少年あくま

によって。

「こんな所で、たった一つの命を捨てるとはなア」

スキルアウト達が人生の最期に聞いた言葉は、学園都市最強の能力者による『死刑宣告』だった。

「遅いよ！大和！」

綾季は大和が集合場所に来るなり、ムツとした表情で言った。

「勝手な事言ってんじゃねエよ！来てやってただけでもありがたく思いやがれ！」

大和も同じくムツとした表情で言った。

「うつ・・・それは・・・その・・・ごめんなさい・・・」

痛いところ突かれた綾季は素直に大和に頭を下げる。

「だ・か・ら！一々謝ってんじゃねエよ！別に気にしてねエから」

どうもこいつといると調子が狂う。何時もの大和なら下げられた頭を蹴り上げるぐらいの事をするのだが。何故かこいつに限ってはそんな気持ちが生じないのだ。

「で、何するんだ？誘ってきたからにはちゃんと考えているんだろ
オナ」

半ば脅しにも近い言い方で大和は尋ねた。

「えーとね、綾季お洋服が見たいの・・・」

若干オドオドしながら綾季は答える。

「わかったよ。じゃアさっさと行けよ。オレはあんまこんな所来ね
エからわかんねエんだよ」

大和がそう言うのと綾季は満面の笑みで言った。

「うん！じゃあ行こっか！」

綾季は自然に大和の手を握ると、引つ張る形で店内に向かって行く。

「デメエ！何馴れ馴れしくー」

大和は手を解けと言おうとしたが言えなかった。綾季の本当に楽し
そうな笑顔を見ると、とてもではないが言えなかった。

（チツ、今回だけだぞ・・・）

心の中で一人呟いた大和であった。

「リーダー、アトラクタ万有引力が動き出しました」

真っ暗な部屋の中で男が電話に向かって言った。

『了解した。では、我々も動き出そうでしょうか』

電話の向こうからリーダーと呼ばれた男の声が聞こえる。

「了解。ですがリーダー、一つ問題が・・・」

『問題だと、何だ？』

「万有引力に接触した者がいます。アトラクタ現在、万有引力と共に行動しています」

男はスラスラと答えた。

『絶対排斥か？』
レジスタント

「いえ、違います。恐らく一般人ではないかと」

それを聞いてリーダーと呼ばれた男はククツ、と笑いを漏らした。

『なら問題はない。予定通りに進行しろ。邪魔する者は例外なく殺せ』

リーダーと呼ばれた男は命令する。

「了解しました」

通信はそこで切られ、リーダーと呼ばれた男は電話を乱暴に放り投げると呟いた。

「万有引力よ、お前の悪運もこれまでだ」
アトラクタ

男は高らかに笑い声を上げると、準備をするべくゆっくりと立ち上がった。

大和はひどく後悔していた。やっぱり着いて行くんじゃないかった、と。大和の両手に紙袋が握られていた。中身は全て綾季が購入した洋服。僅か一時間でかなりの量を購入していると思われる。

（学園都市最強の能力者が荷物持ちとはな……。アレイスターの野郎が見たら爆笑しやがるな・・・）

そんな事を考えていると綾季が大和の名を呼ぶ声が聞こえた。

（もォ一袋追加か？勘弁してくれよまったく）

これから先の展開にうんざりしながら大和は綾季の元に向かう。だが、綾季の手には何も握られてはいなかった。

「何だア、もう一袋追加じゃねエのかよ？」

不思議に思った大和は綾季に尋ねる。

「うっん、違うよ。なんか大和にばっかお荷物持たせちゃってるからジュースでも飲もうかなあ、と思って・・・」

そう言う綾季の指す、指の先には喫茶店の様な店があった。どうやら大和に気を使ってくれたらしい。

「・・・ありがとよ」

聞こえないぐらいの小さな声で大和は綾季にお礼を言った。

「ん？大和、なんか言った？」

「な、何も言っただけだよ！ほら、さっさと行くぞ！喉が渴いて仕方がねエよ！」

大和は綾季の質問に乱暴に答えると一人喫茶店に向かう。綾季も慌ててそれに続いた。

「あつ！ちよつと待ってよお大和！！」

綾季の声を無視して大和は思った、

（どうなってんだ、オレは！）
と。

喫茶店で細やかなお茶をした後、大和と綾季はブラブラと店内を散策していた。

大和はチラッと腕時計を見る。

「そろそろ昼だな。どうだ？先に昼飯とシヤレこまねエか？」

大和は昼食の提案をする。綾季もそろそろお腹が空いてきたので、その提案を承諾した。

「オツケー、了解だ。テメエは何が食いたい？」

「うーん・・・じゃあ、スパゲティーが食べたいかな」

「パスタか？わかったよ。じゃアとりあえず屋上にー」

そこまで言って大和は口を閉ざした。不思議に思った綾季は心配そうに大和に尋ねる。

「大和？どうしたの？」

「・・・。悪イが先に屋上に行ってくれねエか？」

突然の大和の提案に綾季は驚いた。

「別にいいけど・・・どうしたの？」

「ちよいと用事を思い出したただけだ。心配すんな、直ぐに戻る」

綾季は大和がやけに『直ぐに』という言葉強調した様に感じた。

「わかった！じゃあ綾季、先に言ってるね！」

そう言っただけ綾季は一人屋上に向かって行った。

綾季の姿が見えなくなるのを確認して大和も動きだす。大和は出来るだけ人の少ない場所を目指していた。

（予想通り着けて来てやがるな。数は・・・ざっと10つてところか）

足を進めながら、大和は更に考える。

（この尾行の仕方・・・プロだな。動きに全く無駄がねえ）

次に大和は完全聖人としてのズバ抜けた聴覚で尾行の足音を聞く。

（歩き方が重いな、銃か鈍器でも持ち歩いてんのか？まア問題ないけどな）

大和は地下駐車場まで来ると言った。

「こそこそ着いて来てんじゃねえよ。気持ち悪いぜ、テメえ等」

大和がそう言ったのと同時に銃声が響いた。

ドサツと誰かが地面に崩れ落ちる音が響いた。

だが崩れ落ちたのは大和ではなく銃を撃った男の方だった。

「痛ってエなア」

銃を撃たれたというのに大和はケロッツとして言った。

「いきなり撃つとはふざけてやがるな。余程早死にしてエとみえる」

大和はゴキゴキツと首を鳴らしながら言う。

「な、何故立っていられる……。確実に急所を狙った筈だぞ」

「残念だが、そんなもんじゃオレは殺せねエよ」

大和は余裕の笑みを浮かべながら言った。

「そうか、なら手段を変えるだけだ」

そう言つて男は懷から何かを取り出す。それは音楽プレイヤーの様な物だった。

「キャパシティーダウンか？残念だが、それもオレには通用しねエぜ」

大和は丁寧にも説明するが男はニヤリと笑うと言った。

「キャパシティーダウンか……。我々そんな安物は使わない主義でな」

そう言つてプレイヤーのスイッチをオンにする。その瞬間、凄まじい頭痛が大和を襲う。

（グッ！！な、何だこれ！！頭が、頭が割れる！！）

大和は頭を抱えてうずくまる。だがそれ以上に大和は理解出来なかった。オールセレクト何故事象選択の壁を超えられたのかを。

（有り得ねエ！何で事象選択オールセレクトの壁を超えられたんだ！）

「苦しそつだな」

男は大和を見下ろしながら言う。

「て、テメエ・・・！！」

大和は男を睨み付けるが何時もの様な迫力はなく、寧ろか弱い小動物が必死に強がっている様に見える。

「これは人間の脳波に直接作用する物でな。キャパシティーダウンの様に能力者限定ではないのだよ」

（クッ！！痛みで演算が出来ねエ・・・！この程度能力さえあれば！！）

大和の事象選択オールセレクトの唯一の弱点、それは事象に対しての選択はオートではなく自分自身で選ぶ必要がある事だ。大和は戦闘においては自分にとって不利と思われる事象に対しては『拒絶』を選択している。逆に言えば自分にとって不利にならないと思われる事象に対しては基本的には不干渉を貫いている。

つまり自分にとって不利なのか、あるいはそうでないかは自分自身で判断する必要があるのだ。

今回の場合、大和はプレイヤーから流れてくる音を『自分にとって不利ではない』と判断したのだ。

「悪いが君にはここで死んでもらう」

男は銃口を大和の頭に向ける。

「ハッ！ 学習しろよ。オレはそんなもんじゃ殺せねえって」

大和は必死に声を振り絞る。だが、男は表情一つ変える事なく言い放った。

「学習したよ、故にこれはタダの銃ではない」

「ああ？」

「その身で確かめるといい」

男は大和に向かって発砲した。銃口から放たれた銃弾は大和に命中すると鉄の板に直撃したかの様に弾かれる。

ここまでは先程と同じ展開、だがその後の結果は先程とは全く違うものだった。

「グッ。グアアアアアッ！！！」

体中を凄まじい激痛が襲う。また事象選択オールセレクトの壁を超えて。

「銃弾の先端に特殊な毒を塗っていてね。毒とは言うが本来なら人体には限りなく無害な毒なのだが・・・ある条件下では凄まじい猛毒に変貌する」

「・・・な、にイ」

男は勝ち誇った笑みを浮かべながら言った。

「対象が能力者、ならばだよ。この毒は能力者のAIM拡散力場に反応する物でね。体内に直接作用する物だからいかなる能力による妨害も意味をなさない。命中すればそれで終わりだ」

（やべエ・・・痛みで意識が、朦朧としてきやがった・・・）

大和の意識はゆっくりと沈み始めていた。完全聖人の力も、事象選択も使えない状態では学園都市最強の能力者もタダの人間に成り下がる。

大和に興味をなくした男は電話で誰かと話している。

おそらく自分を打ち取った事を上の連中に報告しているのだろう。

「手筈通り目標を始末した。そっちはどうだ？」

そっち？ まだ何かあんのかア？

「了解した。我々も直ぐに引き上げる」

何の話してんだア？ 目標はオレだけじゃねエのか？

「お前達引き上げるぞ。竜守綾季は無事確保した。ここにいる意味はもつない」

綾季だとオ！？ ツ！ こいつ等始めっから綾季が狙いか！！

大和は立ち去ろうとする男達に必死に腕を伸ばすが届かない。
大和の意識は限界に近付いて行く。

（ちくしょう・・・）

そこで大和の意識は途絶えた。

大和と綾季と、時々ライエノパート2（中）

――君が神鬼　大和君かい？

――誰だテメエ？

――学園都市統括理事長のアレイスターⅡクロウリーだ

――つまりテメエがこの親玉かア。オレはどうなるんだ？

――私の右腕として働いて欲しい。もっとも君に拒否権はないがね

――横暴だな。まア拒否するつもりはねエよ。どうせオレは人形だ。自分の意思で行動出来ねエヤツだからな

――君にはこの街の闇の頂点に君臨してもらう。今後光を求める事は出来なくなる

――構いやしねエよ。オレは産まれてこのかた光なんざ当たった事なんかねエしな

あの時、オレは誓った筈だ。もう二度と光を求めない。何があっても誰とも心から付き合わない。ましてや誰かを好きになるなんて、絶対にあってはならない。

そう誓った筈なのに・・・何故だ？　何故オレは求める？　光を、あの眩しいばかりの笑顔を、竜守　綾季を。

オレは闇の頂点に君臨するクソ野郎だ。あいつとは住む世界が180°違う。だから求めてはいけない。

なのに何故……。

「起きろ、大和！！　おい！　起きろ！！」

朦朧とした意識の中、誰かの声が聞こえた。大和は未だガンガンする頭を押さえながら顔を上げた。

「ライエ……」

大和に声を掛けていたのは綾季の護り人のライエだった。

「テメエ……何でここに」

「家帰って見たら綾季がいないもんだから、あいつの携帯の発信と着信履歴を見たんだよ。そしたらためえの名前があってな、もしかしたら綾季と一緒にいるんじゃないかねえかと思ってよ」

「全く理由になってねエぞ」

「話は最後まで聞け。綾季のやつ、前に服が見たいって言ってたからためえと一緒に服でも見てんじゃないかねえかと思ってな。だからとりあえずセブンスミストから探したんだが……いきなりビンゴだったな」

淡々とライエは理由は述べる。

「たいした推理力だよテメエは。一層の事探偵にでもなったらどオダア？」

「生憎だが俺は忙しい。さて、綾季はどこだ？　どうしてここで寝

てる？」

こめかみをピクピクと動かし、握り拳を作りながらライエは尋ねた。おそらくもう全てわかつているのだろう。だがあえて大和に尋ねた。大和の口から答えを聞き出す為に。

「推理してみろよ、探偵さん」

その言葉を聞いた瞬間、ライエは大和の顔面を殴り付けた。完全聖人である為、痛みは全くなかったが、大和は何の抵抗もしなかった。

「ハハ、痛ってエなア。いきなり酷エじゃねエか・・・」

それを聞いてライエはまた大和の顔面を殴った。大和には全く効いていない、それを知りながらもライエは馬乗りになりながら殴った。何度も何度も。

「てめえは学園都市最強の能力者じゃなかったのか！！！！ 聖人の頂点に君臨する完全聖人じゃなかったのか！！！！」
大和の胸倉を持ち上げながらライエは怒鳴りつけた。

「最強ねエ・・・。テメエの中の最強は女の子一人守れねエのかア？」

自虐的な笑みを浮かべながら大和は呟いた。

ライエは能力を使って大和を吹き飛ばす。隕石の様に飛ばされた大和は駐車してあった車に激突する。凄まじい轟音と大破した車からその威力の高さを物語っていた。

だが大和には通じない。完全聖人である彼にライエの絶対排斥^{レジスタント}如きでは怪我一つ、傷一つ負わせられない。

「やめとけつて。いくらやったところで無駄だ。テメエが疲れるだけだぞ」

そんな事はライエ自身が一番良くわかつている。だが何かをせずにはいられないのだ。それだけライエの怒りは激しかった。綾季を守れなかった大和への怒りと、心のどこかで大和の事を信用していた自分への怒りが。

「俺の中ではてめえが一番強かった。誰よりもてめえが一番だった。なのに・・・どうしてだ！！ 大和！！！！」

大和は何も言わず黙ってライエの怒声を聞く。

と言うよりも何も言えなかったのだ。ライエの怒りは痛いほどわかる。自分の掛け替えのない存在を守れなかった憎きヤツが目の前にいるのだから。

「オレを殴って気が済むなら殴れよ。オレは何の抵抗もしねエ。なんなら完全聖人も拒絶してやってもいいぞ」

大和は弱々しく呟いた。そこには学園都市最強の面影は微塵もなく、ただの少年にしか見えなかった。

「ふざけんじゃねえええええっ！！」

そう叫びながらも、ライエは能力で大和を弾き飛ばす。完全聖人を拒絶していた大和はガン！と壁に激突し、口から血を吐き苦しそうに顔を歪ませた。

「痛ってエなア。テメエの能力って、結構応えるな」

咳き込みながらも、まだ軽口を叩く大和。その様子を見て、ライエは何か決意した様な表情で言い放つ。

「ほんの少しでもてめえを信用した俺がバカだった」

大和はなにも言わない、言い返さない。ただ黙ってライエの言葉に耳を傾ける。

「俺一人じゃ限界がある。だけど、てめえならどんな事があっても綾季を守ってくれると信じてた。だけど・・・とんだ見込み違いだったな」

「・・・ご期待に添えられなくて悪かったなア」

大和は最後まで軽口だった。湧き上がる自分への怒りに嘘を吐いて。

「綾季は俺一人で探し出す。てめえには何も頼まない。だからもう二度とあいつには近付くな」

それは大和にとっても、ライエにとっても余りに辛く残酷な通告だった。だが大和にはそれを拒絶する事が出来なかった。この世の全ての事象に選択肢を持つ事が出来る大和も今回ばかりは受諾の一手しか選択肢はなかった。

「あばよ、最強^{やいごちやへ}」

捨てゼリフを残し、ライエは消えた。残されたのは学園都市最強の能力者『だった』大和だけだ。

「無様だな・・・オレって」

ライエは後悔していた。何故あんな事を言っただろうと。

大和だって自分と同じ一人の人間だ。最強とは負ける事だって当然ある。わかっていた、そんな事は理解していたのだ。だから大和は何も悪くはない。寧ろこの前の事といい、大和は幾度となく自分や綾季の力になってくれた。

だからこそ、本当に悪いのは自分の筈なのだ。綾季と大和を助けられなかった自分が一番悪い筈なのだ。

ライエは何時の間にか大和を友人として、綾季と自分を助けてくれる存在として、信頼していた。だが、それは同時に彼に甘えていた事にもなる。学園都市最強の肩書に、自分はおるか綾季よりも年下の少年に、ライエは甘え過ぎていたのだ。

にも関わらず大和に酷い事をしてしまった。本気で大和を殺したいと思ってしまった。多分綾季がいれば、顔を真っ赤にして、泣きながら怒るだろう。

（最低だな・・・俺って。今まで散々頼りっぱなしだったのに、一回失敗したぐらいで逆ギレか・・・）

激しい自己嫌悪に陥りながらもライエは足を進める。

綾季を必ず救い出す為に。

大和がセブンスミストから出たのは、辺りが暗くなってからだった。あの後、家に帰る気が起こらなかった彼は適当に時間を過ごしていたのだった。

外に出ると大和の沈んだ心に追い討ちを掛けるのか如く、冷たい風が吹き付ける。冬の学園都市に吹く風はどこまでも大和に意地悪だった。

（これでいいんだ……。オレは裏の人間だ。元々あいつ等みてエな表の人間とは縁がなかったんだよ）

大和はどこまでも自分の気持ちに嘘を吐く。

（オレみてエなヤツが光を求めちゃいけねエんだ。ましてや誰かを好きになる事など）

ビュオー、と冷たい風が大和に吹き付ける。

寒さに我慢出来なくなった大和はコートのポケットから手袋を取り出そうとする。

取り出したところで大和はそれを見つめたまま静止した。大和の手にある手袋は、あの日路地裏で助けてくれたお礼にと、綾季がくれた彼女とライエとお揃いの手編み物だった。

大和は思い詰めた様な表情をすると、手袋をポケットに戻した。

（オレに……。これを使う資格なんざねエ。なに甘えてんだ、オレは）

ふとそこで、大和は自分の頬に何か水滴な様な物が当たったのを感じた。

雨か雪でも降ってるのかと思い、大和は顔を上げた。しかし空は曇

つてこそいるものの、雨も雪も降ってはいなかった。
だが謎の水滴は確実に大和の頬を濡らし続けている。

（ハハ、泣いてんのか？ オレが、学園都市最強のこのオレが）

それは涙だった。大和は泣いていたのだ。涙を流す事など、一体いつ以来だろうか。

（思い出したぜ……。確か『悲しい』ってのは、こんな感じだったなア……）

闇に埋れている間に、大和には何時の間にか『悲しい』という感情を忘れていた。

（どこまでも哀れだなオレってのは。……生きてる意味あるのか？ オレって）

自分の存在理由すら忘れてしまう程、大和の傷は余りにも大きかった。

――君の生きてる意味かい？ 簡単だよ。君は殺人マシンだ。感情のない、哀れなロボットさ。

大和の頭の中で子供の声が聞こえた。

「誰だ！？」

大和はキョロキョロと辺りを見回すが人が多過ぎて誰が誰だかわからない。

――探しても無駄だよ。僕は君の意識に直接話し掛けている。実際に話している訳ではないよ。

「デメエ・・・何者だア？」

――君が気にする必要はないよ。それより、君はこのままでいいのかな？

全てを知っているかの様に声は大和に話し掛ける。

――綾季ちゃんを助けなくていいのかい？

「オレにそんな事する必要はねエ。ライエのヤツが行った。オレはもう必要ねエよ」

――じゃあ質問を変えよう。君はこの結果を受け入れられるのかな？

大和は声言っている事の意味がわからなかった。

「・・・どういう意味だア？」

――君は負けたんだよ？ 学園都市最強である筈の君は何の抵抗も出来ず、無様に敗北したんだよ？ 敵にもライエ君にもね。君はこの結果を受け入れられるのかい？

「ッ！！」

大和の中で無意識的に霧散していたドス黒い感情が、再び産声を上げようとしていた。

「――最強、最強って君は本当にそうなの？　最強なら最強らしく力ツコ良く報復すべきじゃないかな？」

「オ、オレは・・・」

「――憎くないのかい？　君のプライドをズタズタにした彼等が、敵さんとライエ君がさあ。」

敵は確かに憎いがライエは関係ない。寧ろ憎まれるのは自分の方だと大和は自覚していた。だが声はそれを見透かしたかの様に言った。

「――大体さあ、今回一番悪いのってライエ君と綾季ちゃんだよな？」

「！！！」

必死に抑え込んでいたドス黒い感情が産声を上げた。

「――ライエ君がもっと早く来ていれば、綾季ちゃんが遊びに行こうなんて言わなければ、こんな事にはならなかったんだよ？　君は被害者だ。何も悪くない、君は悪くない。」

「オレは・・・どうすれば・・・」

「――簡単だよ。憂いがあるなら払えばいい。憎いヤツがいるなら消してしまえばいい。君を苦しめるのはあの二人だよ。」

そして、声は言った。決定的な一言を。

「みーんな、殺しちゃえばいいんだよ」

その一言が大和の自我を完全に破壊した。

そうだ、悪いのはあいつ等だ。何でオレが苦しむ？ オレが苦しむ理由などどこにもない。オレは被害者だ。オレは何も悪くない。

オールセレクト
「事象選択・・・」

大和は目を閉じると、静かに呟いた。この声には怒りと殺意しか感じられなかった。

「現在の神鬼大和の人格を拒絶。殺意、憎悪、憤怒、敵意をベースとする人格を選択」

大和は能力で人格を選択すると次の一手に出る。

オールセレクト
「事象選択を拒絶し、全知全能をその身に体现する」

大和は使ってしまった。事象選択を捨てる事で、得る事が出来る彼の切り札、『全知全能』の力を。

「全知の力を用いて索敵を開始。索敵対象・・・」

大和は一瞬、何かを思ったかのように口ごもった。だがはつきりと言った。

「索敵対象は、ライエ・竜守綾季の二名」

索敵から数秒後、大和はピクツと反応した。標的を発見したのだ。大和は表情を変える事なく言い放った。

『全員殺せ』

学園都市最強の能力者が悪魔に変貌した瞬間だった。

とある死神と圧殺と観測者（前書き）

黒羊様より預かりました、a s u t a様とアポリオン様のキャラと
のコラボになります。

とある死神と庄殺と観測者

神矢真夜 かみや しんや

は平凡な家庭に生まれた平凡な高校生だ。少々妙な『眼』を持つて
いる事と、人一倍正義感が強いぐらいで、それほど特徴のある人間
だとは神矢自身思わない。

そんな彼が所属している剣道の部活帰りに見かけたのは、何やら能
力を見せびらかしながら複数の男達が嫌がる少女に詰め寄っている
光景。

前述通り、警察官の父親譲りの影響なのか正義感溢れる神矢は躊躇
いなく助けに入るわけだが、それより数秒早く割り込んで来た大男
がまたたくまに男たちを蹴散らしてしまう。

それはまるでアメコミのようなコミカルな、なんともふざけた光景
だった。

しかしそんな馬鹿げた力を発揮した大男は、神矢の友人だったりす
る。

阿頼耶 あらいや 家康 いえやす

体型は細身ながら、二メートルに届きそうなほど大きく。目の下に
蝙蝠のタトゥー、後ろ髪の毛先はピンクに染めあげられ、さらに鯉
が描かれたジーンズやヒトデ型のネックレスと、とにかくその美形

が台無しなほどに全てが派手で威圧的。
その証拠に、助けられた少女は御礼を叫びながら逃げ出してしまっ
始末。

「あん？」

不良を追っ払った、というか吹き飛ばした家康はジロリと神矢を見
下ろすと、威圧的な空気が萎んだ。

「なんだよ、真夜か。間違えてぶっ飛ばしちまいそうだった」

もう一度彼の名を言っておくと、彼は阿頼耶 家康。

この街を『無能力者にとって安全で超能力者にとって危険な街』に
変える事を目標にした、超能力者が大嫌いな男。
そしてスキルアウト『チーム』のリーダーだ。

性格上、今回のような厄介事によく首を突っ込む神矢は、同じよう
に首を突っ込む彼とは頻繁に出会う顔なじみ。初めて会った時は互
いの誤解からぶつかり合いもしたが、今では友人として付き合っ
ている。

「相変わらずだね家康は」神矢は苦笑しながら「それにしても、今
日はなんだか機嫌悪い？」

そう言われた家康はまたブスツとした顔をする。

彼は普段からニコニコ笑顔を振りまくような人物ではないが、今日は一段と不機嫌そうに見える。

家康はガリガリと頭を掻き、大きくため息を吐く。

「仲間がやられた」

ドキッ、というよりヒヤリとさせられた。

家康という男は基本馬鹿で感情的で考えなしで、周囲の事なんかお構いなしな無鉄砲に見える。だがそのほとんどは仲間の為であつて、超能力という格差が存在するこの街で落ちこぼれの烙印を押された連中を助けてやりたくて……。

その仲間が傷つけられた。それは彼にとってこれ以上ない怒りだ。この男が本気で怒った場合、その近くにいる事は爆弾を抱いて寝るよりも危険な事だ。それなりの付き合いである神矢はそれを知っている。

「死んじやいねえけど重傷だ。犯人は絶対見つけ出す。見つけ出してそのクソ野郎は絶対ぶつ殺す」

きつく握られた家康の右手から血が滴る。

という事は、いま彼はその犯人を捜してこの辺りを歩いていたわけだ。

「犯人はわかってるの？」

「いや、顔はわからねえが多分——」

家康の言葉を遮って、バコン！ という大きな音と悲鳴が聞こえてきた。

声は近い。路地の向こうからだ。

二人は顔を見合わせて、どちらともなくそちらに向かって駆ける。着いてみると、円を描くような人だかり。その中心には、仰向けに倒れて血の海に沈む高校生ぐらいの少年と、その傍らにはスーツ姿の男。

その男を見た瞬間、神矢の肌が泡立った。

身長がさして高いわけではない。筋肉隆々でプロレスラーのようながたいなわけでもない。

漆黒のスーツに身を包み、何故か恐ろしげな般若の仮面をつけた男。白い手袋を着けた手に握られた場違いな西洋刀。

そんな格好の異常すら理由ではなかった（・・・・・・・・・・）。

言ってしまうえば空気。

ただ立っている。それだけなのに、首元にナイフを突きつけられたような命の危機を、全身が訴えている。

そのプレッシャーは、かつて怒り狂った家康と対峙した時と同種。

「家——っ!？」

名前を呼ぶ前に、友人は爆発的なスピードでその般若の男に飛び掛かった。素で新幹線すら追いつくスピードの男を呼び止める事なんて出来るわけではない。

野次馬を飛び越える家康を、般若の男は割とゆったりとした動きで躲した。躲した（・・・）のだ。

家康の拳は数瞬前まで男が立っていた地面を砕き、男はそれを眺めているようだった。

この場合、地面を素手で砕いた友人の力に呆れるべきなのか、それともその友人の拳を躲した男を驚くべきなのか神矢にはわからない。わからないが、もうしょうがないと、自身も騒ぎの中心に飛び込む。

「逃げてんじゃねえッ!!」

再び男に接近する家康。般若の男は、今度はそれを躲すのではなく手にしていた西洋刀で受け止めた。攻撃した家康も、受け止めた男もどちらも怪訝な様子だった。

般若の男は自身の西洋刀を眺める。

「……お前も能力者って奴か」

おそらく、男は西洋刀に対して素手で殴ってき筈の家康の拳が切れていない事に疑問を持ってるのだろう。

だが切れる筈がない。たかが刃物であの友人が傷つけられるなど。

「ああそうだ。俺は能力者の癖にスキルアウトだ。カスな能力者の中でもレベル五なんていう最低なカスの『ブレッシャースペース 圧殺空間』阿頼耶 家康だ」

「そうか」男は興味なさそうに呟いて「殺す」

今度は男の方が斬りかかった。家康も迎え撃つように構える。

「そこまでだ！」

ピタリと家康、般若の男が止まる。災害レベルの二人の間に無謀にも割り込んだのは、無能力者の神矢だった。

家康に左手を突き出し、右手の木刀で男を牽制する。

男は突きつけられた木刀の先を眺め、一旦間合いを取る。

「どけよ、真夜」

「ちょっと落ち着きなよ」

神矢は木刀を下す。念の為、般若の男に注意を払いながら、

「いきなり襲い掛かるなんて、どうしたんだよ」

「そいつが俺の仲間をやった奴だ」

驚いて神矢は男を見る。仮面で表情は見えないが、男は何やら神矢を眺めてるようで今すぐ襲ってくる気配はない。もう一度、少し興奮状態にある家康に尋ねる。

「理由は？」

「此処にある匂い、仲間をやった奴と同じだ」

家康はクンと鼻を動かす。彼はその並外れた嗅覚で普通の匂いは勿論、AIM力場の匂いまで嗅ぎ分けることが出来る。それによって相手の能力の種類、強度を知ることが出来るのだ。

家康の話では、探しているのはレベル四相当の空間系能力者。手口は対象を上空に転移させて落下させるものらしい。

突然上空に投げ出されれば狙われた者は当然パニックに陥るだろうし、仮に平静を保てたとしてもそこから対処出来る人間なんてそういない。

結果はどちらにしても地面に直撃だ。

神矢はちらりと倒れている少年を見る。

少年も、確かにその手口通りに高所から地面に叩きつけられていた。般若の男を見る。

「僕は神矢 真夜といいます。あなたの名前を訊いてもいいですか？」

「……………」

男は西洋刀を下し、おもむろに仮面をずらした。露わになった素顔は、氷で造られた彫像のように整えられた神秘的で、凍えるような美しさをもっていた。ただし、その顔の左目辺りに酷い火傷のような傷を負っていた。

「いわみしやうご岩見祥吾」

「岩見さん」神矢は確認を込めて復唱し「あなたがこの人を傷つけたんですか？」

「違う。——そういったところで信じられるのか？」

問いかけてくる祥吾に対して、真夜はじつと見つめる。やがて、視線を祥吾から切ると、同時に警戒まで解いた。

「家康、この人じゃない。この人は嘘はついてない……………」
「」

やたら断定的な言い方に、今度は祥吾が首を傾げているようだった。

それでも、家康は神矢の言葉を絶対的に信用しているようで、祥吾に対する警戒は解かないまでもあからさまな敵意は消え失せた。

「クソッ！　なら誰が――」

瞬間、家康の姿が消える。代わって、見知らぬ黒服の男が目の前に現れた。

それに神矢が驚く暇もなく、今度は左からとても重たいモノが地面に激突する音。そちらを見ると、頭から地面に激突した家康が倒れていた。

「あれは死んだな」

祥吾のどうでもよさそうな響きの呟き。

「まずは一人いいいい」

「……っ」

夜通し歌い続けて痛めたようなしゃがれ声。振り向くと、突然目の前に現れた黒服の男が懷から棒手裏剣のような投擲用ナイフを取り出す。それを、神矢ではなくその後ろの祥吾に向けて投げた。

男の手際は速く、その動作は僅かな時間で完了する。おまけに距離離。

並みの者では何をされたか気付かないうちに刃は額に突き刺さっているだろう。

だが当然、災害クラスと呼ばれるレベル五と張り合った祥吾にしてみれば充分反応出来る範囲。

しかし、投擲されたナイフは、祥吾よりも男に近い神矢によって撃ち落された。

驚いたのは黒服の男と祥吾の二人。

神矢はナイフを撃ち落すとそのまま黒服の男にその木刀で殴りかかった。

しかし、ピタリと木刀は止められた。

止められた木刀の先には、黒服の男ではなく呆然と立つ女性の顔。

「ひっ」

ようやく状況を理解した女性が小さな悲鳴を漏らして座り込んだ。

神矢は『すみません』と女性に口早に謝りながら辺りを見回す。自分達を囲む野次馬の向こうに、走り去っていく黒服の背中が見えた。

空間系の能力者、家康の言葉を思い出す。

「家康！ 大丈夫！？」

「つたりめえだ」

ボコンッ！ と地面にめり込んでいた頭を引き抜いて首をブルブル振る家康。言葉の通り、傷一つ負った様子は無い。

それを確認した神矢は黒服を追って走り出す。家康もそれを追った。

男が逃げ込んだのはとある打ち捨てられた研究所だった。確か最近、此处を根城にしたスキルアウトのチームが壊滅させられたのだと家康が言っていた事を思い出す。

「で、なんででめえまで来てるんだよ」

睨むように家康が見るのは、まるで当然というようについてきた祥吾だ。

彼は興味なさそうに正面の研究所を眺める。

「二つ訊きたい」

喋りかけたのは神矢に対してだった。『無視か！』という家康の言葉すら祥吾は無視する。

「なんですか？」

「何で俺が嘘をついてないと思ったんだ」

先ほどの勘違いに対する問答だと、神矢も気付く。
尋ねられて、神矢は困ったように笑った。

「僕の『眼』はちょっと特殊で、そういうのがわかるんです」

「それも超能力か？」

「『絶対観測』^{ホライゾン}って呼ばれてます。この街では特技だって評価を受けてますけどね」

ふーん、と相変わらず祥吾は興味があるのかよくわからない薄い反応。そうして『二つ目』と言った。

「なんでさっき俺を助けたんだ？」

その質問に対しては、神矢は本気で首を傾げた。まるで生まれただけの子供が母親の言葉を理解出来ず不思議がるように。

「助けることに理由っているんですか？」

逆に祥吾の方が目を丸くしてしまう。その傍らで、神矢の言葉を聞いていた家康は気分良さそうに笑っていた。神矢は二人の反応に、ますます首を傾げる。

研究所の中はただっ広い大きな部屋が一つきり。ただ例の抗争で床や壁は無残な崩壊を遂げている。

その空間の真ん中で、黒服の男は隠れるでもなく佇んでいた。

「ん？ んう~~~~ん???」

男は神矢達、正確には家康を見て首を不思議そうに傾げる。ゴキーンと曲げ続け、ほとんど直角になるまで曲げる。ぱらぱらと乱れた長い黒髪の間から、魚のようにぎょろりとした目が現れた。

「なんで生きているんだー？ あの時殺した筈なのにいい」

「ケツ。あの程度でくたばるほど、やわな体しちやいねえんだよ」

「ギ」

ギギギギギギギギギ。

金属を削るような不快な音色。それは黒服の歯軋りの音で、それが男の笑い方だというものにはなかなか気付けなかった。

「『庄殺空間』『岩見 祥吾』……死んでしまう……こんな、こん

な化け物二匹と戦うなんて……………死んで、死んでしまっ」

「喜んでんのか絶望してんのかどっちだってんだ」

気味が悪そうに舌を打つ家康。すると、祥吾が前触れなく前へ出た。

「イライラすんなあ……………」

ぼそりと言った言葉には、身の毛もよだつ殺気が込められていた。

「つまりはあれだ。お前に間違われたせいで俺はこんな面倒な目にあつてゐるわけだ」

すたすたと、大胆に間合いを詰めていく祥吾。黒服の男との距離が五メートルを切った時、ピタリと祥吾の歩が止まった。

「——お前の顔面を破壊する」

消えた。いや、そう思わせる程のスピードの跳躍。

西洋刀を振り上げて、一瞬で男との距離をゼロにした。

男は呆けたようにそれを眺め——

「ギヒ」

―― 笑った。

「岩見さん！」

神矢の叫んだ時には、男の位置には家康の姿が代わりに立っていた。勢いの止まらなかった祥吾の刀は家康を貫く、事はなく、家康の方が上手く躲していた。

「て、めえ……途中気付いててわざと突いてきやがっただろう！？」

犬歯を剥いて問いただす家康に対して、祥吾は平然と突きこんでいた刀を引き戻す。

「……ち」

「てめえいま舌打ちしたか！？ おいコラ！」

騒いでいる二人がとりあえず無事だと確認できた神矢はすぐにその場を離れる。案の定、今まで家康のいた場所に、黒服の男は佇んでいた。

これでこの男の能力はわかった。

「物体の座標と座標を入れ替える能力……」

「そーだーよー」男は答える。「オレの能力の名前は『ボジションチェンジ座標逆転』」

被害にあったの者は皆高所から地面に叩きつけられていた。それは対象を突然高所に転移させたから。それだけならレベル三以上の空間移動系能力者なら可能。

この男の場合、その方法が他人との座標を入れ替える事で発動している。

神矢の攻撃に女性が晒された時も、さっきの祥吾と家康の時も、この男は自分と他人の位置を入れ替えていたのだ。

「クソ野郎だな」

忌々しげに、家康は地面に唾を吐き捨てた。

「能力者ってだけでもカス決定だが、他人を身代わりに逃げ回るな
んざマジでカスだ。だから、つづ圧殺すぜ！」

先ほどの祥吾に劣らぬスピードを見せる家康。次いで、神矢が叫ぶ。

「岩見さん！ あいつの視界に入らないで下さいー！」

（気付かれた？）

男は内心不審がる。確かに自分の能力の条件に、転移させる対象を視界に入れるというものがある。それをたった数回で見破られたのか？

しかし、目前まで家康が迫っても男の不気味な笑みは消えない。たとえ神矢達と入れ替われなくても、入れ替わる相手はいる。そう、目の前の家康と入れ替わればいい。

「んっ？」

家康が拳を突きだした先に、男はいなかった。

正確には、正面から向き合っていた家康と男が入れ替わった場合、彼らは近距離で背中合わせのような状態で転移が完了する。

それを知らない家康は背後を振り返るのが遅れる。対して知っている男は転移後瞬時に振り返る。そこには無防備な家康の背中。

たとえ神矢達が叫んでも、家康が振り返るより男がナイフを突き立てる方が速い。

——瞬間、ナイフを持っていた男の右手が唐突にひしやげた（・・・・）。

「ギ、がああああ!？」

「はん、匂うんだよ」

背を向けたまま、家康は振り返る必要もないとばかりに獰猛な笑みを浮かべる。

「てめえみたいな能力者^{クシヤロウ}は特にプンブン匂うぜ」

（て、転移を……）

「そんなに死ぬのが嬉しいなら存分に殺してやるよ」

男にとってそれは死神からの囁きだった。声が聞こえた時にはすでに、無事だった左腕が肩ごと切り落とされていた。再び絶叫。喉が裂ける。血混じりの声が漏れた。

それでも、男は笑う。化け物二匹に追いつめられ、死が目前に迫ったこの瞬間こそ、彼にとって至福の瞬間。このスリルが、男の生存本能に火をつける。

入れ替わる対象を視界に入れていなければ能力は発動しない。確かにそうだが、別に対象は生物でなくても構わない。ある一定以上の大きさをえあればなんだって——、

「残念だけど、それも視えてる（・・・）」

眼前に白い布が拡げられていた。視界が全て遮られている。

（これじゃあ入れ替われない……ッ！！）

腹部に木刀が突き入れられた。的確に鳩尾を貫かれた男は強引に意識を断ち切られた。

「——ふう」

安堵の息と共に、神矢は木刀を下す。傍らでは家康と祥吾もそれぞれ戦闘態勢を解いていた。

と、突然頭をワシワシとかき回される。

「おいしいところもっていきやがって、真夜てめえ！」

豪快な笑い声をあげる家康は、いつもの優しい彼の顔だった。

「家康のおかげだよ。それと岩見さんも、ありがとうございました」

結局なんだかんだ最後まで手伝わってもらった形になった。
御礼を言われた祥吾は、それでもやはり興味なさそうに西洋刀を収め、

「祥吾でいい」

淡々と言った。

一瞬神矢はきよとしながら、改めて笑顔を浮かべる。

「ありがとう、祥吾さん」

「まあ、てめえがいなくても俺と真夜がいりやどうにかなったけど
な……ってコラ！ てめえ、最後まで俺は無視か！？」

段々と二人が仲の良い兄弟のように見えてきた神矢は笑うばかりで
止めようとはしなかった。

「まったく、亞羅々戯め。^{あらいあらい}結局標的どっちも消せないとは使えない」

無遠慮な声は研究所の入り口から。視線をやると、特殊部隊のような
装甲服を纏った男が立っていた。一人ではない。研究所のあらゆる
場所から、同じ格好をした者達の中に雪崩込んでくる。
装備からわかるように、明らかにプロだ。

「誰ですか、あなた達？」

「ん？ 余計なものまで入り込んでいるじゃないか」男は初めて神矢を視界に入れて「まあ、運がなかったな。その標的の二人諸共死んでくれ」

「はん、どうやら元々狙いは俺だったってわけだ」

左の掌に右の拳を叩きつける家康。

神矢は男の言葉を反芻する。『標的の二人』。

一人が家康。そしてもう一人が神矢でないとするなら。

「男ばかり群れてきやがって……ああー、イライラする」

すらりと再び西洋刀を抜く。そうして、祥吾は般若の仮面をかぶり直した。それがまるでスイッチでもあるかのように。

「お前達の顔面、粉々に破壊してやるよ」

気付けば祥吾の姿はなかった。

謎の部隊との戦いは言うまでもなく神矢達の勝利。というか圧勝。虐殺だ。

レベル五の『圧殺空間』と、それとタメを張る男。その二人だけでお釣りがくる。はつきりいって神矢は何もしていない。

「アイツはやめとけ」

先を歩いていた家康が言う。一瞬何を言っているのか神矢はわからなかったが、祥吾の事を言っているのだとわかった。家康はいつになく真剣な顔で。

「あの野郎、能力者でもねえのに変な匂いしてやがった。あの力は得体が知れねえ」

確かに、見た目は若そうだったが、実は開発を受けるような年齢でない事は神矢の『眼』でも視えていた。見立てではおそらく二十代半ばから後半。

「それに」さらに真剣な色で続ける「それをかき消すほど強烈に匂いやがった。血の匂いがな（・・・・・・・・）」

「・・・・・・・・」

彼が言うのだから本当の事だろう。

しかしどうも、神矢には彼が見た目通りの人間には見えなかった。だからといってどう見えたか説明できるわけでもないが。

こついった事に関して、自分の『眼』は役に立たない。

（それにしても……）

岩見 祥吾。どこかで聞いた事があるような、と神矢は考えるが思
い出せない。

「んあ、俺だ。なんか用か？」

見ると家康は誰かと電話をしているようだった。

仏頂面だった友人の顔がみるみる驚き混じりの笑顔に変わっていく。

「本当かりユウタ!？」友人は電話から顔を離して「おい真夜!

あの魚目野郎にやられた奴の意識が戻った!」

「本当!？」

おそらく被害にあつた仲間の事だろう。

家康は再び電話に顔を近付けて、怒鳴るに伝える。

「リュウタ！　いまから俺たちが行くからしつかりあいつの意識繋いどけよ」

『わかったよ。けど何度も言うけど俺の名前は流田——』

ブチツ、と向こうで何か言っていたようだったが家康は構わず電話を切る。そのまま走り出す。

仲間想いの彼の事だ、本当に嬉しくてもたってもいられないのだろう。

神矢は先ほどの疑問も忘れ、とりあえず今は彼の背中を追って走り出す。

「うーん」

祥吾は唸っていた。別に怒って唸っているわけではなく、悩んでいるのだ。

悩む。彼にとつてとても珍しい行為だった。

決して頭の悪くない彼だが、いくら悩んでも答えは出ない。

疑問は一つ。何故気になるのだろうか、だ。

基本、岩見　祥吾という人間は、他人に対して愛するか殺すか無関心という表現しか取れない。タイプの女の子なら愛するし、男なら

ほとんど殺すし、気分が良ければ無関心。

それなのに、神矢 真夜。阿頼耶 家康。

この二人が気になってしょうがない。

相手は男だ。愛する筈もない。殺したいわけでもない（大男の方は微妙だが）。それなのに、無関心でいられない。

「うーん」

わからない。わからないわからない。

「……あー、イライラしてきた」

いまでも誰かと出会ったら問答無用で殺してしまいそうだ。割と本気でそんな物騒な事を考えている祥吾。

「こんな時はバナナだ」

糖分の補給だ。バナナはとにかく素晴らしい。

バナナを食べながらまた考えよう。

そう結論に至った祥吾は、コンビニを求めて徘徊する。

死神とまで呼ばれる稀代の殺人鬼は、今日も学園都市のコンビニを

襲つ。

とある昼頃の太陽の下（前書き）

あしゆき様よりお預かりしました。

とある昼頃の太陽の下

12月某日、学園都市で一人の男子生徒が走っていた。現在の時刻は12時半、学生ならまだ学校で授業を受けている時間帯だ。別に遅刻をしたから走っているわけではない、学校から飛び出してきたのだ。学生は走る、門を抜け、路地を駆け、人波を裂いて

「待ちなさい！常闇（旦那様）！！」

その学生の後ろを着いてくる女子生徒が二人、二人は片手を学生に向け能力を使う。風が飛び、物が舞う。その時、学生の頬に鋭い風がかかる

「ちょ！今かすつたぞ！殺す気か！？」

そうやって学生”常闇直人”は後ろに叫ぶ。かなりの距離を走っているが未だにその速度は衰えない、意外と体力が多いことに気づけるだろう

「アンタが止まればいいだけの話よ！」

「さあ旦那様！お覚悟を！」

「覚悟ってなんのだよ!」

「私達に初めてを捧げる覚悟!」

「止ま(うしな)ってたまるかアアアア!」

常闇は走る。自分の命を守るために

|
|

所変わって街中、一組の男女が歩いていた

一人は無理矢理結んだようなポニーテールに半袖短パンの女子、その隣には少しでも衝撃を与えると壊れてしまいそうな華奢な体の男子。竜守とライエだ

何故、二人が街中を歩いているか。それは竜守の持っている雑誌が原因だ

それは今朝のことである。竜守も女の子なので雑誌の一つや二つは買う、ランダムで、だが。ライエはその時間帯は寝ている、色々馬鹿の始末に時間をかけているのだ。竜守は基本朝が早く夜も早い。しかしライエは違う、無理矢理起こすと怒られるのでコンビニで買ってきた雑誌を捲る。1ページ目、読者サービス。2ページ目、応募方法。そして3ページ目、竜守に衝撃が走る

朝の8時、ライエは布団をかぶりぐっすりと寝ていた。その枕の隣には『起こすな』と墨で達筆に書かれた紙が置いてある。その時、腹に尋常じゃないほどの衝撃が走る。思わず『オボオ!』という呻き声をあげてしまったのは悪くないだろう。怒りを込めて原因を睨む。そこには雑誌を片手に満面の笑みで馬乗りをしている竜守がいた

『……おい、どういうことだ。字読めねえのかデメエは』

そう怒気を含ませながら言う。と竜守はバツとライエの目の前に雑誌の3ページ目を突き出す。ライエは訳がわからなくなり竜守を見る。竜守は目を光らせていて目は『読め!』と言っているように見えた。ライエはしょうがなく3ページ目にデカデカと書かれている字を見る

『……クリスマスケーキ予約開始?』

竜守はすぐに雑誌を引いて自分の顔を近づける。輝いている目を見て、ライエはなんとなくこれからのことが予想できた

『クリスマスパーティーしょ!』

ほらやつぱり、ライエはまるつきし自分の予想と同じだった答えを聞いて重く、重く溜め息をつく。その時、起きる時間を間違えたラスがライエを馬鹿にするように鳴いた

以上、回想

ライエは今朝を思い出しながら溜め息をつく、朝は起こすなどあれほど言っているのに、文句の一つも言いたいところだが。チラッと隣を見る、竜守は上機嫌そうに歩いている。何がそんなに嬉しいのか分からないがスキップまでしている。文句は何故か言えない、理由は分からないが言えない。そんな自分に腹がたつ、何故かは知らないが腹がたつ

「あれ?お二人さん。奇遇だな、どうしたんだ?」

右から聞き覚えのある声がする。首を向けるとそこには少しボロボロになった常闇がいた

「あ、直人。実はね」

「行くぞ、さつさと帰って俺は寝たいんだよ」

常闇を見た瞬間、ライエは顔を歪め話しかけようとする竜守の手を引つ張りその場を去ろうとする。が、常闇がそれを許さない

「おっと、まあ世間話ぐらいしようぜ？青春少年」

「……………なんだ、その最高に理解出来ねえ呼び名は？」

「そりゃあデートを邪魔したのは悪かったけどよ。折角会ったんだし、話ぐ」

ヒュッ！とライエの手から釘を殺す気で高速に放たれる。常闇は首を僅かに傾げるだけで避ける

「……………いきなりのご挨拶だな、青春少年」

「悪いな、余程死にたいのかと思ってよ。思わず手が出ちゃった」

既に二発目をその手に装填した状態でライエは常闇を睨み付ける。常闇はニヤリと笑って身構える。するとスパーン！と二人の頭が叩かれる

「ケンカはダメ！」

見ると、竜守がその手にハリセンを持ちながら腰に手を当ててプンスカと怒っていた

「……綾季ちゃん、そのハリセンは一体どこから……」

「フフン、直人。世の中には、知らなくてもいいことってあるんだよ」

竜守はドヤ顔でそう言う。その目は決まった！と語っていた。ライエは馬鹿らしくなり釘を直した、常闇は苦笑いを浮かべていた

「ハア、それで？なんでここにいるんだよ」

「ん？ああ、それは」

いいかけたその時、その場から騒音が消える。嫌な予感が背筋に走る。常闇は竜守を持って、ライエは釘を構えてその場から跳び跳ねた。次の瞬間、自動車が一台空から落ちてきた。自動車は逆さまの状態で地面に落下し、窓ガラスは砕け散った

「ッ！チツ、またあの馬鹿共か！」

「いや、残念ながら違ひたいだぜ」

その時、頭上に幾何学的な魔方陣が描かれる。そして全てが描かれた時、陣の中から大量の標識が降ってくる

二人は舌打ちをして死なないために行動に移す。まず最初に常闇が竜守をライエに投げる、ライエは釘を直してそれを受け止める、確認した常闇は影を広げ守るようにドーム状に展開させる。展開した影に金属音を鳴らして標識が弾かれていく。そして全ての標識を弾いた時、ドームは解かれ、中から無傷の三人が出てきた

「……………なんだ、今のゲームに出てきそうな魔方陣は？」

ライエは呟いた。能力だと言えばそこまでだが、『魔方陣を出して、物質を出す』なんて能力聞いたことがない。そんな能力があれば、間違ひなく研究者共の餌食だ。だが、それは『どうでもいい』。気になるのは、誰を狙ったかだ。竜守を狙ったのか、常闇を狙ったのか、それとも自分か。なんにせよ、捕まえて吐かせなくてはいけない。そしてソイツの狙いが竜守なら、早急に始末しなくてはいけない

「……………出てこいよ、かくれんぼなんてつまらないだろ」

常闇は話しかけるように言った。それほど大きな声量ではなかったが、騒音の消えたここら一帯には充分に響く。するとビルとビルの間から靴を鳴らして一人の男が出てくる。服装はジャラジャラしたアクセサリー、ピアスはいたる所に付いていて竜守は見ているだけで痛くなった。髪はピンク色に染め上げられ、いかにもチャラ男という格好だった

「チョリース」

「……」

「え、えつと、ちょ、ちょリーす？」

「いや、真似しなくていいから」

やはりチャラ男だった。チャラ男はさらに言葉を続ける

「えつとあー。あんたらが『万有引力』と『絶対排斥』、それに『黒之微笑』的な感じでO K E？」

「……だとしたら？」

「怨みはないんですけどおー。お前らには、ここで消えてもらう。
的な感じい？www」

かなりうつとうしい。それはもううつとうしい。思わずここで殴り
殺したくなったが、チャラ男からはたつぷりと聞かせてもらわな
くはないけない。ここは怒りを抑え、常闇は情報を聞き出すことにした

「……誰の差し金だ」

「それ知っても意味ない的な？アヒヤヒヤ！とりあえず死ねよ」

男は指を鳴らす、すると魔方陣が描かれ中から車が出てきてこちら
に向かってくる。中は見るところ無人のようだ。ライエは釘を構え
打ち出す、釘は正確に車の主要部分に刺さり斥力が増す。車は異常
を起こし右に曲がり無人の歩道に突っ込んだ。車からは火があがり、
あっという間に車を包んだ

「ガソリンでもかけてたみたいだな」

「チツ、めんどくせえ」

「だ。ダメだよ二人とも！ケンカはダメ！あの人とは話し合えばき

つと」

「それはない、向こうが死ねって言ったんだ。なら、殺す気だし話は聞かない」

でも…竜守は言葉をもらした。常闇もライエも戦いたくはない。だが、自分達が止まって相手が止まらなかったら、殺されるだけだ。だから、殺られる前に、倒す

「アヒヤヒヤ！まだまだ行くぜ？的ない！」

男の前に魔方陣が三つ描かれる、そしてそれぞれから自動車が飛び出してくる。常闇は地面を足で音をたてて踏む、すると影は伸び波となって車を飲み込む。波は男をも飲み込もうとする、男はなにもせずただじっとして、波に飲み込まれた。波が引く、その後にはなにも残っていなかった

竜守は力を無くし、地面に座り込む。まさか、本当に殺すなんて。人が目の前で死ぬことは、竜守にとっては衝撃的なことだった。しかし二人は男はもういないというのに、いた場所を陰しく見つめていた。まるで、獲物に逃げられた肉食獣のように

「いやー、今のはチヨー危なかったんですけどー。冷や汗もの的な感じ」

上を見る。男はビルの屋上でケラケラと笑いながら三人を見下ろしていた。竜守はそれをわけがわからないといった感じで見つめていた。確かに、あの男は死んだはずだ。自分の目の前で、黒の波に飲まれて。常闇は静かに語りだした

「……………転移系か。飲み込まれる瞬間に跳んだってわけか」

「あれれー？もうばれたあ？少年探偵もビックリな推理速度、的な？」

「いちいちム力つく野郎だ。今すぐ釘バットになりてえか？」

「おお、恐い恐い。んじゃあ殺られる前に逃げる的な感じで、アデュー、的な？」

幾何学的な魔方陣に包まれて、男は消える。はずだった

「逃がすと思ってるのかよ？」

「ッ！？」

男は振り向く、そこにはまるでマッキーで塗り潰されたように真っ黒になっっている人型の何かがあった。男はとっさに殴りかかるが人型の何かはまるで鋼鉄のように硬く、逆にこちらに痛みが走った。何かは黄色く輝いてる目をギョロリと動かしてその手で握り拳を掴んだ

ギリギリと力が込められていく。男は痛み顔に顔を歪める、まるで万力に締められているような痛みだ。何かはゆっくりとその手を上に上げ、もう片方の手で男の首根っこを掴んだ

「カハッ……あ、が……！」

男は宙に浮かび、苦しそうにもがく。何かはそれを見て楽しそうに口をつり上げた

「なるほどな、触れられていると使えないのか。」

「……ぐ……アア……！」

次第に男の力が抜けていく。男の視界は霞み、頭は回らない。死ぬ、ここで、俺は死ぬ。それを見てさらに口をつり上げた何かは首からいい音を出すために力を一気に込めようとした。その時、炎が何かの腕を焼き切った。男はむせながらも思いつきり息を吸う。何かは未だに燃えている切断面を見て後に、床を見る。そこには燃えてい

るカッターが一本刺さっていた

「無様だな、愚弟」

凜とした声が屋上に響く、首を動かすとそこにはなにもかもが真っ赤に彩られている女性が立っていた。その手からは真っ赤な炎を出しながら、タバコくわえて、冷たい視線を男に向けていた

「ゴホッ、ゲホッ……あ、姉者」

姉弟だったのか……何かは目を丸くして二人を交互に見た……似ていないな

「全く世話が焼ける。ほら、とつとつその汚らしい尻を揺らしてみつともなく、情けなく逃げるぞ」

「……すまねえ姉者」

「逃がすわけねえだろうが」

足で音をたてて踏む、影は鋭利な刃となり女性を襲う。しかし、女性がその手を振るうと真っ赤な炎が影を焼き尽くした。物理的な法

則にはあまり縛られることない、ただの影がだ

「ふむ、こちらとしても君を倒したいのはやまやまなんだが。残念ながら愚弟のせいで考え直さなければいけないのでな」

スツと、豊満な胸の谷間から液体の入った試験瓶を取り出した。何かはスツと身構えたが、女性は首をふってその試験瓶をコンクリートの地面に投げた

「それではな」

パキン！と試験瓶が割れる。すると一瞬で白い煙が屋上一帯に広がる。視界は白で埋め尽くされた。これではろくに追うことなど出来ない。少しすると煙が晴れる。そこには炎で焦げたコンクリートの跡以外はなにも残ってなかった

「……逃げられたか」

何かの黒は溶けるように地面に戻っていく。黒がおちると、常闇がなに食わぬ顔で立っていた。しかし、ここで奴等を逃がしたのはいたい。次はいつ、どこで、どうやって襲ってくるか分からない。もしかすると不意をつかれるかもしれない。全ては相手次第、厄介なことになったと頭を掻いた。そして視線をビル内へと入るための扉の方見る

「……あちらさんはもう行ったぜ？隠れる必要はないんじゃないか？」

常闇がそう言うと、扉は静かに音をたてて開いていく。そこには人受けのいい笑顔を浮かべた金髪の少年が立っていた

「よく分かったね。一応ばれないようにはしたんだけど」

「安心しろ。勘だ」

そう、と少年はニコニコしながら常闇を見る。常闇にはそれがとても不快に感じた

「……アンタに一つ聞きたいことがある」

「ん？何かな」

「お前なんだろ？」

「俺の副作用を消したの」

ピクツと少年はわずかに眉毛を動かす。しかしすぐにニコニコして話をした

「さあ、知らないなあ」

「……おいおい、分かってるくせによ。なあ『幻想空間』君」

少年の笑顔が固まる。常闇はそれを闇のように漆黒の瞳で少年を射抜いた

「……あーあ、ばれちゃってたか。そりゃ当たり前だよなー」

「つたりめえだろ。俺の副作用消すなんてそんな大それたことができるのは幻想空間だけだ」

常闇の言っている副作用、それは口調の変化だつたり能力の解放だつたりと色々ある。現在の時刻は13時、太陽は空のてっぺんで輝いていた

「で？なんだ？テメエも俺を狙ってきたくちか？」

「夢がないなー、もうちょっと頭柔らかくしようよ」

「大きなお世話だ」

少年はやれやれと肩をすくめる。常闇は額に怒りマークをつけて少年にいい放った。少年はすぐにニコニコして言葉を続けた

「しいて言うなら戦いたかった。んだけど、先客もいたし、今日は挨拶だけでも、ってね」

以外と礼儀正しい、のか？まあいいか。常闇は重く息を吐いて、肩をすくめた

「ったく。そんな理由かよ。まあいい」

すると、騒音の戻った道路からよく聞く。癒しの声が聞こえる。どうやら心配しているようだ。これは早く安心させてやらなくては

「それじゃあ俺はこれで」

アデュー、と少年はまるで最初からいなかったように消えた。最近

俺の周りってこんな奴ばっかだなと常闇はうんざりした顔でため息をつく。道路から聞こえる声は何やら不安そうな声に変わっている。『クリスマス』『ケーキ』などという単語がわずかに聞こえる。よし、行くか。常闇は屋上から飛び下りその場を去った

空はうんざりするほど明るく、青かった。所々に見える白は青い空にとってもよく冴えていた

今日も、学園都市は平和（？）だ

「直人！あんな飛び下り方して！綾季がどれほど心配したと思っているの！」

「……………すみません」

学園都市、青空の下。可愛らしく怒っている少女に向かって土下座をする男と、それを見てため息をつく少年が見かけられた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4417x/>

【企画】とある創作の学園都市

2011年12月13日20時07分発行